小島威彦著

哲學的世界建設

日本問題研究所

序

世界史上最も大なる地球的轉換が實行されんとしてゐる。

近世ルネッサンスにおけるコペルニクス的轉回は、ヨーロッパのアジア略奪を可能ならしめ、東洋民族に對する資本主義的搾取の近世史を形成せしめた。今や、此の近世史を否定し、世界ルネッサンスを現實化すべき日本エネルギイは、諸民族再建・統一の世界體系を樹立すべきである。

みよ、既に第一次世界大戰によつて沒落せんとした近世形態は、新國家運動によつて辛うじて再構成の段階に入らんとした其の瞬間、早くも再び自己矛盾を深化し、第二次世界大戰への道を辿る。世界史は、此の民族と階級との二重虐殺を行へる近世史的矛盾を克服すべき新なる世界原理を、要求してゐるのである。

此處に、日本は西歐近世の植民地侵略によつて荒廢したるアジア・太平洋圈を復興し、眞に世界新生の大理念を提起せんとする。肇國より、此の日本理念は度々反省され、提示されつつ、其の世界史的實現のエネルギイと主體構成の爲に、洵に永き訓練・忍從・蓄積の日本史を構築し來つたのであ

る。

今や、世界史は日本理念によつて眞實なる闡明をうけ、日本史は新なる世界建設によつて、自己の現實的なる表現をもたねばならぬ。

西歐の植民地、アジア・アフリカ・東歐に諸民族の運命を凝視し來つた私は、今此の輝しき世界史的變革を敢行せんとする日本に歸り來り、衷心より青年に、此の書を贈る。

昭和十三年九月

著者

目次

第三部　日本の世界史的把握

第一部　世界史の日本的把握

一　日本的と世界的

1　世界的日本か日本的世界か

世界的日本といふ言葉ほど馬鹿げた空虛があるだらうか。およそ世界的でない一國家が存在しうるのであらうか。それは恰も社會的個人といふ言葉によつて、その個人の性格、機能を方向づけ得たと考ふる愚かさと選ぶ處がない。いかなる個人といへども一定の社會に於て生存し、その社會的普遍性を媒介にして、即ち或時はその社會的生產物たる言語によつて物語り、またはその經濟的機構を通し

て交渉しうるのであつて、社會的でない個人の現實的存在を誰か思考しうることが出來よう。
　併し、問題は其處にあるのではなく、個人が一定の社會的普遍性に挑みかかり、人々が其處に於て新に交渉しあふことの出來る如き新社會の形態を創らねばならない必然性のうちに存するのである。その時、甫めて社會と個人の問題が現實的に迫り來る。或個人が百度最も社會的機能を果しうる如き機關の主宰者になつたとしても、――内閣總理大臣に或は司令長官になつたとしても、若し社會に新な普遍的形態を提出し得なかつたなら、人はその個人の名を記憶することすら困難であらう。その個人は誠に最も社會的個人であつたにも拘らず、彼が幾千の花環に埋もれて死んで行つたとて、現實的には何等の關り合ひもないのである。それは眞に個人ではなく、事務的器具に過ぎなかつた。
　個人は普遍的形態を作り得た時に、最も個性的であり得るのであつて、其處に、彼が如何なる社會的形態の形成に參與したかを語ることによつて、彼の個性的存在を明かに把へることが出來るのである。この故に、社會的變革の時代に、個人の個性的役割が優れて問題にされ、好んで物語られる。この場合、その個人のもつ理念とその體系が次に來るべき社會的形態に對して果す役割に於て、彼はまた最も社會的でありうる。蓋し、彼の個性が其處に創られた社會的性格を代辯し、新な社會的普遍性と成るからである。

恰も斯の如く一の國家も亦、世界的であるといふのみにては何等の意味をも有せず、それは唯あらゆる國家が世界に於て在ることを解釋することから一歩も出ないのである。今日、ギリシア國家が近世の世界的普遍性を獲得した英國の資本に依つて經營され、世界中の觀光客が甚しく世界的であるバルカンの南端に掘り出された其の古蹟を見物するといふだけで、充分に世界的ギリシアなのである。近世資本主義形態の世界普遍化の途上に於て、支那が如何に大なる地盤を、その資源に於て、市場に於て、勞働力に於て、提供したかといふだけで、完全に支那は世界的支那であり得る。

若しもその世界的ギリシアに世界的役割を果せと命令するならば、彼は更にいとも慇懃に英國と觀光客とに頭をさげるであらう。世界的支那の世界的役割に至つては最早や語るに忍びない。

植民地も亦優れて世界的なのであつて、或植民地がオランダに數百年も屬してゐるといふことがオランダをそれ程長く近世的世界の諸關係の中に生存せしめ、またその限りに於て其の植民地は誠に世界的なのである。從つて、蘭領印度を如何に多くの言葉をもつて世界的であることを解釋しても、それは毫も世界的蘭領印度の問題を提起することにはならない。

斯の如き意味に於て或植民地の世界性を肯定することとは、正にその植民地の近世的被搾取形態を肯定することに外ならぬ。問題は寧ろ、其處に於てあらゆる國家或は民族が存在し關係し合つてゐる處

の此の近世的世界そのものに存してゐるのである。何故なら、世界は一定の性格をもつた形態として現實的に存在してゐるのであつて、その一定の機能を果しつつある世界形態が肯定さるべきなのか、否定されねばならぬかが問題となる。其處に必然的に世界と國家との關係が具體的に問ひ糺されるのである。

洵に個人と社會との關係に於ける如く、國家は如何なる世界を肯定し若しくは否定せんとするか、更に具體的にいふなら、如何なる世界に於て成立し或は如何なる世界を創造せんとするかに據つて、自己を現實的に表現する。其處にのみ、その國家の個性が存し、また其のことによつて世界的役割が現實的に問題となり得るのである。この故に、國家は世界變革に於て最も個性的であり、また最も個性的なる國家のみ優れて世界的となる。

即ち、個人は社會的矛盾に對して如何なる鬪爭と建設をなすかによつて具體的に社會的となり、國家は世界的矛盾に對して如何なる戰爭をなし如何なる世界創造をなすかによつて現實的に世界的となる。然るに今日、日本が世界的日本であることによつて、一層世界的たらんとすることは何を意味するのか。それは此の矛盾に滿ちた近世的世界の形態の中に一層自己を生かし、此の矛盾以外に何ものもなき世界關係とその主體たる西ヨーロッパの資本主義的帝國主義形態を一層掩護し發展せしめんと

するのか。

憐むべく意味なきことである。日本が其處に於て關係づけられてゐる此の世界を如何に把へ、如何に批判せねばならぬか、而して如何なる世界を創造せねばならぬか。このことのみ日本が自己に對して答へ、此の世界に對して戰ふべき唯一の實踐に外ならぬ。此の方向と理念なくして、國民の精神動員は不可能である。脚ある國民は歩くことを得、手ある國民は作業することが出來る。歩き泳ぎ働くことは國民にとつて洵にたやすきことである。その可能なるを何人も疑ふ者はない。恰も日本が世界的日本たるを疑はざると同様である。

併し、問題は斯の如き可能性にあるのではなく、現代の諸國家並に植民地を聯關づけてゐる處の普遍者としての此の世界を、日本が如何に批判し、此の世界の孕む矛盾を如何に克服するか、その方向に横はつてゐるのであつて、其處に國民精神動員の必然性が存するのである。日本が現代の世界的矛盾を戰ひ勝ち、新に諸國家を秩序づける普遍者としての世界形態を、固成すべき世界史的必然性に於てのみ、眞に戰爭と國民總動員が語られねばならぬ。

かくて、日本は世界的日本ではなく、日本的世界を提示し、諸國家が其處に新に誕生し發展しうる如き世界を創らねばならぬ。近世に於ては嘗て英國が自己の植民地大帝國を建立し、その世界普遍化

を通して、近世諸國家の世界關係とその形態を規定した。その一批判者として、ソヴィエト・ロシアは諸共產主義社會の聯盟としての統一國家を作り、其處に新なる世界關係を樹立せんことを企圖する。それに對して、ファシズム・イタリア或はナチス・ドイツはソ聯によつて否定されんとする近世ヨーロッパの再構成の理念を形態化し、以つて近世ヨーロッパの世界普遍性の延長たる新段階を代辯せんことを欲する。

これらすべて、自己の世界性を獲得し、また獲得せんとするものであつて、其處に夫々國民精神總動員の諸類型が形成されてゐるのである。併し、それらの自己普遍化としての世界建設の可能性は、一に自己の世界史的必然性に懸つてゐる。世界史の必然性を擔はずして、自己を世界化することは、恰も個人が自己の理想と考ふる社會を、何等の社會的根據を堅持することなく夢みるが如きものである。近世的世界にとつて代はるべき新なる世界の理念を、世界史的必然性を媒介として提出しうる國家のみ、最も個性的にして、最も現實的なのである。

2　日本的世界と世界史的必然性

近世史に於て最も個性的にして最も普遍的な形態を形成した國家は大英植民地帝國である。オリエントの勃興によつて、中世史におけるヨーロッパとアジアとの交流の新道がうち開かれんとした中世より近世への世界史的變革期に、自己を近世史の世界主體たらしめんとする數箇の國家を大西洋岸に想起することが出來よう。嘗てのローマの「絹の道」に代つて、「黄金の道」を東西に建立せんとする努力は十字軍を通してオリエントと最も密接な關係に入つたイタリア商業都市のうちにみられる。併し、中世的ヨーロッパの主體としてあつた法王廳的世界關係の動搖とオリエント勃興による東ローマ帝國の崩壞過程は必然的にその中世的ヨーロッパの再組織としての新な形態を呼び起し、其處にゲルマンの神聖ローマ帝國を作り上げた。このことによつて近世ヨーロッパを先驅するイタリア商業都市を中心とする地中海文化圏並に其處に流入し來つたアラビア科學文化の繼承發展者として、中世的

再組織の形態をうち破らんとする近世初期國家の擡頭が始まる。

かくて、ヨーロッパの世界文化の潮流はバルカン半島、イタリア半島よりイベリア半島を廻つて大西洋に出で、近世ルネッサンス都市を中心とする西ヨーロッパ諸國の近世史所有の闘爭が血潮と砲聲のうちに續くのである。此の東洋への「黄金の道」をきり拓き、東洋と西洋とを一箇の統一世界となさんとする近世的主體の爭覇は、十六世紀より十八世紀に至る二百年間、即ちイギリスのエリザベス王朝より大ブリテン王國を經て現王室ハンノーヴア家の議會主義確立に依つて、近世國家の主體と形態を決定した。

此處に、十八世紀中葉の英佛植民地戰爭を終幕として、イギリス植民地帝國の基礎が成立したのである。即ちカナダ、インドの獲得に繼ぐにオーストラリア、ニュージーランドの奪取は十八世紀産業革命を捲き起し、イギリス資本主義の躍進期を劃する。その後、喜望峰植民地の强奪より東洋に對する帝國主義的侵略に至つて、甫めてイギリス近世資本主義の世界化形態が完成したのである。

此のイギリス的世界主義は中世の法王的世界主義に對する闘爭を、先づエリザベス朝のイギリス教會獨立を以つて開始した。此處にイギリス的イデオロギイの確立と共に、將に來らんとする近世史を代辯して、中世イデオロギイに對する明確な個性の表現をなし得たのである。此の個性の勢力的姿勢

はアダム・スミスの自由主義、ホッブス、ヒュームの經驗主義を通してベンサムの巧利主義並に議會主義を果敢に實行せしめ、遂に近世資本主義形態の世界的主體を樹立したのであつた。

併し、斯の如きイギリス世界主義は十九世紀後半より既に諸矛盾を曝露しつつ、新なる世界形態への變革的危機線上をあはただしく辿り始める。國內の社會機構においては階級の對立を惹起し、國外の植民地關係においては民族問題を生來し、自己の資本主義の世界均衡においては資本主義諸國家との對立激化を增大するに至つた。かくて、十九世紀末のドイツの勃興は遂にイギリス資本主義の統一關係の破壞的危機を激化し、世界大戰を誘發する。併し、ヴェルサイユ條約によるイギリスの帝國主義的發展はその極點に到達すると共に、一方に於ては階級的矛盾と民族的矛盾とをその帝國主義形態の內部に熾烈化し、他方に於てはソヴィエト・ロシアの成立によつてその近世的世界形態自體の否定的危機を尖銳化せしむるに至つたのである。

此處に近世的世界主體たる大英植民地帝國の衰運が始まり、その諸矛盾を克服すべき新世界建設の主體を求めんとする世界史的必然性が胎動する。

此の世界變革の歷史的必然性は、世紀末より既に俊敏なる魂を搖り動かし、マルクスの近世經濟の批判を生み、ニイチェをしてヨーロッパ文化批判をなさしめ、シュペングラーをして、ヨーロッパの

沒落を豫言せしめた。イギリス自體にあつても亦その貴族主義的僞善主義の世界制覇に對する義憤はバイロンやキーツのロマン主義的反抗を通してワイルドやショーの曝露的憤懣となり、今やイギリス資本主義の近世的世界形態に對する否定的批判は地球の全面を蔽はんとしてゐる。

顧みるに、曾てローマは「絹の道」によつて地中海圏とオリエント圏の統一世界を建設し、イギリスは「金の道」を通じて西洋と東洋の統一世界を構成した。而してローマが地中海並にオリエントにおける古代諸都市を、世界法の紐帶による統一國家を形成したる歷史的類型をイギリスは一層擴大したる世界面に於て、世界資本の蓄積をもつて、諸民族の搾取的統一帝國を成就したのである。併し、共に他民族に對する否定、征服、壟斷をもつて世界を一貫する道路を開拓せんとしたものであつた。

即ち、ローマはオリエントの文化的經濟的通路の獲得、繼承によつてヨーロッパとアジアとアフリカに跨がる世界動脈に自己の法治的血液を貫流せしめた。イギリスは、アジアのヨーロッパへの逆襲的暴風雨、成吉思汗的エネルギイによるヨーロッパ中世騎士道の崩壊のうちに混亂化せる陸道に代ふるに、アラビア科學文化に媒介されたる海道をもつて、近世的世界を貫徹する「金道」を獲保した。かくて、イギリスの海賊的エネルギイは自己の經濟的制覇の脈搏をアジア、アフリカ、オセアニアの世界四大陸の中に浸滲せしめたのである。

此のイギリスの海賊的エネルギイが山賊的エネルギイを併有し、以つて近世資本主義世界統一が今や正に完成されんとした時に、既に其處に二重の大なる矛盾は前述せる如き世界史的變革の谷間を深く掘つたのであつた。

被搾取階級の擡頭による社會的矛盾の激化と壟斷されたる民族勃興による世界的矛盾の爆發。此の二重矛盾の同時解決の世界史的必然性こそ、全く新なる世界統一の形態を要求する。此の新な世界形態は、ローマやイギリスが成した世界統一を絶對的に擴大した地球的世界國家として、彼等の其の統一媒介たりし「絹道」や「金道」に絶對的に代はるべき「王道」の建設を肇めねばならぬ。

此處に、日本的世界の理念が世界史の上に新に登場し、今日迄の誤謬と悲慘に滿ちた世界僞史を否定すべき世界正史の新生の主體として、肇國以來諸民族の統一國家を固成し來つた悠久の蓄積的日本エネルギイの自己擴大が始まるのである。このことは併し、諸民族の否定の上に成立せる近世的主體たるイギリス植民地帝國に對して、その近世資本主義形態の決定的地盤として追ひつめられたアジアの反撃を代辯すべき世界戰爭を必然化する。

この世界戰爭こそ、近世末期二十世紀初頭における近世的ヨーロッパ國家の自己矛盾の曝露に過ぎなかつた世界大戰に對して、近世を否定するのみならず今日までの全世界僞史を克服するに足る世界

統一形態を新生すべき世界聖戰として、自己を明確に區別せねばならぬ。

3　世界戰爭と日本イデオロギイ

新世界建設として、此の世界戰爭は日本エネルギイを選ぶと共に、その方向を決定した。滿洲事變以後今日の支那事變を通じて、此のエネルギイをして近世主體たる植民地帝國の地盤、インドとカナダとオセアニアへの統一戰線擴大の必然的發展を辿らしめる。かくて、陸海空路の綜合的獲得と相俟つて、政治・經濟・思想の新形態を樹立すべき綜合戰は驚くべき變換を展開せんとしてゐる。

近世國際聯盟のうちに再生產されたローマ世界法のもつ自己擁護の法概念は、共處に否定された諸民族を再建すべき天皇政治の世界法の前に伏從せんとする。近世資本主義における世界經濟の孕む民族と階級の二重搾取は、その個人主義經濟より階級主義經濟を經て、諸民族或は國家群經濟へ移行しつつ、今や共處に撲滅せしめられんとする諸民族の解放の主體となるべき國家エネルギイの世界經濟

の下に、解消せんとしてゐるのである。

かくて、世界經濟は他民族に對する搾取と僞瞞として其の役割を果し來つた金本位制より、原始的經濟力たる國土並に國民のエネルギイの單位へ轉換するに至つた。此のエネルギイの擴大發展は日本世界經濟の諸關係を樹立すべき世界戰爭を必然化する。

斯の如き日本世界政治・經濟の樹立はまた、常に日本世界主義イデオロギイに依つて方向づけられ體系化されねばならぬ。此の新世界文化體系は、政治・經濟の諸關係を變革するのみならず、近世的世界によつて壞滅せしめられんとした諸民族のエネルギイとその文化を復活し新生せしむべき眞に統一的な人類文化を形態化するものである。

アジアの古典として、諸民族並にそれら文化形態の統一的範例として、最も獨立的な最も個性的な天皇國家を連綿として展開し來つた日本は、今や世界を統一ある宇と成す其の世界主義を實現すべきエネルギイ蓄積の二千六百年史を畢つて、世界僞史より世界正史への最も大なる世界史的變革を媒介すべき世界戰爭の段階に入つたのである。此の世紀を通ずるであらう最も劇動的な鬪爭段階に於て、如上の政治・經濟・思想の諸關係は變革されつつ、日本世界主義は自己の理念體系を普遍化し、以つて新世界文化の統一形態の完成をみんとする。

今や既に、支那事變を通じて、現實的に世界の敵が何處にあり、近世史掠奪の資本主義的植民地帝國への闘爭を如何に敢行すべきかを知悉せる日本は、自己のイデオロギイ體系を徹底的に展開せねばならぬ。然るに、その思想陣營の動員に對する方向と方法、計劃と內容に至つては洵に危惧せざるを得ないのである。

一方に於ては近世兒として生長したる經濟一元論、近世的合理主義によつて、他方に於ては近世的主體としての西歐の普遍化過程のうちに育まれた西洋日本イデオロギイ、然らずんば悲痛にも世界を放棄せんとする矮小日本主義によつて阻まれつつあつた日本エネルギイは、斷乎として國民精神總動員を組織化せねばならなかつたのである。併しながら、此の場合、或はナチス・ドイツに或はファシズム・イタリアに、或はまたソヴィエト・ロシアのイデオロギイ陣營に追隨するが如きは最も笑ふべきことであらう。

蓋し、夫等の諸イデオロギイはもともと西歐近世世界主義の自己矛盾の爆發的表現に外ならず、唯「世界の敵」に對する日本世界戰爭の過程に於て、いやしくも近世的矛盾を自覺しうる國家は之を味方と化する意味に於てのみ光榮ある共同戰線上に立たしめねばならぬ。今日迄の如何なる國家も、自己を犧牲にして諸民族を新生せしむべき世界統一の爲に戰ふことはなかつた。然るに、斯の如き自己

擁護の國家に對して、新なる世界正史を創めんが爲に自己解放をなさんとする日本は、最も個性的なる自己の世界主義を明瞭に表現すべきである。

此處に、日本イデオロギイは世界史のあらゆる文化高峰を俯瞰しうる日本史觀をひつさげて、世界變革の激浪の中に泰然と立たねばならぬ。世界史における東洋の防塞たりしオリエントの二大民族、ユダヤと回敎徒に對して、東洋文化形態の夫々の段階における擔手としての役割を果せるインド諸族、漢民族、蒙古並に滿洲族に對して、東洋文化圈における統一文化形態として集積發展せる日本文化を徵して賦與しうる日本イデオロギイ體系が、諸思想陣營を通して、現實的に具體化されねばならぬ。東洋の諸民族の中に、斯の如き思想陣營が確立されると共に、西洋の諸國家に對してはナチス・ドイツ、ファシズム・イタリア並にスペインを通して、更にはサラザール・ポルトガル並に南米のファシズム諸植民地的國家を媒介として、日本イデオロギイの傳承的機能を發揮せしむべきである。恰も嘗てシーザーのガリア並にブリトン遠征を通して、ローマに吸收されたオリエント文化を蠻族ヨーロッパ諸民族に傳播したる如く、日本盟邦の世界戰爭參加を通して、日本世界史觀の種子を蒔かしめねばならぬ。

内にあつても外に對しても、斯の如き新世界統一國家建設の日本世界イデオロギイの普遍化闘爭の

陣營を强化擴大すべき段階は既に到來した。併し、最も重要なことは、かかる思想陣營の諸組織や制度にあるのではなく、かかるイデオロギイの方向と體系が創られることであり、それなくして如何に多くの機關を設け、如何に尨大な組織を敷くとも、盲目なる自己消耗的惡化に他ならぬ。

ソヴィエト・ロシア、ナチス・ドイツ、ファシズム・イタリアの如きに於てすら、また蔣政權支那にあつても、組織と陣營の前に自己のイデオロギイ體系が先行してゐるのである。理念なくして何事をか爲し得よう。未だ歷史は、光なくして照しみることを聞かない。

我が肇國の理念は嚴然たる自己のエネルギイ地盤の上に培はれ、今や此の世界史的變革の必然性の裡に、再び新鮮なる方向と體系をもつて展開されねばならぬ。かくて、幾千年を生きた日本第一次神話は、後代の地球的統一世界を生きる世界正史第一次の神話と成る。今、此の「第二の神話」が生まれねばならぬ。

二　東洋と西洋

1　ペルシア戰爭

大陸を背負つて、ペルシア灣とチグリス・ユーフラテスの沃土を地盤に、原初古代統一圈を築き上げたスメール民族の分解と擴散。その後に續く諸民族の世界史は、悉く自己の普遍化と統一化の戰であつた。

ナイル、チグリス・ユーフラテス、インダス、揚子江、黄河における數千年に亘る諸民族の鬪爭期

を經て、アジア大陸の西半島たる現在のヨーロッパが漸く大陸アジア圏と接觸、交流の可能性を有つに至つたのは、紀元前七世紀のギリシア都市勃興期以後に屬する。

これに先んずる多島海文明の紀元前三十世紀よりトロヤ戰爭に至る二十世紀間における形態は、エジプト、フェネキア、バビロンの東方文化圏内に横はる一翼に過ぎなかつた。此の圏内に侵入し來つた北方未開民族が、その遊牧放浪の社會より都市生活へ移行しつつ、古代都市國家を建設すべき必然性のうちにおかれた、其處にトロヤ戰爭を歌ふホメロスの精神は、その後のヘレン民族の統一的發展への傳說となる。併し、ギリシアに生れた都市國家の諸形態は、その頃既に爛熟せる都市的國家の段階にあつた小アジア文明、並にその延長たる多島海文明の繼承に外ならなかつた。

紀元前七世紀の中葉、アテナイはオリエント通商による貨幣經濟の成立を通して商工的都市國家の成立・發展を遂げんとするや、ヘレン民族の諸都市國家聯盟とその經濟的、文化的地盤たる東方への意慾のうちに捕はれたのである。併し、未だアテナイのデモクラシイと、スパルタのリカルガス法典による寡頭政治との抗爭を續けるのみであつたが、そのヘレン民族の東方への必然的エネルギイは、イオニア人の海外植民をして、遂に紀元前五世紀初頭、ミレトス市のペルシアよりの獨立を企圖せしむるに至つた。

然るに、アジアにおける民族王國の闘爭と發展は、既に諸王國の支配形態としての帝國段階を作り上げてゐた。ペルシスに據るイラン王キュロスは紀元前六世紀、北方メジア王國を倒し、中部新バビロニアを討ち、小アジアのリジアを呑む。かくて、フェネキア、シリアを併せ、遂に東はカスピイ東南バルタヴ並にインダス流域より、西は小アジア沿岸のギリシア都市植民地を支配下におき、ペルシア帝國の基礎を構築するのであつた。

このことは、恰も古へのスメール統一圏を夢想するかの如く、その東西分解の跡を尋ねつつ、ゾロアスターの教典「アヴェスタ」の光に照されて、東はヒンヅークシの山路を越え、西はエジプト並にフェネキアの地中海を渡らんことを欲する。新バビロンを陥れては、その敵囚の身として正に滅びんとせるユダヤ、大なる大陸建設の宇宙論の後繼者エホバの選民を解放し、そのモーゼ法典による神と法と民の統一王國を再建せしめ、インダス流域を壓しては、アリアン民族のヴェーダ的階級社會に代はるべき佛國土建設の使命を釋迦族に負はしむる歴史的機緣を作る。此の原始佛教並に釋迦族の一方に於てはデカン高原を越え、他方に於ては「戰國時代」に通ぜんとする道は、極東よりヨーロッパへの世界史的通路を用意するに至つたのである。

此の原初統一國家への復古運動は、キュロスの子カンビュセスに至つて、エジプトに及び、その子

ダリウス王に於て、ギリシア北方トラキア、マケドニアを征服し、遂に東はソグトを越えて、ヤクサルテス河畔を占め、此處にヨーロッパ、アジア、アフリカに跨がる空前の大帝國を建設するに至つた。

かくて、一方に於ては、フェネキアをしてアジアを放棄せしめ、その延長たるカルタゴの發展を導き、共處にローマ共和國の擡頭とアジア文化のアフリカ移植との通路が開拓され、他方に於てはマケドニアは此の大帝國並にギリシア諸都市を通して、大陸の世界文化を呼吸しつつ、世界史的通路獲得への野望と並んで、そのマケドニア・エネルギイを方向づけんとするアリストテレース體系出現の歴史的可能性を生育したのであつた。此處にアジアとアフリカの統一國家を繼承せんとする、ヨーロッパの歴史的文化的礎石が置かれたのである。

然るに、ペルシア帝國下におかれた小アジアのギリシア植民都市の獨立を知るや、ダリウスは大軍を送つて、正に世界史よりとり殘されんとする矮小なるギリシア都市國家を、一擧に葬らんとする。前四九一年、アジアの大帝國ペルシアとアテナイを盟主とするギリシア都市同盟との戰爭。洵にアジアとヨーロッパとの最初の戰爭ともいふべきものであつた。

此のダリウス並にその子クセルクセスの二代に亘るペルシア・ギリシア戰爭は、サラミスの海戰並にプラテーエの陸戰によつて、遇然にもギリシアの決定的な勝利をもつて終つたのであるが、併して

の戰爭は世界史に最も重要な段階を產み落した。それは單に、その後に續くヘレン民族文化の極盛期「ペリクレス時代」の豪華なるヨーロッパ古典文化を完成したといふことではない。かくギリシア都市文化を、アジアとの獨立に於て、ヨーロッパの古典と解釋せしむるものは、實にマケドニア並にローマの新なる世界主體の樹立を通して、ヨーロッパが甫めて世界史上に登場してきた其の歷史形成なのである。もし、アジア文化を繼承し發展したる其のギリシア文化が、自己を世界文化形態として普遍化せしむる歷史形成力、即ちマケドニアとローマをもたなかつたなら、それは單にアジア文化の一繼承形態に過ぎなかつたであらう。

併し、問題は此の興味ある文化形態と歷史形成力との解釋にあるのではなく、むしろヨーロッパの古代都市國家より古代諸民族統一國家への展開にある。

ペルシア・ギリシア戰爭は、諸民族統一國家形態と都市國家形態との鬪爭であつて、ペルシア帝國の敗北にも拘らず、世界史は諸民族統一國家の形態をして勝利を得せしめたのであつた。ローマの勃興が即ちそれである。マケドニア・エネルギイは、アジアの世界史通路を逆襲し、以つてローマのアフリカ、並にアジアへの道を開拓する魁けであつた。

アリストテレースは、マケドニアのアレキサンダー大王をして、狹隘なるギリシア都市國家を否定

せしめつつ、ペルシア帝國が再建したる大アジアと北方野蠻民族との統一形態たるコスモ・ポリス建設を、ギリシア文化の媒介によつて企圖せしめる。ペルシア・ギリシア戰爭後のペルシア帝國の衰退は、此のアレキサンダーのコスモ・ポリス建設戰爭を可能ならしめ、正にペルシアの整備したる世界統一の道は、そのままアリストテレース哲學の通路と化したのである。

此處にアジアとギリシアとの華々しい文化交流の潮は捲き起り、ギリシア文化を媒介的主體となせるアレキサンドリア文化の宏大な生長が始まる。若き大王はユダヤ王國を壞滅し、エジプトを再建し、東はインダス河に達し、ペルシア女王との結婚を以つてし、アレキサンドリア都市建設を至る處に企てるにペルシア帝國を繼承するのであつた。前三二三年、大王はバビロンに陣歿し、その大業は挫折したとはいへ、ローマをアジアへ導入し、その意圖の世界史的繼承者たらしめた。洵に、彼はヨーロッパとアジアを結婚せしむるのみならず、ヨーロッパにおける世界帝國たらんとする諸民族統一國家としてのローマを媒介したのである。

彼がユダヤを否定したるは、そのメシアの選民として民族融和を肯じなかつたことにも據るであらうが、むしろ重要なことは、アジア的宇宙論による地球統一國家形態に對する信仰の强靱さに恐れたからであらう。實にユダヤを理解するかせざるかは、東洋と西洋との分岐點を物語るものであつて、

東洋に於ては、ユダヤ排撃の一事例さへ發見し得ないのである。ユダヤはかくて、王國壞滅後更に深刻なる人生觀を構成しつつ、アレキサンドリア文化を通して、エホバより「人間クリスト」への轉化を用意し、將に來らんとするローマ進擊に對するアレキサンドリア圈諸民族の共同防衞としての統一宗教の陣營たらんとするのである。

更に、アレキサンダーのインダス流域獲得は、チヤンドラをして印度マガタ王國を滅亡に導き、マウリヤ孔雀王朝を建立せしめ、セイロン南下による佛教圈擴大を可能ならしめる。このことは、次に來るローマの「絹の道」の南方路を準備するものであつた。

2 アッチラ戰爭

斯の如くペルシア戰爭は、ヨーロッパに諸民族統一國家の歷史的範例を垂れると共に、アレキサンダーのアジア逆襲を通して、ローマの國家統一、更にはその共和國より世界帝國への發展を可能なら

しむるものであつた。嘗てギリシア都市勃興期に小アジア系に屬するエトラスカン圈が、自己の都市國家をローマに築いてより、前四世紀におけるマケドニア・エネルギイの擴散に應ずるエトルリアの確立を通して、ローマ・カルタゴ戰爭即ちポエニ戰爭に至る三世紀間こそ、新なる世界主體たる南ヨーロッパの擡頭期であつた。ローマは階級鬪爭の諸矛盾激化にもがきながら、アレキサンドリア文化圈の統一者たらんとするエジプト・アレキサンドリア、並にカルタゴの地中海路把握への鬪爭によつて自己の共和國家體制の統一を圖る。此處に尨大なるアジア並にアレキサンドリア文化の武器を獲得し以つてアジア帝國の繼承者たらんとするのである。

此のポエニ、マケドニア、シリアの三大戰役によつて、東方植民地を獲得し、アリストテレース哲學路の帝國主義的再建に乘り出さんとするローマ共和國發展期こそ、東西交流の世界史上最も大なる躍動・變革の時代であつた。世界史の南方通路建設がペルシア帝國並にアレキサンドリア・コスモ・ポリスによつて擴大され、共處に南はマウリヤ王朝のセイロン文化圈を媒介とする南支、南洋、日本、カナダの太平洋圈に連なる、世界史南方通路の成立をみる。北は印度中國の瓦解と新展、カスピイ東路開拓による天山南路並に北路の開通をみる。

此の中央アジアの東西擴大に諸民族の崩壞・移動・建設の世界史的潮流の中に、日本はその諸民族

統一國家の國產みを修理したのである。其處に、南北世界史通路の開通による太平洋圈と天山より蒙古、滿洲に至るアジア大陸圈との極東合流形態が成立すると共に、その大陸圈の主體たらんとする匈奴の激烈な勃興が始まるのである。かくて漢民族は、此のアジア南北潮流にはさまれて、その戰國・諸子百家の時代を經つつ、支那南北統一國家を建設し、以つて此の激流の中に自己を固成すべき必然性のうちにとらへられた。北に向つては萬里長城をめぐらし、南に對しては諸民族統一の王道イデオロギイの復活と實現を圖り、太平洋圈に對する自己確立によつて其の封建的基礎をおく。

此處に、漢は北方を長城と結婚政策をもつて辛うじて防衞しつつ、南方に向つては南北世界史通路の合流形態としての日本統一國家を憧憬しつつ、太平洋圈を抱くアジアの主體として、自己を擴大、統一せんことを急ぐのである。

此の漢民族の擡頭によつて、匈奴はその南進策を放棄して、世界史北路を西方に向つて驀進し始める。このことは、匈奴をして漢の古代封建制並に武士制度と中小アジアの擴散されたる文化とを統一せしめつつ、カスピイ並に黑海に亘る北方蠻族ゴートを西漸せしめるのであつた。

然るに、ローマ共和國は、自己の統一的世界帝國への合理化を新プラトーン學派に學び、以つてアリストテレース哲學路を限なく步まんことを欲する。かくて、アレキサンドリア文化を貪りつつ、エ

ジプト並にアジアの壯大を憧憬し、他方北ヨーロッパの野蠻民族を教化統一し、自己の憧憬を實現すべきエネルギイを蓄積するのであつた。併し、國内にあつては、其の自治植民地の發展による政治的對立、奴隷制の矛盾は三頭政治の段階を導き、遂に帝國主義段階に入るのである。このことこそ、シーザーのガリア、ブリトン、ゲルマニア遠征後に亞ぐエジプト帝國との接觸によつて、決定的となつたのである。

斯の如くして、アフリカ並にアジアにおける二大世界帝國は、マケドニアを媒介として、ローマ帝國に繼承されると共に、そのローマ文化を媒介として、ヨーロッパは世界の大陸文化を呼吸し始める。此處に、ヨーロッパは世界史の一單位として登場する可能性を惠まれ、他方、ローマ帝國の繼承發展したる「絹の道」によつて、西洋と東洋との新なる交流が行はれるのである。インダス河並にヒンヅークシ峻嶺を境として、支那とローマの高峯が東西に屹立した。

併し、アジアにおけるローマの進擊に對する防塞として立つたクリスト敎のローマ侵入、匈奴西漸によつて移動するヴアンダル・ゴートのローマ掠奪、そのゴートに震撼するゲルマンの南下、この東方並に北方よりの脅威は、ローマをして遂にヨーロッパを放棄せしめ、此處に東ローマ帝國のビザンチューム文化とローマ帝國公認クリスト敎文化の二大陣營がヨーロッパを代辯するに至つたのであ

る。此のローマ帝國の分裂と萎縮の後、世界史は帝國的統一への意慾を失ひ、分散・闘爭の苦悶を續けつつ、辛うじて「絹の道」による東西交流が維持されて行つたのである。

然るに、匈奴アッチラの驀進はヨーロッパの至る處に諸民族の蜂起を促し、ヨーロッパ中世史を先驅するのであつた。アッチラに追ひ立てられた西ゴートは三世紀より六世紀に渡るヨーロッパ古代より中世への變革期を、ヴァンダリズム戰爭をもつて埋める。四一〇年西ゴート族王アラリックのローマ掠奪を頂點として、西ローマ帝國の滅亡、延いてはローマ帝國領たるガリア並にイベリアを經てカルタゴへの蠻族戰爭こそ、恰もローマ帝國の湖、地中海を中心とする帝國領を瓦解せしめ、ヨーロッパ諸民族の新生への殺伐たる空隙を形作るものであつた。此の空隙の中を、アッチラは驅駛しつつ、南下しては東ローマ帝ユスチニアヌスに舊ローマ帝國復活をなさしめんとし、東西ゴートを擊退し、北進してはバルチック圈を勃興せしめ、遂にハンガリイにヨーロッパ騎士道の基礎を置く。

此のヨーロッパ諸族の擡頭を促進せるアッチラ戰爭こそ、洵にローマ帝國治下にあつたヨーロッパ諸侯の獨立と諸王國建設を可能ならしむるものであつた。即ちゲルマンを移動せしめては、イングランダ王國を形成せしめ、西ゴートを媒介としてフランク王國への道を拓き、西ゴートを南進せしめてはスペイン王國を建設せしめる。東南しては東ローマ帝國の生命を持續せしめ、ビザンチューム文化

圏を維持し、止りては中央ヨーロッパを築く。かくて、此の南アジアの要塞、ハンガリイ、バルカン、ビザンチユームを占據し、以つて東方へのローマ帝國路を獲保せんとする意欲は、その後のヨーロッパ史の宿命となつた。

併し、斯の如きローマ帝國路たる世界史の南路は、アッチラ戰爭による帝國衰運を機として、ペルシア帝國再建の可能性をアラビアに選ばしめるのである。更に東しては、後漢は西域に發展し、「絹の道」を通して世界史の脉搏に呼應しつつ、匈奴の西漸によつて其の脅威より逃れ、正に太平洋圏を抱かんとしたが、其の文化的、經濟的擴大は遂に自己の政治組織の困亂を來し、其處に隋の天下再組織を通して、唐の燦然たる封建的形態が生育するのであつた。此の唐を媒介として、日本は世界史を吸收しつつ、自己の凝結と充實の時代を作るのである。

此の時代に、マホメットはペルシア帝國再建を目指して、故郷メッカを捨て、アラビア統一の旗を上げる。それは洵に、ゾロアスターと舊約との統一を企圖せんとするものであり、マツダとエホバはその現實的統一力としてのアラーとなつて、世界史南路を力強く照すのである。此の古代的アジア統一を再建せんとする回教徒帝國は、遂にユダヤとペルシアの統一を實現化し得なかつたとはいへ、イベリアよりスマトラに亘つて、古代最高文化圏を復興し、法王廳的ヨーロッパ中世に對して、豪莊な

るアジア世界帝國を顯示するのであつた。

西しては、エジプト、カルタゴを越え、法王廳に抗するイベリア・ゴート王朝を援けて、西サラセン帝國を建設し、以つて地中海並に大西洋を壓す。現在のリビア、チュニス、アルゼリア、モロッコ、セネガル、ナイゼリアの西北アフリカに、その帝國下に屬すべき回敎徒王國を形成しゆくのである。南しては、印度洋を渡り、東アフリカ中部に位するザンジバル島よりスマトラに至る全印度洋の海上權を掌握する。東西貿易並に文化交流の海上根據地は此處に誕生し、スマトラは日本、支那、印度、アラビアの合同據點となつたのである。

更に東漸しては、バグダットに東サラセン帝國を建設し、アフガンにガズニ回敎徒王國を創建し、遂に全印度を征服する。かくて、紀元前三世紀の孔雀王朝よりアンドラ王朝、大月氏に至る十二世紀間の佛敎國印度は全く破壞され、奴隷王朝への道を辿るのである。併し、此の回敎徒の印度並に西域への進出は、唐を繼承せる宋の海外發展、並に日本の南洋への進出を呼び起し、ヨーロッパにおける法王廳並に東ローマ帝國の東西貿易路を遮斷して、ペルシア、アレキサンドリア・ローマの世界史通路を、完全に回敎徒圈內に保持し、一層擴大したのである。

3　成吉思汗戰爭

斯の如き回教徒圏の世界史的形態の發展は、ヨーロッパに於ては、クリスト教的中世封建制の文化的、經濟的基礎を動搖せしめ、十世紀、ライン以東を領有せるゲルマンのオットー大帝をして神聖ローマ帝國を創建せしめる。大帝は法王權との對立のうちに、嘗てアッチラ戰爭によつて培はれた騎士道的中央ヨーロッパの統一を企圖するのであつた。併し、法王は聖地回復の名の下に、一方に於ては封建諸侯の獨立的發展を牽制せんが爲、他方に於ては「絹の道」再建により回教徒圏崩壞を意圖すべく、十字軍を東方へ限りなく繰り出すのであつた。

この十一世紀より二世紀間に亘る十字軍は、徒に中世封建制の母體そのものの衰微と、十字軍の頻々たる通過によるイタリア商業都市の勃興とを招くのみであつた。併し、最も重要なことは、アレキサンドリア文化圏を繼承し、その廣汎なる東西海外發展を遂行したるサラセンの尨大なる科學文化の

堆積がイタリア、スペイン、ポルトガルの商業都市並にビザンチユームを通してヨーロッパへ流れ込んだことである。此處に、ヨーロッパはアラビア科學の獲得と並んでギリシア・ローマへの憧憬と東方への意慾をもち始める。

かくて、法王權の崩壞過程が始まると共に、十三世紀における近世初期商業都市勃興に伴ふ近世ルネッサンスへの地盤が構成され、サラセン文化に乘つて世界史南路は地中海より北大西洋に通ぜんとする。このヨーロッパの激動期こそ、實にまた東洋の華々しい擴大と躍動の時代であつた。宋の南進策は、漢民族發展期における滿洲、蒙古、西域に對する防壁を緩め、此處に金國をして滿洲統一並に中國への侵入を可能ならしめると共に、北にあつては匈奴西漸以降蠕々、突厥、回紇と變遷しつつ、其の擴大統一を窺つてゐた蒙古をして南下せしめた。此の動亂のうちに、西域の回教徒圈統一が成就して行つたのである。併し、此の蒙古の南下こそ、十三世紀元朝の基礎を確立すると同時に、蒙古をして豐饒なる太平洋文化圈を繼承せしめ、アッチラの開拓せる世界史北路と、サラセンの發展によるスマトラを中點として東西に洋々と伸びる日本よりスペインへの世界史南路とを統一し、世界史の主體となるべきエネルギイと展望を確保せしめたのであつた。

此の蒙古は、斯の如き南路完全獲得の企圖に於ては日本に破れ、その後秀吉の南路世界史統一への

日本エネルギイに讓歩するの止むなきに至つたとはいへ、北路に於ては漢文化とサラセン文化とを自己の内に統合しつつ、自己の個有なる城塞都市建設による卓拔せる文化構成力を至る處に發揮するのである。

斯の如き世界史北路再建の成吉思汗戰爭は、如上のヨーロッパ變動に決定的な歸趨を齎した。スラヴの地にあつては、九世紀のノルマン酋長リューリックの東ローマ帝國侵略よりスラヴ征服に奏功せるウクライナ・ロシアをして、ロマノフ王朝の廣大な近世的ロシア統一へ展開すべき基礎を構成せしむ。その基礎構成の媒介者こそ、イル汗國とキプチャク汗國であつた。ハンガリイに入つては、ヨーロッパの前衛としてまた東西合流形態として、其の光榮ある騎士道文化を誇る中歐封建體を破壞し、かくて神聖ローマ帝國の瓦解を決定すると共に、匈奴チムールを押し出し、そのヨーロッパ奔走を必然化する。ペルシアに入つては、イル汗國を樹立し、小アジアにおけるセルジュク・トルコの擡頭とその東ローマ帝國繼承を可能ならしめる。併し、このトルコ擡頭はチムールとの抗爭を激化し、チムールをしてアンゴラの戰に於て、東ローマ帝國を救出せしめつつ、イル汗國を倒し、印度攻略へ展開せしめるのであつた。

此の成吉思汗戰爭による十三世紀より十六世紀初頭にかけてのスラヴ、北中ヨーロッパ、小中アジ

ア、印度に跨がる大闘爭期は、ヨーロッパ中世の崩壞を決定すると共に、西ヨーロッパの近世的勃興を促進せしめたのである。併し、此のヨーロッパの轉換期における輻輳せる諸條件を語るよりも、寧ろ此處では成吉思汗戰爭が近世的世界史を決定すべき新世界史通路を發見せしめた中樞點を、指摘するのみで充分であらう。

それこそ、マルコ・ポーロの成吉思汗路を逆入する元朝との交渉であり、其處に見出された東洋の富、ジパング・日本への道であつた。かくて、近世ヨーロッパの世界制覇への「金の道」は地球の全面を貫通し始めるのである。

十五世紀末、イタリア、スペイン、ポルトガルの近世初期商業都市の中から、アラビア科學の天文、航海學を繼承せる新興精神は、此の「金の道」を尋ねて大西洋廻航の船出をするのである。アジアの世界史南路は既に成吉思汗戰爭に亞ぐチムール戰爭によつて擡頭せるトルコにバルカン、小アジアのビザンチューム圏を阻まれ、北路も亦キエフ・ロシア、イル汗國によつて遮斷され、此處に地中海新興都市を地盤とするヨーロッパ諸王國は競つて極東への新通路開拓に乘り出す。コロンブスのアメリカ發見、ガマの喜望峰廻航による印度洋路の發見は、スペイン、ポルトガル、オランダの近世植民地獲得による商業國家を形成せしめ、中歐にあつてはイタリア商業都市並に王國を地盤とするハンガリ

ア・オーストリア帝國を確立せしめる。かくて、ヨーロッパは宗教戰爭、三十年戰爭、農民戰爭、無敵艦隊戰爭、英佛百年戰爭、トルコ戰爭に至る「金の道」を握らんとする近世初期諸國家の相互鬪爭の渦中に投げ込まれたのである。

4　イギリス戰爭

斯の如きヨーロッパ相互鬪爭は、最もイタリア諸王國における新興近世諸國家の政治干渉のうちに表現されると共に、新舊世界史通路の爭奪戰によつて新世界主體の決定を競ふ。成吉思汗戰爭を仲介として新聖ローマ帝國を後繼したるオーストリア帝國とロマノフ・ロシア帝國は、イタリア、ビザンチューム、ウクライナの舊世界史二大通路の關門への志向を、セルジュク・トルコを繼ぐオスマン帝國に遮られ、悽愴なるバルカン、ウクライナ、コーカサス、小中アジア戰爭を通して、北東進攻策へ轉化してゆくのである。

舊世界史通路は、ロシアとチムールル戰爭の構成したるトルコ並に印度ムガールの三大帝國によつて分割され、新世界史通路は西ヨーロッパ諸王國によつて爭奪される。然るに、此の十六・七世紀こそジパング・日本は元寇以後足利時代を經て、自己凝結より自己擴大への膨脹期であつて、成吉思汗戰爭によつて近世世界史のうちに轉換・解體してゆく元の太平洋圈を繼承し、再建すべき必然性を以つて、世界史通路の中に現れた。其處に、北京を中軸とするアジア大陸——東はアラスカより西はマレー半島に、北は蒙古より南はオセアニアに及ぶ太平洋を抱くアジア大陸の、諸民族統一帝國として、日本は秀吉的エネルギイを方向づけたのである。近世史における東洋の概念は此處に生れた。

他方、アメリカ植民地大陸より喜望峰を經て、莫臥兒帝國に及ぶ大西洋新世界路における諸民族分解帝國として、イギリスは其の覇業を競ふヨーロッパ新興國家の相互對立・分解に成功せる自己の海賊的エネルギイを大西洋の東西に擴大せんとする。此處に近世史における西洋の概念が成立したのである。イギリスは此の西洋の主體を確立せんとする十六世紀の英國教會の獨立より、無敵艦隊戰爭、文藝復興、スコットランド合同、新大陸移民、イングランド革命を經て、名譽革命によるオランダとの協同體を形成し、以つて十八世紀初頭における大ブリテン王國の基礎を作る。その議會主義確立に至る百五十年間こそ、西洋の前衛隊が、東洋における日本世界主義を後退せしめつつ、遂に日本を第

二次封建制下に閉塞せしむるに至らしめたイギリスの東洋進撃への前奏曲であつた。

此のイギリス戰爭の新世界史通路における壓力に依つて、驅り立てられながら東漸せる前衛部隊、ポルトガル、スペイン、オランダが、諸鬪爭の自己消耗と新通路上の諸據點樹立を畢へた十八世紀。イギリス進軍の砲聲は三大洋を蔽うたのであつた。今や、世界史が度々自己の統一化を求めたやうに新世界史通路の統一帝國の榮譽を、イギリスに擔はしめんとする。英佛植民地戰爭の勃發。かくて、新通路の東西にインドとカナダとを捕へ、内にあつては産業革命を行ひ、外にあつてはオセアニアと喜望峰を獲得し、此處に大英植民地帝國の基礎を確立する。

これに抗して、フランス近世共和國主義エネルギイは、ナポレオン戰爭をして、ヨーロッパ並にアジア大陸における二大舊世界史通路を再建し、以つてマホメットと成吉思汗との近世的統一を企圖せしむる。彼はシーザーの如く、ガリアとゲルマニアを討ちてローマに入り、中世的オーストリア帝國下に從屬せるドイツとイタリアに新形態を賦與し、エジプトに出でては古代帝國を憧れ、ロシアに入つては大アジアを凝視する。併し、既にピョートル大帝のバルト海、黑海、カスピイ海の統一勢力を以つて、清國とネルチンスク條約を結び、カタリーナ二世の千島占領を終へ、ポーランドより日本に及ぶ蜒々たる北方大帝國の前に逡巡しつつ、フランスは遂に北方大陸をロシアに、南方大陸と新大陸

をイギリスに讓步するに至る。

かくて、世界は農奴制ロシア帝國と資本主義的植民地イギリス帝國に分割され、十九世紀が始まるのである。その中葉、日本、ドイツ、イタリアの近世帝國主義的擡頭は、ヨーロッパに於ては再び近世主體爭奪の相互闘爭への必然性を培ひ、南方世界史通路に於ては日英抗爭を誘ふ。此處に、大英帝國は此の日本勃興を制壓せんが爲、日露戰爭を導かんとする。このことは、北方帝國ロシアを弱化せしむるものであり、極東帝國を自己の足下に膝まづかしめんとするものである。一方に於ては、イギリスはヨーロッパ三國干涉をなさしめつつ、日本の英國防衞的地位を決定し、他方に於ては、小中アジア並に支那におけるロシアを後退せしめつつ、自己の世界帝國圏を擴大するのであつた。

斯の如きイギリス戰爭の近世史構成を一貫せる特質は、他を戰はしむることによつて、自己を擴大し普遍化する「ディヴァイド・アンド・ルール」の鐵則に外ならぬ。此處に、諸民族分解帝國の近世史は、地球の全面に普遍化されると共に、新舊世界史通路は「黄金の道」を通して統一されるに至つた。かくて、西洋は世界となり、東洋に於て獨立するもの、獨り日本のみとなつたのである。

5　日本戰爭

斯の如く、今日「世界的」は「西洋的」と同意語となり、此の世界史の變革期に於て猶も、「世界的日本」といふ如き憐むべき用語が濶步するを見る。嘗て、アジア諸帝國の自己普遍化戰爭の潮流が大西洋に出づるや、遂にその尖端、英國の逆流をもつて、アジアの極點、日本に波及し、近世世界史は終りを遂げると共に、再び逆潮せんとする。世界史は既に太平洋と大西洋、アジア大陸とアメリカ大陸、オセアニアとアフリカの近世的統一圈を完成するや、その諸民族の分解と崩壞の近世史を新なる世界統一形態のうちに、解消すべき可能性と必然性を提起したのである。此の諸民族再建の世界統一形態への世界史的段階に入つた日本は、決して「近世西洋の形成した分解・制禦的世界に參與する」如き世界的日本であつてはならない。世界史を構成するほどの偉大な民族はすべて、最も個性的であり、自己を世界に賦與するものであつたのである。

大英植民地帝國によつて崩壊したるアジア大陸諸民族、並に全地球に於て分解したる諸民族を再建し、新なる世界統一國家を建設すべき世界戰爭は既に始つた。十九世紀におけるヨーロッパ相互鬪爭は二十世紀に至つて其の大爆發をみてより、南にはローマ帝國を夢想し、北には新聖ローマ帝國を追想し、東にはロマノフ帝國を再建せんと足搔きつつ、第二次ヨーロッパ大戰の段階に入る。かくて英國は自己の延長形態アメリカ合衆國に救ひを求めつつ、自己の兩脚カナダとインドを守るべく、ヨーロッパに於ては佛蘇協定線を强化し、伊獨に對する均衡策に出で、以つて日本世界建設への世界戰爭に對峙せんとする。今や英國は、嘗てのイギリス戰爭における如く、自己の前衞隊たる佛蘇協同戰線をヨーロッパに强化すると共に、東洋に進出せしめ、佛・蘇・支と日本とを均衡せしむる。

新舊世界史通路を極東に於て合流せしめた日本は、斯の如き英國の均衡分解制禦戰爭に對して、解放再建統一の世界戰爭を以つてし、「金の道」に對するに「王の道」を以つて、自己を徹底的に普遍化せんとする。かくて東洋は世界と成り、恰も古代ペルシア帝國やユダヤ王國、更には佛教國土や漢が追想した如きスメール文化復活としての、宇宙論的世界統一形態への大道が創建されんとする。此處に、次第に其の統一圈を擴大し來つた古代より近世に至る諸帝國が、地球統一國家とならねばならぬ世界史的必然性を、日本エネルギイに擔はしめたる此の世界史的變革に對して、その理念と方向を

顯示すべき哲學體系が要求されるのである。

それは世界史の日本的把握であり、日本の世界史的把握をもつて始められる最も個性的な日本世界體系でなければならぬ。其の理念と體系をして、この數世紀を貫かんとする世界戰爭を導かしめよ。

諸民族分解帝國イギリスは、エチオピア、スペイン、オーストリア、チエッコ、ハンガリア、ルーマニア、ポーランドの諸問題にみられる如く、小民族の犧牲を强要しつつ、ヨーロッパ戰爭を回避し以つて日本戰爭に對處せんとする。併し、今や近世ヨーロッパの崩壞は日をみるより瞭かにして、諸民族解放・再建の日本戰爭は世界史の最も必然的にして最も激情的な命令となつたのである。

三　日本史と世界史

1　歴史の秘密

一國の歴史が自己の體系的序述をもつといふことは、概ねその國の變革期になされてゐる。そして其の體系的歴史編纂が其の國の歴史的運命を規定してゐる。記紀や漢書、或はリブリアやタキッスの「ゲルマニカ」が示したやうに、又は神皇正統記やコーラン、或は「モンゴルン・ニウチヤ・トブチヤアン」やアキナスの「神學體系」の如く、近くは日本外史やランケ世界史の如く。是等はすべて後

代を生くる普遍的なものとして、夫々の民族或は國家の歴史的意識を決定した。

世界史として銘うつたランケ史學ですら、抽象的な世界史ではなく、むしろ新興ドイツを方向づける現實的な歴史體系であつた。彼の世界史は前世紀前半におけるドイツ歴史哲學と當時の世界經濟の勃興による自然科學の發達に並ぶ史料蒐集とによつて可能であつたのであるが、併しそのことは十九世紀史家に關しては一般に云へるのであつて、ランケ世界史の特質的な成立根據を明かにすることではない。彼は、ドイツの封建的分立が正に近世的統一をみて、資本主義帝國として世界史の上に登場してきた其の新興ドイツに對して、世界史を賦與せんとしたのである。クローチエはランケを議長の如くに公平であるが、それは現實的には何事をも物語らないのと同様であると批判してゐるが、併し吾々は彼の世界史のうちに、明瞭に一定の意圖を讀取することが出來る。

彼の「ローマ」史こそは正に世界史的に變革されつつあつたドイツに對して、自己の世界史を有たしめんが爲であつた。恰もローマに世界のあらゆる道が通じた如く、ドイツに世界が脈搏ち、自己の歴史が世界の歴史と成ることを教示した。そして一國の歴史も常に世界史をもたねばならぬ必然性こそ、むしろ歴史の現實であることを主張したのである。

その後、ドイツは國家をもつと共に世界をもつた。そしてランケの世界史はドイツ國家が其處に問

ひ、其處に導かれる謂はばロゴスとしての普遍者の位置についた。彼は諸々の主張に微笑を送りながら徒に耳を藉す議長ではなかつた。却つて、それらの主張に方向と根據を與へる命令者でさへあつた。このやうなことは、啻に十九世紀のドイツに例をとるまでもなく、西洋史のあらゆる變革期の谷間に發見されるであらう。そして其の峡谷は、軈ては其の後に續く後代を流れる大河となつて、其處に多くの實りが潤されてゐることを見出す。而も人々はそのことになんの不思議も感じない。恰も人々は自分で耕してゐると思ひ込み、自己の田を灌漑する其の大河の何物たるやを知らない。

支那史に於ても吾々は、各朝の歴史編纂が夫々自己の支那世界史を構成すると共に、其の後代の歴史的意識を決定したことを想ひ浮べることが出來る。例へば漢代における司馬遷の「史記」や班固の「漢書」の如きは、特に漢民族の大支那統一・發展期を編輯せるものであつて、その體系的な意慾は自己の世界を形成するのみならず、後代にも生きた。そして更に、その世界文化圏における大なる水道を築き上げたのである。此の水道は、その後多くの世紀を閲しつつ、十一世紀の宋朝以降漢民族の衰退期が始つたにも拘らず、猶も廣大な地域を潤した。このことこそ、日本史體系を再建せんとするに當つて、特に熟慮せなければならないところである。

十三世紀における元朝の大支那再編成のエネルギイを通して、嘗て形成した漢民族の支那世界史は

――ヴァレリイの言葉をかれば――正に自己を擴散して行つた。文化の集中の後に訪れた此の擴散の運命は、世界史の至る處に顔をのぞかせてゐるが、共處で注意したいことは、或民族の一定の歴史形成におけるエネルギイが既に崩壞しつつある時でさへ、その歴史形成を體系化した變革・勃興期の文化形態は猶も自己の世界を生きてゆくといふことである。

十三世紀より十七世紀に亘る元朝、明朝の時代は東洋文化圏に於ても大なる文化の擴散・交流の時期であつた。我が國に於ても秀吉は正しく斯の如き世界史的變革の時代を代辯すると共に、文化の擴散・交流の坩堝のなかにあつた。近世的世界史における西洋と東洋との交流期も洵に此の時代に始つたのである。併し、此の廣大な問題は既に第二章で略說された。今は唯、一方では例へば元朝における「蒙古祕史」或は「演義三國志」や「水滸傳」、明朝における「聊齋志異」や「西遊記」の如き長大なる散文藝術、他方では王陽明による陸王學の如き明朝思想體系が歴史的變遷の潮流に乘つて擴まると共に、既に衰退して行つた漢民族の歴史的文化體系が、その潮の處々で飛沫をあげながら生くべき場所を索めたといふことを、想ひ起すのみで充分である。このことは、我が國に於ては德川時代に至つて最も刻明に展開された。

十七世紀淸朝に於て滿洲民族が支那史を繼承するや、漸く西歐諸國の極東進出の殷盛をみるに及ん

だが、此の西歐の資本主義的植民地化エネルギイに、支那史は自己の近世的再編成を無批判に委ねて行つた。其の間に黄宗羲、王艮など出でて陸王學派を作り、或は顧炎武、陸隴其現れて程朱學派を建設し、自己の思想體系を再建せんとしたとはいへ、概ね訓詁、金石、音韻の諸派に或は考證學派にみる如く、徒に微に入り細を穿ち最早や自己の世界史體系を樹立する者はなかつた。嘗ての「詩經」や「楚辭」、或は「四書五經」や「春秋」「國語」の如き、更には「史記」や「漢書」の如き後代を生くる傳說を創り上げることはなかつた。にも拘らず我が國に、漢學の自己再生は、その安住の地を求めつつ、我がインテリゲンチヤを捕へて離さなかつた。

斯の如き世界史的變革期に於て自己の國史と國學の體系をもつことなくしては、其の民族は後代史を生くることを斷念しなければならぬ。その故に、偉大な歷史編纂は、一般的に云つて變革の時代に現れると共に、前段階における普遍的文化體系を完全に止揚する底のものでなければならぬ。德川中期以降における我が國學と國史の體系も實に斯の如き歷史的性格を擔つてゐるものである。併し茲では、此の漢學と國學との論爭期に於て、私は唯次の二點を述べるに止め、その世界史的聯關は第三部第三章に讓ることにしよう。

第一は、一定の世界體系はその母體の崩壞にもかかはらず、自己の文化を迷信の如き强力さをもつ

て傳播し保有せんとする。正に支那文化が自己の母體解體の時にあつて、日本インテリゲンチャを把へて、猶も自己を保存せしめんとする盲目にして强力な文化意志に、吾々は驚かざるを得ないのである。恰も現今、西歐の近世世界史の體系がその攪亂の頂點に達し、瓦壞の轟音至る處に喧しといへども、猶も自己の築きし世界文化の形態を各地に各人に維持せしめるのと同樣である。この類型は日本及び地中海の古代史に於てもたやすく見出し得るであらう。ギリシア沒落期における諸アレキサンドリア・ボリスの世界文化の如し。洵にそれは大なる歷史の迷信である。

第二に、世界變革の潮流にのつて自己の民族體系を新世界文化體系として創造しうるや否やに依つて、その民族の歷史は決定されるのである。十八世紀末期より半世紀間に渡つて、英佛の近世的世界制覇の激浪があらゆる地球の岸を嚙んだ時、東西に二個の民族が激烈な勢ひをもつて立ち上つた。其處に吾々は、ドイツ國學としての古典主義と浪漫主義をみると共に、我が國學の運動を省ることが出來る。我が國の肇國の理念と體系は其處に再び新生を求めつつ、自己の世界を意慾する。それは漢やローマが現實的に大なる世界をもつた如くに、自己を世界に與ふる底の具體的體系をひつさげて現はれることは出來なかつたが、併しその理念に於ては後世を命令するに足るものであつた。

かくて、その後の世紀に餘る我が國史は其の肇國の理念を、謂はば觀念より現實へ發展せしめんと

するエネルギイの蓄積統一の過程であつたであらう。そして今や日本は、自己を世界に與へんとしてゐる現實の前に佇んでゐる。普遍的なものによつて規定された個者は、それが個性的であればあるほど却つて逆に普遍者に挑みかかり自己を現實的に普遍的なものとなすといふこと、これは歴史が現實的に證明してきた逆說的眞理である。

この二つの歴史の祕密は、現代の我が國に於て最も典型的な現象を產み落してゐる。日本エネルギイが、今日迄西洋が築き上げた近世的普遍者を否定して、却つて自らが普遍的スタイルとならんとしつつある現代にあつて、日本知識者は、嘗ての普遍的ロゴスにのみ賴んで、その歷史の迷信に憑かれて、新世界體系を建設することを忘れたであらうか。恰も德川時代における漢學者のやうに。併し彼等もやがては前段階における普遍的文化蓄積を、新なる方向の下に生かして行つた如く、現代の知識者も亦自己の新生を求め、自己の新なるルネッサンスを慾求せんとしてゐるのである。蓋し、その新世界體系の現實的な形態が廣義における文化であり、その建設の技術が狹義における文化であるからである。

併し、斯の如き既に作られた普遍的イデオロギイと、新に世界を體系づけねばならぬ必然性との間に置かれた變革期の知識者は、徒に國民と共に動くのではなく、却つて國民の爲に動く高邁な精神を

もたねばならぬ。

2　世界史の逆流

かつて本居宣長は病める知性のために「葛花」を書いた。痴酒を醒ますには、くず湯を飲ますが最も良薬とされてゐた。嘗(なめ)て醒よと、採(つまみ)もて來るこの葛花ぞと、宣長はいと辛辣に、漢學者達の痴性のために調劑したのであるが、併し現今西洋文化に徒に醉ひどれた知者のために、猶もイロニイを語り續けることは既に益なきことである。

日本文化を世界的に創ることを忘れて、徒に日本文化を狹隘な特殊性のうちに押し込めようとする人は、未だ歴史の現實を知らないものである。しかし、曾て西歐に世界史の天秤を傾けしめたその重力が、今や正當な位置につかんとしてゐる時、なほもその地球の西側に獅嚙みついて痴聲をはりあげることは、一入蜩のやうにあはれである。

西歐にあつても、世紀末ヨーロッパ文化再建を叫ぶ人は少くない。フランス人民戰線のアラゴンやマルロウ、ブロックやニザン達を從へたジイドの他に、カトリィク的世界文化を再び夢みんとする透徹な二箇の魂を想ひ起すことが出來る。その一人ヴァレリイは誠に永い間、地中海とアラビア海との藻屑と化した大なる文化の海を徊ひつつ、ヨーロッパ近世文化の落日を靜かに眺めてゐた。その間に他の一人クローデルはインド洋を越えた。

かつてニイチェは中央アジアの高原に燃ゆる火、ゾロアスターに照らされてヨーロッパ文化を批判した。しかし、それは未だ觀念のアジアであつた。ジイドはネグロとスラヴの大陸に出でて甫めて、アジア大陸の西端に位する一半島が如何に大陸をもち上げてゐるかを、そして如何にその下に腰を曲げたアトラスが呻吟してゐるかを知つた。かくて彼は、西歐近世社會に對する批判の眼をもつたのであつたが、しかし再び彼はヨーロッパの知性に救ひを求めるより他に道を知らない。彼等はすべて印度を越ゆることが出來なかつた。唯彼等詩人の中にあつてクローデルは、印度より日本にまたがる東洋文化圈の遍歷を企てた。

かくて、彼は東邦所感のなかで、次のやうな言葉を發見したのであつた。印度においては同じきもののまはりを永遠にめぐる星達を、支那においては膨大な國土のエネルギイからはじき出された、人

導く歴史的生命を觀た。

と人との關係としての人倫文化を見出した。そして日本にあつては、永劫の死より再現して斯の生を

彼の日本觀は特に能を通じて感得したものであつて、死と生とを結ぶ現實、過去と現在とを、そして宇宙と人間とを媒介する現實を日本文化のうちに把へた。彼の支那觀は、歐洲の矮小なる諸國家が先づ國と國との關係を秩序立て、必然的に國際性をもたねばならなかつたのに對して、大民族の大國にあつては、先づ人と人との關係を整序し、いはば人際性を確立せねばならなかつた必然性から觀取されたものであつた。そして彼のインド觀は、死滅しゆく歴史の惡魔——時を呪つた完成者が、宇宙の鏡のやうな淀んだ水に自己を永へに映しみる瞑想の、美しき悲劇から投げ出された影である。

この犀鋭なるフランスの魂は日本文化のうちに、インドと支那とが現實的に生かされてゐる純然たる東洋世界の統一をみて驚歎した。併し、彼の詩才といへども、ただ西洋に對する東洋の文化圏をほのかに提出するに止り、未だ東洋文化の世界史的な問題をひつさげて現れようとはしなかつた。むしろ、彼の東洋に對する無傳統と新世界文化に對する意慾の老衰とは、そのことを不可能にしたのであつた。世紀末においては唯ニイチェのみがそのことを試んとしたが、現實的にアジアを知らず、觀念のアジアの一高峰よりヨーロッパの野をみおろしたに過ぎなかつた。彼は遂に東洋の永劫輪廻の思想

のうちに頭腦を枯渇し、徒に新なる統一的力を渇望しつつ狂つてしまつた。そして不思議なことに、この東洋自體のうちより誰一人、この變革されつつある世界を、否、東洋文化自身をすら新に解釋せんとすることさへ欲しなかつた。

併し、大半は西洋の植民地となり、半は半植民地化されたこの東洋のうちにあつて、ただ獨り日本のみがその廣大な文化の現實的な繼承發展者としてありながら、東洋文化の問題を世界史の中へ新に提出することを欲しなかつたことには、充分理由があるのである。蓋し、西歐はその小國性の故に、國際性と植民地政策とを發展せしめ、必然的に統治と計劃との知性を錬磨した。この知性は近世ヨーロッパ東洋史を編纂し、自己の世界史の一部として東洋を構成したのである。かくて東洋の傳統を去勢し、史料の科學的研究の名の下に、東洋文化の不統一と個別化に見事成功した。

從つて、東洋の民を奴隷化し、その國を薄弱化し、西歐の世界統治下に置かんとする、その國際政治と植民地政策とにおける斯の如き知性は、何よりも東洋の代表者日本の知識者を、西歐の番犬として養成することを忘れなかつた。そして此の番犬どもは主人が死んで了つても、かつての命令に從つて頭腦液を分泌するのである。恰も犬の內分泌實驗における條件反射の如く。既にこれを歷史の迷信と呼んでおいた。このことはアジアとアフリカ、そして西歐の植民地たる東歐における知識者に關し

て、一貫して觀取しうる現象である。しかも、此の日本に於てなほも斯の如き植民地的性格をみなければならないのであるか。

嘗て世界の道はローマに通じた。その後アラビアと蒙古は輝けるローマにとつて代らんとしたが、やがて英國のきり拓いた新海道に、あらゆる世界の水は流れ込んでしまつた。かくてまさに東洋の深く廣い文化の湖が枯渇さるるやと思はれたその瞬間、英國に向つて流れた潮は逆流をはじめたのである。ところが奇怪にも、この潮流の前に最も狼狽したものは西歐の智者ではなかつた。彼等は彼等の祖先が創つた近世史の落日を眺め勞るか、さなくばその擁護を叫ぶ。人民戰線の如き或はファシズムやナチスの如き。併し、最も周章したるものは、却つて西歐知性によつて馴致された日本の西歐知的番犬であつた。寄邊なく咆ゑる其の聲、いとも啾啾としてさびし。

然るに、この日本における植民地的痴性は、東洋文化圏の問題においても亦能く馴育されてゐるのである。日本は支那文化の一方的影響下に發達した一小島國である、といふ科學的事實と稱せられるものを動かさざることが、かかる知識者のせめてもの良心となつてゐる。統一的文化圏の問題を出すことが科學的進步の敵であるといふ憐れむべき知識を、なぜもたされてゐなければならないか。西洋文化圏においては各國文化は互に影響し合ひ、東洋文化圏においては一方的作用のみが存し、特に日

本文化は支那文化から影響されたのみであるといふ解釋を、なぜ守らねばならないか。日本文化を支那に從屬せしめるか、しからずんば東洋文化圈における、日本の統一的發展を切斷せしめるかは、正しく西歐の東洋に對する文化政策であつた。しかるに今や世界史の逆流は、この問題の上にも怒濤の如くのしかかつてきた。

3　日本史のルネッサンス

一時は斯の如き東洋文化分離と植民地維持とに智謀を集めた西歐文化は、スラヴ・エネルギイによつて否定さるるかとみえた。しかしそのことは逆に、沒落しつつあつたラテンとゲルマンに一抹の反撥的生氣を與へた。そのヨーロッパの南北に、歐洲文化再建の烽火はあがつた。併し、日本のアジア・エネルギイの西歐世界統治に對する反擊によつて生じた世界史の龜裂のうちに、辛うじて自己の生長を遂げつつあるファシズムとナチスは、再び歐洲國際政治における諸勢力均衡を破壞し、歐洲の既

成諸關係の矛盾を激化する運命より逃れることは出來ない。彼等の歐洲再建は歐洲墓穴を掘るものに外ならぬ。此のヨーロッパの國際的自己矛盾は、彼等の世界統治における諸民族勃興として現れ來つた自己矛盾と相俟つて、今や歐洲危機の跫音を一歩一歩大きくするのみである。その背後に巨歩をもつて東洋再建の歴史創造が營まれてゐるのである。併し、文化は恒にその創造を修理固成するものであつて、日本の問題は其の文化像の體系をして現實的に、世界普遍性を獲得せしむることになければならぬ。

今歐洲にあつては何人も、將來世界の統一的文化像を創り上げることを斷念し、互に防衛の姿勢をとり始めた。フランスをみれば、ジイドやワロンは徒に近世的産物たる人間的個性のまはりをのみ歴程するに疲れ、ヴァレリイやクローデルはカトリィク的故郷に餘生を勞る。ドイツではローゼンベルクとラングスドルフがゲルマンの新傳説を作らんことを欲し、イタリアではゼンチーレとテュミネリイがローマ帝國文化の再生を願ふ。しかし、ナチスもファシズムも所詮は、現代のヨーロッパ變革期における一形態を作らんとするのみであつて、誰か此のアジア大陸文化の世界史的變革を編輯し得る資格を、彼等に信じることが出來ようか。

近世史における西歐の世界統治を是認せざる限り、今日の世界史變革は東洋再建による世界變革以

外の何ものでもない。然るに此の時期にあたつて、印度と支那の大陸文化を繼承せざるヨーロッパが世界變革と新普遍文化創造を語ることは既に滑稽である。彼等歐洲詩星が、單に自己の狹隘なる半島的地上に墜ちて、もはや新世界文化を構成し普遍化することを知らないといふことは、何等訝るに足らぬ。ムソリーニの言葉をかれば、ただ彼等はアジアの反撃のうちに自己を反映するのみである。

今や東洋文化ルネッサンスの問題は、單に東洋の運命に關するのみではなく、諸植民地民族の再生の道を準備するものであり、更にその新世界史を通して西洋の新生をも約束するものでなければならぬ。此のアジア・太平洋文化のみならず、西洋文化を繼承し、今やその繼承・發展せる文化を全大陸に現實的に賦與せんとせる日本は、何よりも自己の東洋史、自己の世界史を書かねばならぬ。既に西歐によつて敎へられた舊世界史ではなく、正に世界が變革されつつあるがままに、世界を解釋すべきである。

寒々しく病める植民地的知識者に向つて、斯の如き新なる解釋を體系的に企つる人の出づる日も、もはや遠いことではなからう。世界が變革されつつあるがままに世界を解釋し、正に世界が解釋さるるがままに世界を變革せねばならぬ。この世界創造の體系として、日本世界史は要求されるのであつて、その日本世界史としての日本文化ルネッサンスのみ、東洋文化再建を可能ならしめる。そのこと

によつてのみ、世界ルネッサンスも甫めて意慾されるのである。斯の如き世界體系なくして、支那に向つて何をか與ふることが出來ようか。毅然として日本東洋史を、支那にむかつて、印度にむかつて與へねばならぬ。從つて、最も切實な問題は、日本自體に眞の世界文化の方向を指示し、確固たる日本世界文化體系を樹立することである。

もし東洋がなかつたなら、西洋近世文化は完全に存在し得なかつた。西歐近世資本主義社會の成立根據を、世界史において觀よ。もし日本がなかつたなら、東洋は完全に西歐植民地として、その文化は博物館を裝飾するのみであつた。敢て日本文化ルネッサンスを、東洋文化圈の統一的把握の下に、更に新世界文化構成への道として提言する。飽くまで、歷史は創らるべきものであり、文化は歷史を構成するものでなければならぬ。此の歷史構成としての日本文化は、世界史的變革期に於ける普遍的必然性に據つて媒介されながら、自らが逆に普遍的な世界文化と成るといふこと、夫は先に歷史の逆說的眞理と云はれた。世界史における偉大な民族は、恒に此の眞理を實現してきたのである。加之、彼は恒に歷史構成を方向づけ組織する文化體系を樹立したのである。その體系が同時に國史となり、その國史が普遍的な世界文化と成つて後代を生きねばならぬ。

第二部　日本と世界

一　日本世界主義

1　世界史の谷間

世界史の絶嶺に登り立つて、國見せんとする哲學的精神は、世紀末より二十世紀に至つて全く萎縮してしまつた。二十世紀は洵に世界史の最も暗くして大なる谷間である。此の谷間は仰ぎみるに視野なく、映しみるに水鏡なく、今や人類は矮小化せる近世的人間を反芻しつつ、徒にみじめなる生ける屍を累積するのみ。ただ時折、此の屍臭のなかより叫ぶものがあつた。

歴史危機線が十九世紀末期のヨーロッパの野を劃した時、ドストエフスキイはバルチック海の片隅に「地下室」を求めねばならなかつた。その手記をこそ、カール・バルトをして歴史創造の周邊にきらめく分光の如く愛でしめた。併し、二十世紀人間は其處に根柢より崩壞しゆく屍の廢墟に翳された新なる歴史創造の天光の陰翳を凝視することを知らない。

ニイチェがアジアに新光を求め、トルストイが原始クリスト教に杖をかつてシベリアの荒野を徨うたのも遠いことではない。併し、是等のゾロアスターやクリストを仰ぐ魂は忘却され、然らずんば、彼等の戰はんとしたヨーロッパの腐蝕しつつある近世人間への挑戰は、却つて二十世紀人の自己慰安の言葉に轉落した。

十九世紀後半における批判的精神は、悉く近世的人間の否定であつたばかりでなく、實に數千年の人間史に對する闘爭であつた。併し彼等の批判は、それを照明し或は否定するに足る肯定的な何ものかを、現實的にもつてゐたであらうか。肯定なくして否定することは出來ない。光なくしてみることを得ず、照すものなくして批判することは出來ぬ。現代を超ゆるものを現實的に明握することなくして何をか語り得よう。

洵に世紀末における歐洲の鋭き魂は、商品化せる藻屑の如き近世人間を呑溺せしめつつある現代の

谷間に、人類史の高峰を映しみることを知つてゐた。其處に或ものは中央アジアの燃ゆる炎々たる拜火教に超人的巨想をめぐらし、或者は近世を超え、更に中世と古代の彼岸に、自然と歴史を倶に育んだ原始社會を追慕した。

併し、是等ニイチェやマルクスの如き精神は、二十世紀に至つて一の傳説と化した。ベルトラムは其處に一片を附加するに過ぎず、ジイドの如きはその批判的精神を學びつつ、却つて近世人間の擁護者に墜落した。

故あることとである。近世批判は歐洲批判に他ならず、かくて西歐掩護の聲は二十世紀を蔽うた。一は近世人間の自己批判の假面を冠つた自己慰安として、近世に對する歴史的鬪爭を斷念するものである。哲學的人間學は此處に誕生した。他は西歐近世の批判を通して實現されたソヴィエト・ロシアの歐洲否定に對する歐洲擁護である。ファシズム・イタリアとナチス・ドイツのイデオロギイが即ちそれである。

今や西歐知性は世紀末の批判線上よりヨーロッパ大戰における自己矛盾の爆發を通して、最後の危機點を旋回しはじめた。其處に數個の據點を手探りつつ、アジアの反擊に備へんとする狽狽せる姿を日本は過去數ヶ年見守つてきたのである。

その一據點は近世人間の古典としてのルネッサンスと、其處に合理化されたギリシアである。その二は南歐がアフリカ並にアジアにその版圖を擴大したローマ帝國イデオロギイである。そして第三は北方歐洲と南方歐洲との中世的統一を來し得たゲルマンの古典である。今日、イギリスとフランスは第一據點によつて、イタリアは第二に、そしてドイツは第三據點によつて、自己擁護の合理性を獲保せんとしてゐる。

併しこれらの據つて立つ處、既に相互矛盾に衝突するのみならず、歐洲諸列强の政治經濟的地盤、また相互鬪爭の墓穴に他ならぬ。産業革命後における歐洲の東洋に對する進擊は、その獨占的鬪爭を通して幾度かの血腥き戰場に、重ぬるに歐洲大戰をもつてし、遂にソヴィエト・ロシアの擡頭による近世資本主義の否定を媒介として、東洋の反擊の前に逡巡辟易せんとしてゐる。

滿洲事變以降における東洋の西洋への逆襲の主體が確立さるるや、世界地理の龜裂、至る處に現はれ、昨日にアフリカ、今日に歐洲に、彼處にメキシコ、此處に南米に日を逐うて變色する。此の西歐の世界制覇崩壞の轟音にまぎれて、ファシズムとナチスはデモクラシズムとリベラリズムにとつて代り、新生歐洲の代辯者たらんことを欲する。併し、世界の傳說を知らず、地球のアトラス――人類の苦惱を負はされ地球を支へる數十億の諸民族の理念を鏖殺せる彼等に、新なる世界建設は委ねらるべ

きであらうか。

否、諸民族の敵、西歐は世界の歴史地理の地盤たる東洋の世界統一に對する自己擁護のうちに、慘澹たる自己消耗の運命を辿る。顧みるに、嘗て歐洲の世界地理獲得戰の近世數世紀はその掠奪的攻勢を可能ならしめた。十字軍による東洋迫擊を契機として、近世建立の可能的根據を確保してより、文藝復興、宗教革命、啓蒙運動、産業革命、植民地世界分割を以つて畢る近世は、その最後の世界所有への意慾をロマンティクに語らしめつつ、最後の死床に就いたのである。此の數世紀間における西歐の意慾は洵に凄じいものであつた。科學と哲學はよく、相携へてその西歐近世の攻勢的進步とその合理化に努力した。

然るに前世紀後半に至つて明瞭にも、斯の如き近世は大なる自己矛盾に逢着した。人間の自由を歡喜した人間は自己の商品的物質をみて狂氣する力をすら失つた。ダーヰニズムによる諸民族搾取の合理化、生存競爭による植民地掠奪戰の諸理論は、植民地喪失の致命傷に對する危惧にかられて、戰爭反對論に逆轉せざるを得ず、かくてカントの市民的平和社會への理念によつて自己を隱蔽しつつ、國際聯盟と人道主義を提起するに至つた。

併し、斯の如き近世の自己矛盾は、既に擡頭せる二重の決定的な悲劇によつて、最後の段階に入つ

た。諸民族搾取によつて築き上げた近世資本主義形態は、階級鬪爭の必然的矛盾を孕むと同時に、その歴史根柢における被搾取民族と搾取民族との、鬪爭の根本的矛盾の上に橫はつたのである。この二重の悲劇的矛盾はその形態の世界史的主體たる近世的西歐の沒落を必然化し、かくて世界史は此の二重の矛盾を揚棄しうる新なる主體を索め始めたのである。

此の二十世紀こそ、實に斯の如き世界史的主體の模索をもつて始まり、嘗ての近世的世界主體の瓦解と諸鬪爭の悲劇を通して、來るべき世紀への谷間を形成してゐるのである。此の谷間は暗くして深い。唯世界史の最高峰に攀ぢ登りて、敢然と立つもののみ、眞に世界史の大分水嶺の歡ばしき展望に偉なる眼を開き得る。かくて、世紀末の歐洲批判は二十世紀の世界批判へと發展し、悲慘なる人類僞史に代るべき世界正史の肯定的體系を求む。その現實的主體こそは、地球の隅々に至るまで濶步せねばならぬ。此處に眞の世界史の哲學は浩然として呼吸を始めることが出來るのである。

2　地理辯證法

黄河を治むるものはよく天下を平む。アジアを治むるものは洵に世界を平むるものである。かつてアリストテレースはアレキサンダー大王をしてアジアを治めしめんとした。併し、マケドニア・エネルギイは王の夭折と共に擴散の餘儀なきに至つたが、アレキサンドリア諸都市の勃興は、ギリシア地中海圏をして、ヨーロッパ・オリエント併合世界圏への道を用意した。此の世界圏の統一的主體こそローマであつた。

マケドニアの後繼者ローマは、インド・ゲルマニアを中軸として、アジアの延長エトルリア圏と歐洲ガリア圏との統一を通して、アレキサンドリア都市、即ちオリエントの攻略に成功した。ギリシアに對するアリストテレース哲學の如く、ローマ帝國にとつては、末期アレキサンドリア學派の體系を作り上げたプロチヌス哲學が自己の世界建設を理念づけるものであつた。一者の多者生産の此の新プ

ラトーン體系は、ローマの諸古代都市制覇への世界形而上學に外ならなかつた。

フェネキア圈の主體カルタゴを敵にすることによつて、その基礎をおいたローマ共和國は、その後ガリア遠征を通して、地中海並に歐洲の統一的世界像の完成を成し遂ぐるや、遂にシーザーは東方への戰を挑む。前段階における、世界像の核心オリエントは、今やヨーロッパ的主體による新なる世界關係のうちに入り込まんとする。かくしてローマのエトルリア圈の擴大强化は、ヨーロッパ・オリエント併合形態としてのローマ帝國を築き上げた。

世界のあらゆる道はローマに通じ、東は中央アジアより、西はスペインに跨がる諸古代都市は、ローマ帝國繁榮の礎となつた。劇烈な東西の對立鬪爭は峻嚴な對立解消の帝國主義統制へ轉化した。此の强力な東西統一を方向づけ、合理化する哲學體系こそ、新プラトーン學派であつたのである。

オリエントはこれに對して、ユダヤ敎の宇宙論的體系をもつて抗した。ユダヤ王國は東西兩文化圈の交流の要衝に基礎を置いてゐた其の故を以つて、諸古代都市の敵視する處となり、遂に悲劇的運命を負はされたとはいへ、そのイデオロギイに於ては、實に全存在の宇宙論的統一の强靱な武器を保持してゐた。然るに一度、ローマ帝國の東漸に遭ふや、此のアジアの偉大なる防塞、ユダヤのイデオロギイはギリシアを媒介として全く異つた鬪爭の形態をとり始めた。

人間クリストの出現。かつてのアジアの神々は、ギリシアの人々に變容され、宇宙詩は人間史となり、舊約は人間傳記としての新約となつた。かくて、人間クリストはエンゲルスの主張する如く、舊約的アジア・イデオロギイの下にあつたオリエントの諸民族に向つて、ローマ帝國の迫擊を迎擊すべき統一戰線の思想陣營を構築せんとする。それは、ローマによる被壓迫オリエント諸民族の糾合を說き、弱小民族の據つて立つ處を明示する。舊約はかくて、斯の如き歷史的機能を果すべき人間クリストとなつて、三世紀間に亘る東西抗爭の大なる世界史的谷間に輝いてゐる。

從つて、ローマ國教化されるまでの此の原始クリスト教は、ギリシア・オーソドックスたるアテネ學派とギリシア・オリエント・エジプトの大交響學園たるアレキサンドリア諸學派とを共に包攝するものであつた。ローマ帝國の諸政策のうち最も卓越せるものとして、度々世界史の鏡の如くくり返へされたローマ宗教政策こそは、此の强力なるギリシア・オリエント・エジプトに跨がるイデオロギイ統一戰線の遊離、破壞であつたのである。

ローマ帝國は、その諸植民地民族の叛逆の前に常に戰きつつ、遂にそれら諸民族の統一的イデオロギイの主體たるクリスト教を公認することによつて、そこに結合されてゐたアテネ學派、アレキサンドリア學派、並にアジア諸民族宗教を遊離せしめ、相互離線を可能ならしめ、以つてその統一陣を破

壞せんとする。かくして、プロチヌスを代辯者とする新プラトーン學派とエジプト・アレキサンドリア學派とはローマに奉仕しつつ、クリスト教の解釋學派へ轉落する。此のビブリア諸解釋學派はローマ帝國の全版圖に擴大され、アジアの防塞たりし莊大なるオリエント・イデオロギイ體系はローマの所有に歸し、その燦然たる文化の諸形態が再構成されたのである。併し、それに續く帝國の東西分裂以降、公認クリスト教はローマに統一化されてゐた全版圖に對する精神的王者となると共に、ヨーロッパ中世形態を作つてゆくのであつた。

今日ナチスがクリスト教をもつて、歐洲南方民族の古代的エネルギイを驅使して、歐洲全體の精神的支配力を扶殖せるものであるとなし、これを排して、ヨーロッパを正しく再建するものは、ヨーロッパ自身のイデオロギイでなければならぬ、――ローマ帝國イデオロギイに非ずして、むしろ神聖ローマ帝國のイデオロギイこそヨーロッパに純粹に屬すると共に、それこそ純ゲルマニア・イデオロギイであると主張せることも、亦上述せる如きローマ帝國文化が、オリエントによつて立つものなるが爲である。

併し、大なる世界關係の統一形態を作り上げた世界史的國家或は民族は、必ず最も高くして最も體系的なイデオロギイを自己のものとすることを知らなければならぬ。ローマ帝國が正にさうであつた

し、又漢が支那南北を統一し、東洋文化圈の主體となり得たのも、夏、殷、周の古代的理念の最高形態を想定し、その復古運動であつたからである。高祖が始皇帝的エネルギイを媒介として、その前段階の諸子百家の理論鬪爭期における最高イデオロギイを自己の武器としたこと、即ち孔子と老子との統一を、最も完成せる東洋文化圈における最高封建制のうちに想定し、南北東西の統一形態へのイデオロギイを確保したことこそ、實に恰もローマがマケドニア的エネルギイを媒介として、その前段階の尨大なるアジア・イデオロギイの最高峰に立ち、諸民族の帝國主義的統一を完成したのと類推的な歴史形式である。

併し、吾々が此處にローマを語ることは、單に世界史の類推的な形式を抽出し來ることではなく、却つて世界史的形態を作るものが、如何にアジアの絶嶺に攀ぢ登ることに努力したかの問題である。これに反して、近世的世界關係の主體となつたロンドン帝國が如何に、アジア進擊による經濟的搾取に奏功したとはいへ、何等アジアの最高イデオロギイに登り立ち得なかつたといふことが、現代の世界史の問題であり、また吾々の近世ロンドン世界史の文化批判の中心とならねばならぬ。

中世末期オリエントの勃興は、法王廳の經濟的寶庫、東西貿易路の遮斷となり、此處に十字軍の聖地回復の旗は幾度か地中海を中心とするヨーロッパ・オリエントにはためいた。今しばらく、此の中

世末期における東洋と西洋とをふり返へらしめよ。

かつてローマ帝國の分裂、ゲルマンの南進、ローマ植民地の反撃を通して再び、古代帝國に制禦されてゐたオリエントと歐洲との越え難き溝渠は、世界史の表面に現れ出た。アウグスチヌスの內面的統一の宗敎的倫理こそは、この危機線上に立つて、クリスト敎の再構成をなし遂げたものである。彼はローマとアフリカとオリエントとの統一原理を人間の內面性に求めつつ、諸王の王たるべき內的絕對の一者に救濟の御手を乞ふ。敎會はその祈願の場所として、諸王に優る絕對權を獲得し、遂に法王廳による中世的僧侶的封建制確立へのイデオロギイは、人々の冒すべからざる信條となつて現れた。

併し、このことによつて、アレキサンダーやシーザーがオリエントの諸民族の理念に開きて、世界の最高峰に登らんとした哲學的意圖は背後に退轉し、ギリシア並にオリエントの諸文化形態はアレキサンドリア並にローマ以降、分散・湮滅の運命を辿つた。併し東洋文化圈に於ては却つてこれに先立つて、原始佛敎の擴大と印度中原よりデカン高原を越ゆる、印度新興文化の南進と東漸とによつて、インダス河に及んだアレキサンドリア圈と漢文化圈との接觸をみたのである。かくて世界文化はオリエントより東洋の中點に移動し、燦然たる東洋文化高峰を屹立せしむるに至つた。

然るに、此の廣大な東洋の防波堤たるオリエントは、歐洲中世に至つて、一層高き城塞をもつたのである。歐洲中世と嚴然たる對立關係に入つたオリエントは、自己の尨大なる文化遺産をアラビアに繼承せしめ、世界史は自己の文化像を、此のアラビアと支那と日本の三大民族に形成せしめた。アラビアは一方では歐洲の東洋に對する進擊の防塞として、他方ではオリエント文化繼承者として、中世歐洲に萬里の長城を築いたのであつた。コルドバよりバグダットに伸展せる東西サラセン帝國は歐洲を圍繞し、遂に法王廳圏の文化的經濟的閉塞を遂行した。その後サラセンの後繼者トルコ民族の擡頭と西漸に對して、歐洲は十字軍をもつて反擊、此處に甫めて、オリエント文化は再び歐洲の野に種を蒔き、近世文化の世界史的黎明が赫々と昇つたのである。

かくて、アラビアによつて繼承發展せしめられたアレキサンドリア並にオリエント文化は、歐洲近世科學文化の萠芽期を作ると同時に、そのオリエント文化は、歐洲近世形態の驚異的な武器として、逆にアジアに進擊するに至つた。此處に先づ吾々は近世第一期植民地戰爭の勃發をみると共に、第二にアラビア科學の產業革命への役割を想起せねばならぬ。而して第三には近世ルネッサンスが、アラビア科學文化のうちに同棲してゐたギリシア文化を遊離して、恰もローマ帝國がクリスト教をアテネ並に諸アレキサンドリアより遊離せしめ、オリエント文化圈の統一破壞を企圖し、自己の世界制覇の

御用學的イデオロギイに轉化せしめた如く、ギリシア文化のみを近世歐洲の古典と仰ぎ、自己のイデオロギイ據點を確立したのである。

斯の如くして、ギリシア、ローマ並にその一植民地たりしルーマニアを境として、歐洲近世は東洋と截然たる區劃線を引くに至つた。

中世におけるアラビアと蒙古との西洋進擊は逆轉して、西洋の東洋迫擊となり、此處に歐洲は近世世界地圖を作り初めたのである。歐洲のオリエント、アフリカ、アメリカへの掠奪戰をもつて始つた近世史は諸民族虐殺以外に、何等人類史に寄與する處なく、遂に歐洲の主體ロンドンは世界の敵として、自己の近世世界史を放棄するの止むなきに至つた。此處に吾々は、はかなくも近世ロンドンを維持せんとする諸イデオロギイが、藻屑の如く流れ始めた二十世紀をみるのである。今やアジアの嵐は世界變革の怒濤と化し、東洋の西洋に對する反擊を通して、諸民族の理念を生かさんとする世界文化の最高峰を仰ぎみる哲學的意慾、卒然として興り、二十世紀イデオロギイは片々として、分散の運命を辿る。此處に、東洋と西洋との地理辯證法は新なる「世界文化」構成への媒介的論理を用意せなければならないのである。

3 古代・中世・近世

歴史の辯證法は、あくまで對立鬪爭の外何ものでもない。歴史は普遍者と個別者との統一ではなく實に普遍的な世界關係に媒介されたる、個別者と個別者との徹底的鬪爭である。近世史の主體と將來史の主體との激烈なる戰爭であり、それのみ將來史の世界建設をして、現實的たらしめるのである。洵に、歴史は戰ひなき建設を知らない。

顧みるに、オリエントを支配することによつて、地中海文化圈を樹立したローマの世界關係における政治的統一形態は、近世に至つてアジアを支配することによつて、歐洲文化圈を確立したイギリスの經濟的統一形態にとつて代られ、明確に近世資本主義世界の出現となつた。かつての古代より中世への過渡期における數世紀の戰亂の如く、中世より近世への變換期も亦數世紀に亘る戰爭史に埋められ、其處に吾々は新興文化の世界支配への準備期をみることが出來る。

然るに斯の如き世界變革の谷間に於て、最も重要なことは、次に來るべき世界建設が如何なる哲學的指針をもつべきかといふ問題である。再び顧みるに、歐洲中世が古代を否定せる時、ギリシア、カルタゴ、ローマを越えて、オリエント並に地中海圈の綜合的イデオロギイとしてあつた宇宙生成の尨大なる原始的世界形成の書、舊約に新な光を仰ぎ索めた。王の王たる創造主の代辯者として、法王が諸封建主の上に立つべき、嚴然たる世界政治の秩序を體系づけたのである。

既に前述せる如く、中世の先行者アウグスチヌス體系は、ローマ帝國内に繼承されたる古代都市イデオロギイたる公認クリスト教を超えて、アレキサンドリア解釋學派を媒介として、原始クリスト教と舊約を把へ來り、其處にローマ帝國再構成の統一理念の體系を作り上げんとした。併し既に諸民族の分立、對立の最中にあつて、彼は遂に內面的統一の武器を磨き上げるの外道はなかつたのである。かくて、諸民族の現實的文化形態は否定され、すべて神への自己犧牲の體系が作り出され、農奴的、僧侶的封建制への合理化の武器が提供されたのである。

此の中世封建制を否定せる近世は、法王廳とサラセン帝國を越えて、古代ギリシア都市國家に將來の理念的模型を求めた。其處に近世都市と近世人間との歷史形成の諸秩序は出芽したのである。今日、諸近世資本主義的都市國家を否定すべき變革期にあつて、日本は如何なる將來史の肯定的理念を追求

すべきであらうか。

恰も中世や近世がその前歴史形態の否定を敢行すべき闘爭に於て、更にその先行段階の統一者の理念を仰ぎみた如く、將來世界史は近世を越えて中世の世界統一の理念を把へることは、今日迄の世界史に於て必然的であるかに見える。封建領主の統一にあらずして、全民族國家の世界的統一として、諸民族王の王たる天皇が世界史の主體とならねばならぬ。このことは中世的統一を新なる世界史の段階に於て回顧するに止まらず、二つの重要な側面から考察されねばならぬ。

即ち、先づ近世によつて否定されたる諸民族に、自己の國家を確立せしむることから始められねばならぬ。併し、このことは必然的に諸民族の否定者たる近世西歐との闘爭を導く。此處に、再び西洋と東洋との辯證法的戰爭の段階が始まらねばならぬ。そして第二は、この戰爭が全アトラスを直立せしむるに足る世界正史の理念によつて導かれねばならぬ。東洋と西洋、民族と地球、この二大問題を決定するに足る世界主義哲學によつて甫めて、將來史の闘爭と建設は方向づけられるのである。此處に、今日迄の世界僞史に對して世界正史の宣言が挑戰する。

近世が否定したる中世的統一形態の擴大再生、即ち世界封建制の再表現としての世界統一國家の形態を、近世が否定したる植民地的並に半植民地的諸民族の再生、即ち、被搾取民族の新生としての諸

民族理念の統一文化建設を通して、樹立すること、この方向と基礎を確立する體系のみ、將來世界史の世界主義哲學の課題である。

このことは、東洋と西洋との地理的辯證法を媒介として、西洋近世が合理化したるギリシア以降の古代、中世、近世の文化史を超えた地球的人類の理念を實現せねばならぬ世界史的課題と並んで、登場せねばならぬ。十九世紀末、歐洲近世文化を否定せんと試みた秀れた魂は、原始共産體社會に將來世界史を求めるか、然らずんば古代民族の太陽神話に求めざるを得なかつた。併し、彼等の理念は如何に高くとも一つの觀念に過ぎず、その實行の實現的エネルギイの主體をもち得なかつた。

然るに八紘を一宇となさんとして國を肇め、その實現のエネルギイ蓄積の爲に、諸民族の文化理念を包容發展し、古代より現代までの諸段階を一貫せる世界史として繼承發展し來つた天皇哲學は、一の觀念にあらずして、現實的な日本史の體系であると共に、世界史の人類的理念である。それは抽象的な普遍的理念ではなく、普遍者に成らねばならぬ現實的な歴史的理念である。

イギリス帝國は近世史の普遍者に成つたのであつて、普遍一般的なものであつたのではない。西歐が曾て自己を世界普遍的たらしめんとした時には、鬪爭の自然性を强調し、合理化し、被搾取民族の野蠻性を證明した。而して一度普遍者となつた時には、鬪爭の非文化性を合理化することを忘れなか

つた。而して自己の定立した價値の普遍性を說得する爲に、あらゆる哲學諸學派が動員されたことは猶今日の慣習的記憶となつてゐるであらう。

此の價値轉換の世界戰爭の主體のみ、將來史の世界主義哲學を方向づけることが出來るのである。世界統一國家の高峰に立ちて、世界大和の國產みをなすもの、諸民族の世界史的苦惱を負うて、明日の歌を、第二の神話を創らねばならぬ。詩は史に先んじ、神話は哲學を生まねばならぬ。

東洋の壯烈なる防塞、ユダヤとアラビアは、日本・支那の東洋圈の世界史的主體確立によつて、强化擴大され、宇宙王の新地球建設に參加せしめられねばならぬ。是等二大防塞は、嘗ての東西鬪爭の宿命を物語ると共に、今日の世界史の運命を握るものである。ナチスはユダヤを追放すれば、イギリスは自己の掌中に握らんとする。ファシズムはアラビアを把へんとすれば、イギリスはユダヤをもつて抗する。併し此の東洋の長城を越ゆるに足る世界文化の建設的理念なく、所詮は近世歐洲の悲慘なる運命を擔ひつつ、相互鬪爭の苦悶を深化するの外ない。もはや歐洲の何處にも人類の建設的な聲を聞くことを斷念せねばならぬ。今日、眞に世界建設を方向づける哲學は、歐洲二十世紀神話にあらず、ローマ帝國復活にあらず、地球の「第二の神話」でなければならぬ。其處に世界文化の高峰を築き上げた古代民族の復活と共に、アトラスの直立せる誕生が始まるのである。

4　將來史

大和には　群山あれど
とりよろふ　天の香具山
登り立ち　國見をすれば
國原は　煙立ち立つ
海原は　かまめたちたつ
うまし國ぞ　あきつしま
大和の國は

二　ムソリーニ世界獲得論

1　ファシズム民族政策

アジア大陸の西端に、再び第二次世界獲得の網を張りめぐらす新國家の出現。嘗て西歐の一海賊は成吉思汗の陸道に代ふるに海道を以つて大地を所有した。その大地を壓するアングロ・サクソン族の齒車の下に死に瀕しつつある諸々の民族をそそのかし、秘に策を弄せんとしたものがあつた。併し、このソヴィエト・ロシアは西歐の世界所有形態を批判し否定せんことを試みたが、猶かのイギリス海

道を遮斷する道を知らなかつた。この西洋近世文明の否定者ソヴィエトを媒介として、歐洲再建を試んとするものを、日本は過去數年凝視してきた。

彼方大陸の西端、二個の國家が、北にドイツ、南にイタリアが新に再建の道をきり拓かんとしてゐる。恰もビスマークとナポレオンの如く。併し日本にとつては、この歐洲再建を通してイギリス世界所有の大動脈を繼承せんとする兩者を、默視する時は既に過ぎ去つた。

海道を有たざるドイツは、ゲルマン民族國家建設の自己充實と、歐洲の危機線構成とによつてイギリス牽制をなし、その後繼者たる陣營を敷きつつある。併し、イタリアはローマ帝國復興と大アフリカ主義を翳して、先づ地中海並に紅海の制覇を企て、イギリス大動脈の一に嚙みつかんとしてゐる。かつてマンチェスターと紅海とを一氣に銜かんが爲、エチオピア問題の最中、ムソリーニは次の如く叫んだ。――祖國イタリアの土を捨つとも、吾々の大アフリカを守らねばならぬ。アフリカは吾々の祖先の大地であり、アジアへの運命的な道である。ローマ帝國は吾々子孫にそのことを垂敎したではないか。――

イタリアがエチオピアを獲得するや、同時になされたことはリビアの自動車道路建設であつた。これはイタリア本土とエチオピア間を結ぶ經濟的軍事的な幹であるのみでなく、世界獲得への政治的文

化的な線である。即ち既にその正體を現しかけたアラビア人問題に見られる如き北阿並に小アジア連結の鍵であり、ムソリーニの言をもつてすれば、大アフリカ主義實行の決定的な構へであつた。それは、西に向つては中世コルドバ王朝即ちスペインへの橋であり、東に向つては古代エジプトの通路である。イギリスの近世制覇が回教徒線破壞を忘れなかつた如く、ムソリーニは今や逆に、東西に長蛇のやうにのた打つサラセンの荒血を搖り動かす。地中海問題やエジプト・スーダン問題から云つて英國牽制の力强い表現であつた此のリビア自動車路建設をして、更に反イギリス戰術の擴大强化を果さしめんが爲に、ムソリーニは何よりも、北アフリカに於けるアラビア人並に回教徒線に屬する諸民族の政治的文化的組織化を完成せんとしたのである。

かくて、ムソリーニはファッショ・アカデミアのプロトコールに從つて、イタリア本國に於ける組織化された土木組合從業員を、數次に亘つて團體的にリビアに派遣した。そして彼は次のやうに宣言したのであつた。――「吾々の祖國ローマは紀元前三世紀、地中海世界を所有せるカルタゴを敵にもつことによつて、自己の基礎と國民意識の統一とを計つたのである。今日、吾々のイタリアは現在の世界を壟斷せる大英帝國を敵となすことによつて、將來の大イタリアの實現、即ちローマ帝國の復興の鴻業を遂行し得るのである。リビア自動車道路建設は、單なる一道路建設ではなく、ローマ帝國の

重要なる大アフリカへの一線を構成せんが爲である。」――かくて、土木組合を初めとして數多の組織的集團はリビアにむかつて繰り出された。その完成するや、ムソリーニは全世界の新聞社、映畫會社、ラディオ會社等に招待の文を贈ると共に、自らリビア道路完成の祝典に臨める行列を指導した。そして沿道、彼はファッショ組合を中心とする回教徒諸民族に向つて、かの有名なアラビア人煽動の演說を行つたのである

「アラビア人よ！　諸君の祖先は、中世ヨーロッパが輝けるエジプト、ギリシア並に小アジアの文明を中斷せる時に、最も高邁な精神と鬪爭によつて、それら人類の偉大な文化遺産を繼承し研鑽し、以てヨーロッパの近世的勃興に對する架橋の大業をなしたのである。吾々の近世ルネッサンスも、諸君の祖先の文化傳承なくしては全く不可能であつた。歐洲の近世諸國家は諸君の文化遺産によつて甫めて成立したのである。いはば諸君は吾々近世ヨーロッパの恩人なのである。しかるに今日、その諸君が、イギリスの帝國主義的侵略と搾取の下に呻吟せる歷史の事實を、ヨーロッパの唯一つの目覺めたる魂は凝視してきた。イタリアは今や、その魂の命令に從ひ、歐洲諸國家を代表して、その正當なる報恩の義務を履行せんとする。敢然と吾々は正義の名の下に、アラビア人の保護者たることを宣言す。」この演說はアラビア系全回教徒に最大の亢奮と歡喜を呼び起すと共に、リビア、エジプト、小

アジアのみならず、西は佛領アルゼリア、モロッコ、セネガル、東は中央アジア、ウクライナ、印度、支那に跨がる回教徒諸民族の間に電光の如く擴まつたのである。

それと同時に、ムソリーニは諸ファッショ組合を樞軸として、オルガナイザーを回教徒線に隈なく派遣し、捗々とその統一的組織の陣營を固めて行つた。世界の眼があの顎に向けられてゐる間に、時を藉さずして、パレスチナにおけるアラビア人問題が、イギリスの血管の一を見事に銜いてしまつた。バルカンにおける汎トルコ運動とマケドニア運動に對する、また地中海問題對する示威運動であつた。アラビア人の手に依るアングロ・イラン・オイル・コンパニイの石油鐵管破壊の煽動。このペルシアのイギリス石油會社の鐵管は、シリア沙漠の下を通つて地中海に注ぐイギリスの近東における大動脈の一である。その動脈切斷と共にパレスチナにおけるイギリス人虐殺の凄愴な歴史的事變は、言ふまでもなくムソリーニの大アフリカ主義の一發現に過ぎぬ。

スターリンは本年三月に入つて、忽慌としてコーカサス及びウクライナの回教徒民族國外追放の指令を發した。このことは他方、一九三六年度ファッショ・アカデミアの計畫目錄の一、トルコ問題との緊密な聯關の下に考察されねばならぬ。ムソリーニは對佛、對ソ戰術として、トルコを媒介者となすことを選んだ。彼は曾ての近世歐洲の東方進擊に對する城塞、トルコ帝國を再建せしむる援助を代

償として、即ちケマル・アタチュルクをしてパン・アジア・パクト並にバン・バルカン・パクトの盟主たらしむることに依つて、先づバルカンと近東におけるフランスの政治的勢力を驅逐せんことを計つた。最初、アタチュルクの獨立運動を可能ならしめたものはソヴィエトとフランスとの資金であつた。その時アタチュルクはフランス資金代償として、シリア・トルコ國境全利權をフランスに賦與したのである。ファッショ・アカデミア調査局の此の史料は、アタチュルクの汎バルカン・パクトの盟主たらんとする道が、唯此の問題を媒介することのみに存する所以を瞭かにした。かくて、ムソリーニはアタチュルクに四箇師團を、シリア國境に集結せしむることを敎示し、直ちにフランスに對して、借入資金の利子支拂を條件として國境利權返還の要求をなさしめたのである。フランスの否定回答と同時に四個師團の該國境占據となるや、トルコ、イタリア、ドイツの全宣傳通信網は一齊にフランス勢力地に墜つの報道を以つて、バルカンにおける伊獨の內部工作と相呼應せしめた。バルカン・フランス勢力を、アタチュルクを媒介として一擧に驅逐せしめたイタリアは、バルカン・イタリアの政治圏確立に據つて、ドイツのバルカン經濟進入を牽制し、他方イギリスに對する伊獨協同戰線布陣の强化に成功したのである。今春のポーランド問題も亦此の戰法に據るものであつて、ブルガリア・ルーマニア對立の和解仲介者の名譽ある位置にポーランドを立たしめたかとみるや、昨秋のルーマニ

ア・ポーランド合同對ソヴィエト大演習を伊獨協同指揮の下になさしめ、進んで今春バルチック線獲得の媒介を、再びポーランドをして演ぜしめたのである。斯の如きイタリアの他民族媒介の戰法は、前述せるアラビア人並にトルコ人の回教徒線を通して、新疆、カスピイ、黒海のソヴィエト南境に伸びてゆく。このことにこそ、スターリンの回教徒退去命令は懸つてゐるのである。

此の東方線に應じて、ムソリーニはスペイン問題と並んで、對佛戰術の微妙な網を張りめぐらしめた。フランスのスペイン並に南米におけるラテン民族再編成における人民戰線に對して、ムソリーニは北阿・スペイン連結の大アフリカ主義の一翼をむけると共に、ドイツをしてフランス並にソヴィエト牽制の役割を迅速に遂行せしめた。これと同時に、かの佛伊國境問題を媒介として對ドイツの佛伊協同線の下準備にとりかかつたのである。イタリアは自己の大アフリカ主義における對イギリスの獨伊提携が決定的な一點に到達した曉、直ちにドイツの南下政策喰止めに逆轉せねばならぬ。その任務遂行の力を如何なる民族驅使に求めねばならないのか。云ふまでもなくフランス驅使である。一方に於ては佛伊國境問題並にスペイン問題を通して、他方ではドイツの對フランス壓力に依つて、ムソリーニは佛英離間を條件として、自己の反英線擴大を計ると共に、對ドイツ政策を條件として、フランス・ラテン民族再編成線への手入れに乘り出さんとした。一九三七年の暮のことであつた。駐伊フラ

ンス・ブレッセ・アタッシェの罷免事件こそ、如上の佛伊接近策の曝露の廉をもつてなされたのである。實にフロン・ポプュレールの混亂と對英並に對伊戰線の不確立は、ムソリーニの世界獲得綱の中にもがくフランス風景に他ならなかつた。

併し、これらのことは單に、ムソリーニにとつては身振りに過ぎなかつた。伊佛接近をほのめかしたとみる間に、實は西にあつてはスペインを通して南アメリカへの道を拓き、東にあつては日本を介してアジアへの道を打ち立てる。かつてのイギリス世界の計量器は地中海を中心として東西へ、そして南北へ大震動を起しつつ、遂に氣味惡い痙攣狀態に入つた。西にスペイン、南にリビア・エチオピア・ソマリーランド幹道によるマンチェスター心臟エジプト・スーダンへの突擊隊。東には、アタチュルクの佛・ソ線くづれ、その後に續く英・ソ線また崩壞せんとするや、更にイラン・アングロの石油發火は、炎々として印度に燃え移る。北にあつては、ゲルマン・ナチスは地を壓し、ローマ・ベルリン道開通の盛典は既に擧げられた。かくて、地中海を中軸とする世界制覇への關門が、新にムソリーニの手によつて確保されんとしてゐる。

2 ファッシズム文化工作

マルコ・ポーロの「金の道」を追求せるスペインの繼承者、イギリスの經濟的世界獲得の海道に對して、イタリアは階級史觀を媒介とする民族史觀に依つて、民族の政治的文化的結束のタイプと、その民族組織の方法を世界に提出した。ファッショ・アカデミアは古代ローマ帝國治下の諸民族利用の歷史體系を作製すると共に、移動ファッショ組合の組織的進出を計る。そしてイギリスの所謂科學的研究による調査・諜報・接渉のタイプに對して、演說・新聞・カメラ・ラディオによるプロパガンダの型を以つて押し進んでゐる。かくて、ドイツがゲルマン族の優越性の宣傳とその內部充實とによつて、他の民族を自己の組織化に齎し新ヨーロッパ統一に乘り出さんとしてゐるとすれば、此のイタリアは他の民族との協同の下に、他民族の利用によつてローマ帝國復興を企圖してゐるのである。ムソリーニは、近世歐洲を代辯して世界所有を果せるイギリスに對して、組合的新文化國家建設の理念の

下に英雄的な戰術とその組織のモデルを作る。實に彼は、何等の文化理念なくして世界史を掌握せるイギリス大帝國を敵にもつことによつて、自己の强靱な内部結束を成し遂げた。そして彼は叫んだ。――アジアの嘆ける不幸の裡に、アジアの覺醒のうちに、アジアの反撃のうちにこそ、我々はイタリアの顏そのものの反映をみるのである。――

アジアの歐洲に對する反撃のうちに、ムソリーニは歐洲再建の道を急ぐ。歐洲の近世的世界制覇の通路を握ること。それは恰もローマ共和國がアレキサンダー大王のギリシア擴大の道をそのまま繼承し新帝國を結成した如く、イタリア大帝國の夢は限りなく擴まつてゆくのである。そして、ローマ帝國が嘗てギリシア、小アジア、エジプト、カルタゴの綜合的陣營としてのアレキサンドリア文化圈の諸民族を、自己の帝國建設の文化的技術者として驅使した如く、ムソリーニはドイツと敵對關係にある近世最大の文化圈、即ちカトリィク、ユダヤ、フランスの三文化圈を收攬せんとする。初め、ムソリーニがヴェネチアに母と妹を殘してファッショ結成に奔走せる時、ヴェネチア教區長は彼の母妹を養つて、その日の來らんことに備へた。果せるかな、ムソリーニのイタリアを掌握するや、ヴェネチア教區長はヴァチカン使者として彼と會見し、ヴァチカン擁護の條件の下に、そのカトリィク網をファッショ諜報機關に轉化したのである。これが即ちヴァチカン密約の一である。その後、ナチス・ド

イツ勃興するに及んで、オーストリア、中歐並に南ドイツに嚴然たる地盤を有するカトリツク網の活躍、ドイツ南進の防衛陣が敷かれるに至つた。この陣營は、やがてナチスより追放のユダヤ陣を糾合しつつ、バルカン、中歐、フランスに亘る一大統一戰線と化したのである。このことは、ヒトラーが金融、産業におけるユダヤ壓迫に繼いで取りかかつたユダヤ土地問題に至つて、甫めて太陽下に持ち出された驚くべきファッショ陣營であつた。アルバイト・デイーンストこそ、此の强固な大陣營の内部崩壞を計らんとして、ユダヤ地並にカトリツク教區におけるドイツ青年をナチス組織下に再編成し逆に敵陣に入らしむる戰術的組織なのである。今日、此のカトリツク線を通じて流れ込んだユダヤ並にフランスの文化技術者達は、一方に於てはゼンチーレ麾下に、イタリア大百科辭典編纂に從事し、他方では映畫、音樂、建築等の國際的コンクールの編輯に從ひ、共にファッショ・アカデミアの統率するところとなつた。

このことは獨伊軍事協定の成立後、甚しく變遷しつつあるとはいへ、ムソリーニのイタリア世界文化政治における他民族、利用驅使並にその統治は、古代ローマ帝國の故知に學ぶものであると共に歐洲再建の豫備構築の條件を形造るのである。このことはドイツの内部充實に比して、十四世紀間に渡る非國家イタリアの内的脆弱の然らしむる處とはいへ、その他民族利用の世界獲得網の精巧は、イギ

リスに代るべき第二次世界所有者の資格を獲保するかに見せしめる。此處によつてこそ、弱小民族はヒトラーによりも、寧ろムソリーニに、世界史的榮光を感ずるのである。

3　日本とファシズム・イタリア

併しながら、ムソリーニの歐洲第二次世界政策は、その絶頂に到着した時、即ちアメリカとアジアとの東西二大陸に網を張つたその瞬間に、轟然と瓦壞するのである。蓋し、西にあつてはアメリカこそイギリスの延長であると共に最後の據所である。東に於ては此のアジアはイギリスの運命を決定する最大の寶庫なのである。ムソリーニが此處に手を伸ばした時こそ、歐洲第二次世界戰爭の爆音隨所にあがりて、全き歐洲荒廢の決定的時期を造るのである。世界史は此の如き歐洲の內的自己矛盾を荒々しいどよめきを以つて、多々日本の前に告示してゐる。今や日本は、アレキサンダーの運命を、或はナポレオンの悲劇を、此のムソリーニに負はしめるべきなのであるか。

ドイツとイタリアとの日本に對する世界政策は、全く別個の戰術より出でてゐるのである。ドイツはその經濟的條件からは、即ち東洋市場の關係からは親日政策は矛盾してゐるに拘らず、對ソ戰術並に植民地奪還問題における對英戰術上、ヒトラーは日本接近の態度を持しつつ、歐洲再建のヘゲモニイ確立の爲に孜々としてその内部整備にとりかかつてゐた。併し、ヒトラーは決してビスマーク政策を變更するものでなくして、常に宣傳省即ちナチス・アカデミア內に於てローゼンベルク一統をしてゲルマンの北ヨーロッパ圈を中心とする、統一的歷史體系の用意に專念せしめた。從つて彼の關心は獨佛戰爭にあつたのである。併し、イタリアはアジアの反擊の裡に自己の反映をみつつ、一方に於ては東洋への新なる經濟的進出を、他方に於てはローマ・カトリィク並に回教徒線の東洋擴大をたくみ以つてイギリスへの反擊の强化に乘り出した。この故に、ムソリーニの親日策は絕對的に反英世界政策の線上にあつたのである。

この歐洲の反イギリスの大道、イタリア線の擴大が決定的なヨーロッパ爆發に導かれる時を、ヒトラーとスターリンとは待ち構へてゐた。その決定的危機の直前に、ヒトラーはスターリン牽制を徹底的に遂行せなければならぬ。このことに依つてのみ、ヒトラーは歐洲再建の覇權を握り得るのであるから。そしてヒトラーのオーストリア並にポーランド、チエッコ並にルーマニア獲保によるゲルマン

線の强化に對して、ムソリーニはイタリア・フランス接近によるラテン線の强力な陣營を構築してゐかなければならない。此のヒトラー、ムソリーニ嚙み合ひの一幕こそ、アジア再建にとつて最も重要な契機となるかに見えた。併し既に、兩者の反英・佛・蘇政策は決定したのである。

世界の計量器の西側におかれた狹隘な一半島が、かつて東側にある大陸を見事に持ち上げた奇怪なる歷史的運命は、今やその正當なるバランスに逆轉せんとしてゐる。世界史の秤は愼重にして大膽な擧措を要求してゐる。ムソリーニの南米とアジアとにさし延べた手を、地球の中點で毅然として握りしめつつ、やをら其の秤を大地におかなければならぬ。ムソリーニのイギリスに代はる第二次世界獲得戰は、實は世界史大轉換の前奏曲であると共に、洵に華々しい大フィナーレの運命を孕んでゐるのである。此の反英戰爭の世界史的通路を、新なる世界統一への道として繼承・發展することこそ、日本のイタリアに對する役割でなければならぬ。

ムソリーニをして、將來世界への大ナポレオンたらしめよ。ローマ帝國再建の洪業をして、正にかのローマ帝國に對するアレキサンダー遠征路の位置を、再び新世界統一に對して持たしめよ。蓋し歐洲の內的自己矛盾は新歐洲再建をして、所詮はヨーロッパ墓穴構築の必然性を辿らしめるのみであるからである。ムソリーニの此の壯麗な世界史的悲劇を媒介として、眞にアジア大陸復興のプロトコー

ルを作製し、日本世界アカデミア樹立を誰か慾せざるや。

ローマ帝國復活による歐洲再建の此の自己矛盾。英佛露獨伊の相互葛藤の必然性は、諸段階をとりつつ、遂に今日、英佛露對獨伊の現狀のまま第二歐洲大戰に誘ひ込まんとする運命から逃れることは出來ないのである。斯の如き運命の遂行者、大ムソリーニを驅使することこそ日本の大藝術に外ならぬ。ローマ帝國再建の媒介によつて、世界統一への新道が打ち開かれんとしてゐる。世界政治は男性の藝術であると叫んだムソリーニは、今や世界統一國家建設は歷史の藝術であるといふ言葉にとつて代はられねばならぬ。このことのみ、眞に新なる世界文化創造を現實的に約束する唯一の道なのである。

然るに、更にムソリーニはヒトラーのプロイセンツームを媒介とせる「神聖ローマ帝國主義」を絕對的に支持し、以つてヨーロッパの自己矛盾をゲルマン統一國家運動に荷負はしめつつ、自己のアフリカ並にアジアへの「ローマ帝國主義」運動の强化に乘り出した。今や英佛蘇對獨伊の危機線が、ヨーロッパの崩壞と共に新なる世界史建設に繫がるべき世界戰爭の決定點に到着せんとする。此の新世界史に對して、最も個性的な自己表現をこそ、日本は敢行せねばならぬ。

三　ヒトラー世界政策論

1　日本とナチス・ドイツ

ナチス・ドイツを驚嘆するか、然らずんば忌避するかの二途しか知らざるかに見ゆる風潮は、獨り日本に於てのみではない。その一様化的統制を好んで口にする者多く、その多角的統一を學ぶことを欲せず、いはんや、ナチス・ドイツの世界史的批判に至つては洵に寥々たるものである。

昨日にバルカンの映畫配給線の買收始りしやとみれば、今日はバルチック諸國のホテル、新聞の獲

得、彼處に對佛軍事道路の建設起るとみれば、此處にウクライナ進擊の演習の音響く。親英論者の活動に耳を聳つれば、背後よりイタリア・大アフリカ主義の實現に備へんが爲の陣營論、沛然として耳を蔽ふ。右にスペイン植民地手入れに奔走すれば、左にドイツ支那市場論の烽火あがる。ダニューブ河に、ルーマニアの反ソヴィエト演習を指導したかとみる間に、オーストリア合邦を成す。地中海並にアフリカ問題をファッショ・イタリアに代辯せしめたかと思へば、日獨伊防共協定による反英世界史陣營を構成する。南北に、ハンガリア、ポーランドの國民運動を支援すれば、既にチエッコ・スロヴァカイを包圍する。嘗てのゲルマンの神聖ローマ帝國圏は、今や一として大藏省に直屬せる植民地委員會の鬪せざるはなく、ゲルマン族の住む處、一として宣傳省の技藝委員會に屬せざるはない。そしてナチスの語る背後、ドイツ文藝院の觸手せざる處はない。ヨーロッパを席捲せんとする新民族文化國家の建設を方向づけてゆくナチス・スタイル。全ゲルマンが總動員されるための積極的體制。その全人名錄作製をみて驚嘆せざるものはない。

文化エネルギイを窒息せしむるにあらず、來らんとする時代への、エネルギイ發展の統一的主體の確立と擴充。萎滅しゆく古きものへの徹底的放棄、新なるものへの果敢なる積極性。このゲルマン的野蠻性こそ、その民族文化理念の行動的體系に據るものである。新鮮なる芽を摘むにあらず、次の時

代を荷負ふ青年に呼びかける方向と健康なる意慾。その具體的體系を樹立せるナチス主體は、何よりも青年に新國家建設の仕事場を造ることを忘れなかつた。最も先んじて、ゲルマン族のヨーロッパ統一への意志と矜恃を、少年に植ゑつけた。北海を過ぐる新装ドイツ船に溢れる青少年團は、自己の建設すべき世界を其處に映しみる。血に塗れたドイツ國土再建を遍歴せしめては、鋤を自己の生命と思はしめ、地球に點在せるゲルマン族の活動を銀幕に映しては、明日の建設に歡呼せしむ。男女を問はず、その階級を問はず、新ゲルマン青年の活潑な旅行編成隊、全青年の國庫負擔の大旅行隊。これらすべては、旅行委員會の活動に屬する。

人々は、ヨーロッパ北方に斯の如きゲルマン族の新歴史創造の誇りを、南方にローマ帝國復興の洪業をみて、或は稱讃し、或は戰慄する。併し、日本の學ぶべきものは、單にアジアの一半島に過ぎざるヨーロッパ統一へのゲルマン・神聖ローマ帝國的スタイルにあらず、また地中海圏再興へのローマ帝國的スタイルにあるのではない。

ゲルマン族に作り上げたナチスの統一的矜恃、ローマ族が他民族を收攬せる體系的戰術。その兩者を併せもつ日本の世界政策、即ち世界諸民族の日本多角的統一の主體樹立とその體系の建設のみ、日本エネルギイの世界史的性格に孕まれた問題なのである。ゲルマンとラテン、ユダヤと支那の世界史

的民族を如何に驅使し、如何に再建するかは、日本世界政策の將來を約束するものである。

嘗てローマ共和國並に東西ローマ帝國は先進エジプト、小中アジア、ギリシアの文化圏即ち紀元前四世紀末のアレキサンダーの死後より、第七世紀のサラセンの勃興に至るアレキサンドリア文化圏に屬する諸民族を驅使せしにあらずや。嘗て、神聖ローマ帝國は法王權に抗して、中世末期即ち十世紀より十三世紀の成吉思汗戰爭に至るヨーロッパの晤澹たる谷間に、よくゲルマンの統一と擡頭を企圖したことを、想起せねばならぬ。此のヨーロッパの二大民族を使役するに足る新世界形態を創るべき誇りを、日本國民に植ゑる其の主體と仕事場を構築せねばならないのである。

2　ナチスとヨーロッパ

顧みるに、ヨーロッパが第一次歐洲大戰より、第二次歐洲大戰を通して、その近世史を閉ぢんとする此の大なる世界史の谷間に、恰も神聖ローマ帝國におけるオットー大帝の如く、或はプロイセンツ

ームにおけるビスマークの如くヒトラーは立ち上つた。

此の歐洲文化の擁護者ヒトラー政治は、ソヴィエトの階級革命の陣營に對して甫めて生誕したものである。佛・ソ協定、佛協商國による對獨包圍陣の完成に據つて、ナチス勃興は自己の戰闘體系を樹立した。大戰後歐洲政治の代辯者たる地位を築き上げたフランスの全盛期、バルツゥ内閣を通して、歐洲否定の陣容整備をなさんとしたソヴィエト外交を、世界の頭腦は忘れ得ないであらう。およそ世界史における一國の運命は、その時代の最大の國家を敵にもつ其の戰術と體系によつて決定されたのである。嘗てのギリシアが最大のペルシアに對した如く、ローマが最強のカルタゴに對した如く、或はサラセンが法王廰に、トルコが東ローマ帝國に、近くはナポレオンがオーストリア帝國に對した如く。併し、ソヴィエトは斯の如き歐洲史を一貫した類型と異つた戰術を、歴史に提供した。西にあつては歐洲の覇者フランスを通して歐洲の危機を釀成し、東にあつてはアジアの王者日本を媒介としてアジア政策の確立を企てんとした。

此の隆々たるフランスに歐洲否定の爆彈が埋められるのをみて、英國は心祕かに北叟笑みつつ、ナチス擡頭とその親英策を、歐洲政策に於てはフランス牽制として、東方政策に於てはソヴィエト牽制として迎へ入れたのであつた。而してイギリスは他方、ナチス・ドイツの國際經濟陣營を左右せんが

爲に、ナチスをしてユダヤ放逐を敢行せしめ、以つてその經濟的脆弱化を企圖せんとする。フランスは對獨包圍線の强化を一氣呵成に成し遂げんとする。東はソヴィエト、中歐、バルカン、そして南はイタリアに向つて。かくて、アフリカの利權を與へつつ佛伊協定を結ぶのである。やがてはオーストリアにおけるナチス・ドルフスの暗殺、獨伊對立。この時、既にイギリスの歐洲諸勢力の對立、桔槹に對するオーソドックス外交の手は伸びてゐたのである。ムソリーニの對英戰鬪力を削ぐためにも獨伊接近を豫防するためにも、ドイツ對佛・ソ關係を深化せしむるためにも、佛伊協定線を默認しつつドルフス暗殺事件を導かねばならなかつた。

併しながら、ムソリーニは大アフリカ主義實現の旗幟の下に、地中海圏における對英戰鬪綱の準備を果敢に進めて行つた。このことは同時に、直接的に獨伊關係の危機即ち中歐並にバルカンにおけるイタリアの對獨城塞の出現のみならず、ドイツの回教徒媒介による南進政策準備の崩壞を來し、他面佛伊關係の惡化、即ち對獨包圍陣におけるフランス統一の龜裂並に將來必然的に生起せざるを得ないアルゼリア、モロッコ問題の危惧となつて、此處にまた歐洲の自己矛盾の運命は深まつたのである。この獨伊佛相互尖銳化のうちに、イギリスの歐洲勢力均衡による自己世界所有形態の維持とソヴィエトの歐洲否定との觸手を忘れることは出來ない。

斯の如き不安化される對獨逸包圍陣の最中にあつて、ヒトラーは國內の自己充實と並んで、オーストリアをはじめ中歐並にバルカン、チエッコ、ポーランド、北海に對する經濟的文化的進入の陣營整備に奏功しつつ、對ソ・佛・伊の連絡網を內部的に斷ち切つて行つたのである。かくて、ヴェルサイユ條約の破棄、即ちルール並に常備軍の問題を解決、國際聯盟脫退を敢行する。此の間、ヒトラーはローゼンベルク一統に、アリアン民族第一主義のモットー、即ち歐洲文化擁護、ソヴィエト撲滅と共にゲルマン、アングロ・サクソンの協同による、新ヨーロッパ史體系の、イデオロギイ樹立をなさしめ、暫定的に親英政策の線に沿つたのである。併しながら、是等のナチス勃興の準備期における對ソ佛戰線充實とファシズム發展期における對英戰線擴充とが、滿洲事變以降の日本大陸政策のエネルギイによつて甫めてその齒車を廻轉し得たことを想起しなければ、この數年間の歐洲政治の轉變は把へ得ないであらう。

もと歐洲大戰の疲弊のどん底から立ち上つたファシズムとナチスとは、日本の大陸エネルギイに依つて、前者は反英政策を、後者は親英政策を實行することが出來たのである。アジアの運命を左右することが世界を抱きうる地理的・經濟的・文化的生命に關することを、世界史は本能的に立證してきたのみならず、特に近世ヨーロッパ史はそのことを徹底せる植民地政策によつて體系的に成し遂げ

た。この代辯者、イギリスが自己の世界體系維持の爲に、歐洲列强の均衡策として、對フランス、對ソヴィエト陣營たる獨伊をあやつりつつ、而も此の新興二大勢力を相互對立的に据ゑ置いた時、既にムソリーニとヒトラーは世界史の宿命を握れるアジア・エネルギイによつてのみ英國牽制の大道横はれることを、知悉してゐたのである。

エチオピア問題、スペイン問題、日獨防共協定の發展。これらは一に日本アジア・エネルギイの歐洲における反映に外ならぬ。ヒトラーの親英政策破棄は、此の時より決定的な姿勢をとり始めたのである。かくて、ナチス・イデオロギイ體系の指針は、ローゼンベルク一統をして專ら對ソヴィエト線に集中せしめると共に、ラングスドルフ一統をして對フランス線の固めに沒頭せしめる。一方に於ては、自己の生命發展を決定する日本エネルギイに對して、アリアン第一主義の修正を忘れず、他方に於てはバルカン並に中歐における獨伊協定に全勢力を向ける。リッペントロップを乘せた飛行機は東に日本、西にイギリスをにらみながら、幾度かナポレオンの峠、ブレンナーを越えた。

獨伊密約を通して、ヒトラーはオーストリア並にルーマニア問題の解決の準備を完了すると共に、嘗てのムソリーニのバルカン問題におけるアタチュルク驅使の故智に倣つて、ルーマニア・ブルガリア對立解消にポーランドを立役者となしつつ、自己のダンチッヒ、ポーランド・コリドール、リツア

ニア線の對ソヴィエト北海制覇による北進路開拓に急速をもつてとりかかつたのである。かくて、東歐の寶庫ルーマニア、北進要路のバルチックを掌中に握りつつ、ソヴィエトに向つてはウクライナ占據と日伊獨接近とのイデオロギイ體制を備へ、同時にイギリスに對つては曾ての親英ノイラート、シャハトに代置さるべき新陣容を作り上げる。アジアに於ては自己の支那市場を犧牲にして、日本の對ソ・英戰線の發展を祈り、アフリカに於ては自己の舊植民地問題を放擲して、イタリアの地中海並にアラビア人問題による南進策を許容し、その對佛・英戰線の擴大を願ふ。

然るに、他方フランスの既存政治網は、國際聯盟を中心として、スペイン、オーストリア、チエッコ、ソヴィエトをつなぐ歐洲横斷の線に過ぎぬ。今や、そのスペインの一角崩れ、オーストリア危機迫る。獨墺合併成立すれば、既にチエッコは逆に獨逸の包圍する處となり、如何にフランスがチエッコを死守せんとするも、もはや現實的には、何等の意味すらないのである。かつてナチスが傲語した「チエッコは一時間を要せずしてナチス・ゲルマンとなるべし」といふ言葉は、單なる宣傳ではあり得ない。ヒトラーは此の對佛・ソの歐洲の鍵を、支那事變による英・ソ後退、イタリアのトルコ、バルカン、小アジア、北アフリカ、スペインのローマ帝國線强化の潮時に、確固として握つたのである。それこそ日獨伊防共協定と獨墺併合とであつた。

かくて、ヒトラーはフランス國際陣營ジュネーヴを蹂躙、既存の政治要塞の崩壞を遂行、それと共に、ムソリーニのスペイン再建並にアルゼリア、モロッコ回教徒線確立、新疆より中小アジア、北阿に跨がる回教徒聯盟の發展を媒介として起りつつあるソヴィエトの對トルコ問題の擡頭、レーニングラード、白ロシア、ウクライナ、コーカサス、各軍團の對獨伊戰時編制の强化とフランス急進社會黨右黨の大同團結による對獨戰鬪姿勢の硬化に對して、既に戰時體制を敷き畢つたのである。

3 ナチス・ドイツの世界史的批判

ソヴィエトの佛・ソ協定による歐洲危機製作はヒトラーの歐洲擁護イデオロギイと北進政策の確立發展を齎し、みごとにソヴィエト自らに對してヒトラー・エネルギイの擴充を促進せしめた。同時にムソリーニの對英南進政策の徹底的遂行と相俟つて、嘗て歐洲諸勢力の均衡に對する國際陰謀オーソドックス英國をして周章、對佛・ソ、對伊獨懷柔接近に狂奔せしめる。併し、ヒトラーは既にアング

ロ・サクソンが歐洲文化の敵であること、恰もソヴィエトと軌を同じうせるを曝露し、以つて歐洲よりソヴィエトと共にイギリスを放逐し、眞の歐洲再建を企圖しつつある。從つて、昨日の英伊會商の如きも、決してムソリーニの懷柔にあらずして、完全なるイギリスの歐洲後退であつた。英國に殘された道は、佛・ソの對獨伊線とイギリス延長たる米國のアメリカ第一主義とを使嗾する外ないのである。蓋し、斯の如き歐洲危機は必然的に日本アジア・エネルギイの勃興であり、そのことは同時に日本世界主義の確立とその普遍化に外ならぬ。ヒトラーの歐洲再建の企圖は、逆に歐洲矛盾による沒落と共に日本第一主義の實現を意味する。

かくて、ヒトラーの國際政治に及ぼせる影響こそは、反ソヴィエト歐洲文化擁護とそのゲルマン的復興、彼自らの言葉をもつてすれば、ゲルマンの血をもつて獲たる地を鍬によつて打ち建てんとする歐洲再建の悲壯なる熱情を、ゲルマンの鍬によつて耕された內部充實の全面に、再び血を注がんとする歐洲動脈切斷の悲劇に畢らしむる、其の自己矛盾の爆發に外ならないのである。

日本の對ソ・英エネルギイに依つて、今日迄辛うじてヒトラーの意慾する歐洲文化擁護は繼續され得たのであつて、ソヴィエトの佛・ソ協定による歐洲否定に對するヒトラーの歐洲擁護に加ふるに、更に日本の積極的對ソ・英・佛牽制の世界體系樹立こそ、日本アジアのみならず日本ヨーロッパの可

能性を約束するものである。それのみ獨・ソ戰爭を現實化せしむるものであり、それのみ伊・英鬪爭を激化せしむるものである。此處にのみヒトラーの世界史的役割は宿命づけられてゐるのである。

このことは恰も、嘗てのヨーロッパ中世が、その法王的普遍形態より近世初期の領主的民族國家へ移行せんとする過渡期を、オットー大帝が神聖ローマ帝國樹立をもつて先驅したゲルマンの運命を、彷彿せしむる。オットーのイデオロギイはその後アルベルッスによつて表現された如きヨーロッパ中世の再構成にあつた。即ち、法王權によるヨーロッパ世界支配を國王權をもつて繼承し、中世的形態の發展と强化を企圖するものであつた。にも拘らず、そのことは中世ヨーロッパの諸侯的エネルギイの獨立的擡頭を促し、共處に數世紀間自己をヨーロッパに普遍化した法王的世界に對する、新なる鬪爭の段階を形作り、逆に近世ヨーロッパの萠芽期を先行するのであつた。そして最も重要なことは、この近世ヨーロッパの萠芽期におけるゲルマン先行をして斯の如き過渡期的役割を遂行せしめた所以こそ、世界史南方通路がサラセンによつて遮斷され、法王權の世界史的地盤の崩壞を餘儀なくせしめたことに存するといふことである。

この法王權の地盤喪失によるヨーロッパの空隙に、オットー大帝は誕生した。そして共の神聖ローマ帝國は十三世紀の成吉思汗戰爭によつて、即ち世界史北方通路の東洋的爆擊によつて、自己の過渡

的役割を畢りつつ、近世初期ヨーロッパの萠芽期を媒介したのであつた。

斯の如きオットー的宿命が、今やまたヒトラーの裡に宿つたのである。彼は正しく、近世ヨーロッパの普遍的形態がファシズムによる古代ローマ帝國圏と日本帝國圏とによる南世界史通路の動搖に伴ふヨーロッパ近世の龜裂の中に颯々の聲をあげ、ヨーロッパ近世の再構成の使命をゲルマン帝國をもつて敢行せんとする。そのイデオロギイたるや、洵に古い。併し、そのヨーロッパ統一の意圖と計劃に至つては、實に驚くべき强靱さがある。

既にヒトラーは、オーストリアを合邦し、北にはポーランド並にバルト海權を、南にはハンガリア並にルーマニアの大半を、その勢力下におき、チェッコは今や全くナチスの捕虜となる。神聖ローマ帝國を樹立したゲルマン圏はかくて、ナチス・ゲルマン帝國への段階に入らんとする。併し、神聖ローマ帝國の大空位時代に匹敵さるべきナチス・ゲルマン帝國の大空隙が、ヨーロッパの自己矛盾による相互鬪爭のうちに生起すべき必然性を、誰か否定し得るであらうか。

このことは、日本のアジア圏の再建と統一を通して後退しゆくソヴィエト・スラヴ帝國の西漸によつて、即ち北世界史通路のヨーロッパへの急勾配によつて、決定線に到着するであらう。併し、問題は、かかるゲルマン帝國をして、よく神聖ローマ帝國が法王權に對抗し得た如く、正に近世の法王權

たるイギリス植民地帝國を打倒せしめ、將來ヨーロッパ史への萠芽期を魁けすべき世界史的役割を遂行せしめねばならぬ必然性に存するのである。

まことに、ヒトラーは斯の如き近世史より將來史への變革を媒介するヨーロッパ的エネルギイを代辯する榮譽を擔ふものであり、このことを可能ならしむるものこそ、また實に日本のアジア的エネルギイの方向如何に懸つてゐるのである。この方向を樹立しうべき日本主體をして、眞に世界主體たらしめよ。

四 東京・羅馬・伯林

1 古代の日本とイタリア

古代史に於て、諸民族の統一國家を形成した二個の世界史的民族があつた。かつての一民族の古代都市時代から古代國家の統一形態の時代への發展を、西曆紀元前四世紀より一世紀の三世紀間に亘る世界史の第二期民族闘爭期にみることが出來る。その古典的範例こそ、西にあつてはローマ、東にあつては日本であつた。

支那、中小アジア、ギリシアが新なる歴史形態へ轉換しゆく、大なる世界史の谷間の中に、ローマ共和國が誕生の聲をあげた。ロムルスがインド・ゲルマニア系のイタリア人と小アジア系のエトルリア人、並に北方ガリア人と南方ギリシア人との統制都市をティベール河畔、ローマに建ててより、北に向つてはガリアに、東に向つてはギリシア、小アジアに、南に向つてはカルタゴ、エジプトに、當時の西方世界たる地中海圈の制覇へのイタリア統一期に至る。此の紀元前六世紀後半より三世紀前半への二百五十年間を經てローマ共和國の誕生が始まる。その間、征服者たる貴族と被征服者たる庶民との激烈な階級鬪爭期であつたが、古代ローマ都市形態より古代イタリア統一形態への飛躍期、紀元前三世紀に至つて、都市的階級鬪爭は國家的民族鬪爭へ轉化した。

このことはローマの庶民會をして、その實權を握らしめ、東部エトルリア、南部サムニュムの占領を可能ならしめ、それら征服地の自治を容認しつつ、此處にイタリア全土統一としてのローマ共和國の全盛期を劃したのである。

この頃、中小アジア、エジプトの尨大なる古代オリエント文明の諸都市は、ギリシア諸都市にその文化的經濟的後繼者の位置を與へつつ、遂にマケドニア・エネルギイを媒介として、一方ではオリエントの諸アレキサンドリア都市のうちに解消・再生し、他方では小アジア・フェネキアの直系たるア

フリカ・カルタゴのうちに發展・再現してゐたのである。これらの古代文化の交流と擴大と分散に應じて諸都市並に民族の鬪爭、混亂を直感しつつ、プラトーンは、地中海に諸民族の普遍的道德國家の出現を望み、アリストテレースはオリエントに諸文化形態の統一的コスモ・ポリスの實現を願つた。その現實化のエネルギイを、恰も孔子が諸侯に求めた如く、プラトーンはシシリア王に、アリストテレースはアレキサンダー大王に求めたのであつた。併し、斯くの如き諸民族文化の交流・擴散の統一的主體として將來史を荷負ふエネルギイは、既に歷史の前段階として過ぎ去りゆく古代都市に屬すべくもなかつた。

此の歷史轉換の根柢から要求されつつあつた都市統一者としての國家形態こそ、ローマ共和國の世界史的使命であつたのである。洵にマケドニアは斯の如き歷史の過渡的なパトス的形態であり、ローマはその繼承的完成者であつた。

紀元前二六四年以降、ローマ共和國はイタリア統一國家の新エネルギイによつて、南進しては、三次に渡るカルタゴ戰爭を通して、東進してはマケドニア戰爭並にシリア戰爭を通して、地中海圈の大植民地を獲得し、以つて先進フェネキア並にアレキサンドリア文化の後繼者たる歷史的主體を確立したのである。

恰も此の西洋古代統一國家の出現期は、東洋に於ても亦、劃期的な歴史の躍動期であつた。北方よりは朝鮮を通じて滿洲族、モンゴリア族、南方よりは太平洋諸海洋民族、西方よりはオリエント並に南支那諸族の日本列島への、原始的移住並に先住アイヌ族との闘爭の時期を經て、天孫民族のそれら諸族統一として、日本國家の擡頭が始まる。此の狩獵的漁撈的時代より農業生産時代への轉換期に於て、民族の生産様式は「部」の組織の下に統一的社會組織をみると共に、太平洋を抱くアジア大陸の南岸に開華せる廣大な東洋文化圏の主體として、諸文化統一の國家形態を出現したのである。

此處に、太平洋諸島とカナダ、アラスカ、オリエント、南支並に滿蒙、北支を圓周とする大東洋文化圏の中點として、それらの諸民族の古代的信仰の統一形態たる祭政一致の國家の發展が始まり、日本の世界史的役割が運命づけられたのである。

斯の如き日本とローマは支那、印度、オリエントの三大文化高峯を俯瞰しうる統一國家形態の古典的な二大範例として、古代世界史の東西を占めたのである。併し、ローマ共和國は階級闘爭に亞ぐに奴隷の反亂、劍士の暴動絶えず、遂に三頭政治の時代に至つて、新な歴史段階が歐洲、オリエント、アフリカを圓周とする西洋圏の處々に起り始めた。

紀元前六〇年シーザーのガリア、ブリトン、ゲルマニアに對する遠征は、オリエント・アレキサン

ドリア文化の後繼者たるローマ文化の歐洲への傳播となつた。かくてライン、ダニューブを中心とする歐洲、——ローマ史家タキッスの語る處に據れば、ローマ滅亡まで何等の文化的發展をみせなかつた歐洲は、ローマを媒介として、オリエント高峯より流れ來る文化灌漑に浴し始めたのである。

他方、これと時を同じうして、ポンペイウス、ケーザル、オクタヴィアヌスの相次ぐ南方古代文化エジプトへの魅惑——古代エジプト大帝國繼承の意慾は、遂に古代エジプトとギリシアとの統一者、末期王朝エジプト國家を滅亡に導き、かくてアフリカ並にアジアに對するローマの軍國主義的侵略が續く。此處にローマ共和國よりローマ帝國への段階となり、世界のあらゆる文化と富はローマに流れ來つた。

此のクリスト紀元を中心とする二世紀間こそ、かつてのギリシア・ペルシア戰爭に表現された東西鬪爭に次ぐオリエントと歐洲との世界史的戰爭の時代であつた。原始クリスト教はギリシア・オリエント・エジプトの統一宗教として、ローマ帝國東漸への逆襲を試みるのであつた。かくて、ローマ帝國は一方に於ては、先進諸文化を繼承克服せる國家統一エネルギイの發展を通して、其處に再生産された統一的文化形態をヨーロッパ、アフリカ、アジアに賦與しつつ、他方では植民地對ローマ中央貴族の對立・矛盾、軍隊の實權掌握と並んで、東よりはクリスト教の浸潤、北よりはゲルマンの侵入に

遭ひ、帝政末期への悲劇的必然性を愈深めてゆくのであつた。

その後、紀元後四世紀前半に於てコンスタンチヌス帝が斯の如き諸矛盾の再統一を試みんとして、都をビザンチユームに遷すと共に、クリスト教を公認し、以つて其處に統一されてゐたオリエント諸植民地の反ローマ思想陣營の破壞に奏功したとはいへ、北方よりのゲルマン侵入によつて、遂にローマ帝國は東西に分裂する悲運を如何ともなし得なかつた。かくて、古代世界國家ローマ帝國は西方を四七六年に至つて、西ゴート族のローマ掠奪と共に放棄し、獨り東ローマ帝國を通して、五世紀より十五世紀中葉に至る苦難の十世紀間を生き延びたのであつた。

2 中世の日・獨・伊

此のローマ帝國の分裂・衰頽に乘じて、その帝國圏内の諸民族の反亂と共に、漸く暗黒歐洲はローマ植民地の位置より獨立し、六世紀初頭に至つて、ラテン・ゲルマンの統一者として、歐洲における

ローマ文化を繼承しつつ、フランク族の發展となる。かくて、第九世紀中葉、フランク族の歐洲統一の分裂によつて、此處にライン以東を領有すべく、ドイツの國家的起源が始まるのである。

此のローマ帝國分裂の五世紀より、ドイツ國家の起源に至る四世紀間は、歐洲の古代國家より中世封建制への過渡・展開の時代であつた。そして歐洲は西ローマ帝國の後繼者として、一方に於ては法王廳の封建的歐洲制覇確立期であり、他方ではローマ植民地下の歐洲諸民族の獨立・擡頭・爭覇の時期であつた。

オリエントに於ては、東ローマ帝國は、ローマ植民地下にあつたオリエント諸民族の再編成者として登場し來つた七世紀のアラビアの勃興によつて逆襲さるる處となり、その根柢の震撼、教會の東西分裂を經て、一途に衰運を辿る。此のアラビア勃興より蒙古、トルコの相次ぐ西漸によつて、遂に一四五三年のムハメット二世のコンスタンチノープル占領に至る八世紀間における東ローマ帝國は、十字軍、ラテン帝國並にトラペズント帝國の建設、東ローマ帝國再興等によつて、東方民族の反擊に備ふる凋落的防衛の憐むべき苦悶に過ぎなかつた。

然るに、アラビアのサラセン帝國の發展は西方スペインより、東方印度に及び、古代ローマ帝國のうちに吸收されたるギリシア・オリエント・エジプトの文化再生産者として、アジア西方に君臨すれ

ば、アジア大陸中原にあつては唐の燦然たる文化極盛期であり、極東にあつては大化改新より奈良、平安の日本古代文化興隆期であり、東洋文化圏の旺盛なる交渉・發展の一環せる世界史的躍動の時代が流れてゐるのである。

既述せる如く、嘗てローマの生成發展期において、日本の古代世界史に示した諸民族統一の古典的性格は、此のローマ衰頽とドイツ國家發生の時代に於ても亦、光輝ある世界文化の諸高峯として聳え立つた東洋文化圏を繼承發展しつつ、オリエント、印度、支那の統一的主體性の國家形態を展開してゆくのである。

然るに、ローマは既に、古代オリエント諸民族の文化傳承の統一的實現を完了すると共に、他方ではローマ植民地の自治制を確立し、世界法による政治構成の古典を實現するや、その世界史的役割を畢つた。かくて、歐洲は前述せる如く、一方に於てはゲルマンをして、西ローマを繼承せしむべき中世封建制の地盤の展開をなし、他方では東ローマをして、アジアの勃興、逆襲に備へしめたのであつた。併し、此の東ローマにおける東西文化交流の文化的經濟的中樞たるビザンチューム形態が、アジアの突撃隊たるアラビア、蒙古、トルコの相次ぐ壓倒的反撃の前に動搖苦悶するや、法王廳の歐洲僧侶的中世形態のうちに攪亂と龜裂の運命が宿つたのである。

此處に再び、歐洲諸民族の相互移動・侵略の時代が始まり、ライン以東の東フランスとして其の起源をみたドイツ國家は、混亂の渦中に追ひ込まれた。此の渦中より、ドイツのオットー大帝は法王領のゲルマン的統一者として誕生する。かくて、九六二年、神聖ローマ帝國の結成と建設が始まるのである。これこそゲルマン民族の華々しい發展であり、また其の歐洲制覇への憧憬と理想を物語るドイツ建國史の古典に他ならぬ。

併し、此のドイツのゲルマン・ラテン合體としての、歐洲南北統一運動の理想も、法王權と國王權との現實的矛盾を解決することは出來なかつた。かくて、神聖ローマ帝國は、此の兩權對立の尖銳化の三世紀を經て、遂に十三世紀中葉における大空位時代を現出するの止むなきに至つた。このことはハップスブルクの國王選擧となり、オーストリアの基礎を構成せしめ、ドイツをして歐洲の貧困せる北邊に疲弊のどん底に喘がしめるのであつた。その後、數世紀に及ぶドイツの貧困の忍從はドイツ民族の血潮の中に慣習化されると共に、他方では十六世紀のルッターのローマ法王反對の宣言を通して宗教革命の大爆發を導いたのである。

顧みるに、此の神聖ローマ帝國こそは、ゲルマン・ラテンの中世的統一文化形態の建設者であつた。而して世界史的聯關より云へば、アジアの歐洲侵入による中世的歐洲圈の龜裂より生ぜるものであり

歐洲史より云へば、中世的歐洲民族國家の獨立的な、即ち、相互分立的な形態發生への媒介者であつた。

洵に、此の神聖ローマ帝國に內在せる法王權と國王權との對立は、中世的歐洲イデオロギイの統一的完成を必然化し、其處にドイツの生める中世最高の天才、アルベルッス・マグヌスのアリストテレース的世界體系が作り出されたのである。歐洲中世の完成期であると共に、沒落期たる十三世紀を步む偉大なる體系家アルベルッスの精神は、哲學と神學と自然科學の全文化領域を貫きつつ、夕にドミニクス團を率ゐ、朝にパリ大學を主宰せしかと思へば、またラインの文化構成を指導する。かくて歐洲中世の最高峯スコラ哲學體系の完成者、トーマス・アキナスの準備段階を創り上げ、其處に中世再構成としての歐洲文化統一のイデオロギイ體系が成し遂げられたのである。それは實にギリシアとオリエントとラテンの諸先行民族の文化遺產に對するゲルマン的繼承形態であつた。

その後、アルベルッスのドイツにおける後繼者、エックハルトの神祕主義にみられる如く、神聖ローマ帝國の矛盾・崩壞に亞ぐ近世的民族國家の萠芽の必然性が一方では肯定されつつも、他方に於ては猶スコラ哲學による中世の統一的構成が祈願されてゐた。エックハルトの言葉を藉れば、世界の一切の生成は、無規定なる神そのものが自己に對して、自己の神性を啓示しようとする認識過程に外な

らず、世界の生成轉換は、すべて必然的なものとして、神の自己啓示の過程のうちに位置づけられたのである。斯の如き世界必然性の解釋は、アリストテレース哲學の中世的再生産であると共に、中世より近世への過渡における、新なる世界關係の萠芽の必然性を容認せざるを得ない中世の苦惱の表現であつた。そして最も重要なことは、此の全存在の必然性の合理化こそは、ドイツの資本主義的近世國家の擡頭・統一を方向づけたロマンティクに再現する如く、實にドイツの傳統的思想の基礎を置いたといふことである。

3 近世の日・獨・伊

以上の如く、ドイツが神聖ローマ帝國以降、新な世界關係のうちに受難の歴史を辿つてゐる頃、イタリアは十字軍の遠征に伴ふ東洋貿易の發達を通して、商業都市の殷盛を來し、近世文藝復興を培ふ初期商業資本主義の展開を示し始めた。それと同時に、中世イタリアはローマ帝國衰微後の引き續く

政治的分裂にも拘らず、法王權によつて依然歐洲世界の精神的文化指導者の役割を果したのである。

ところで、斯の如き北歐における神聖ローマ帝國、南歐における商業都市の發生期に、吾々は恰も嘗てのローマの世界史的統一國家の發展期にみた如き、全世界の困亂・交流の中世的世界躍動の時代を發見することが出來る。正にオリエントの再興は歐洲に向つては、東ローマ帝國の衰退と共に歐洲諸形態の新生への過渡史を展げしめ、東洋に向つては十世紀のアフガニスタンにおけるガズニ回教徒王國の建設、印度の回教徒再建を經て、金國、蒙古の擡頭に連なる。此處に漢民族の衰頽に代つて、支那は十三世紀後半に至つて、元朝の天下統一となり、その版圖は西洋に及ぶのであつた。

かくて、十四世紀後半より元の地盤繼承者として立つた明朝支那の西洋貿易の隆盛は、前述せる南歐の初期商業資本主義都市との聯關を導き、此處に東洋と西洋との世界史的交流が劃期的な時代を作るのである。

然るに、極東にあつては日本は古代の古典文化の形態化を完了し、莊園の發展を通して、中世封建制の地盤を生長せしめ、十二世紀末の鎌倉幕府の成立より、中央集權の二分と宗教革命を經て、十五世紀の足利時代に至る。その間、日本は嘗ての東洋文化圈の國際的交流の統一期より、國內の諸地方における中世的充實期へ展開し、以つて次代の世界史的役割への收縮的自己凝結の時代を形成する。

而して此の凝結は、その日本第一次中世の末期における元の澎湃たる激浪を媒介として、足利時代の海外發展へ膨脹し、再び世界史上に登場するのである。

此處に、日本は商業制の初期發達を遂げつつ、下剋上思想に表現される如き近世的性格を齎すと共に、クリスト教傳道の形に於て、東洋と西洋との近世初期の大交流史のうちに參加したのである。かくて、舊封建制の崩壞、日本中國の再統一、壯快な日本文藝復興の展開と同時に、秀吉をしてアジア統一への潮流に乘らしめる。

此の日本の秀吉的エネルギイは朝鮮進出を通して、明朝の衰微を來さしめ、滿洲民族をして支那の繼承者たらしめるのである。この時代こそ、西洋の近世的勃興に伴ふ、東洋への逆襲期の初期段階であつた。即ち近世的ヨーロッパがオリエントとアフリカを越え、印度並に支那より日本への世界制覇が唸りをあげた時である。

併し、斯の如き世界史的變革期における歐洲の近世的主體の確立は、歐洲自體にあつても亦近世的革命の困亂・闘爭の諸段階を經ねばならなかつた。ドイツは宗教革命以後農民戰爭、三十年戰爭を經て疲弊困憊のどん底につき落され、歐洲の近世的主體は西ヨーロッパの南方より北方へ移轉しつつ、イギリスの十六・七世紀における資本主義勃興期が始まる。此の十四・五世紀の英佛百年戰爭よりス

ペイン無敵艦隊戰爭を通して、十八世紀のカナダ並にインド掠奪による大英植民地帝國の確立へのイギリス資本主義勃興の時代こそ、マグナ・カルタ以降絶えざる內部革命の暗澹たる大鬪爭期であつた。而して斯の如き、近世資本主義國家の確立への革命に次ぐ革命の生んだ諸歷史的訓練の蓄積は、遂にイギリスをして、歐洲の近世的主體たらしむると共に、自己の世界關係の統一へ乘り出さしめるのである。

かくして、嘗ての東洋よりの大潮流がイタリアの地中海文化圈における近世的ルネッサンスを媒介として、荒寥たる北大西洋に入るや、東洋への逆流を始めたのである。此處に、十八、九世紀の歐洲近世の世界普遍化の時代が續く。このことは、近世初期の媒介的役割を擔つたイタリア・ルネッサンスと日本ルネッサンスとの接觸期における日本アジア統一エネルギイを後退せしむるに至つた。かくて、第一期日本封建制より東洋の新なる歷史形成に躍進し始めた日本エネルギイは、餘儀なく第二期封建制へ逆轉・收縮し、次に來るべき世界史の潮流に乘らんとする、再度の自己凝結を行ふのであつた。

併しながら、此の德川鎖國主義は西歐の壓倒的な東洋進擊をうち止めんとする世界史的必然性のうちより生れたとはいへ、そのこと自身が內在的に孕まざるを得なかつた經濟的・政治的諸矛盾を克服

し得ず、遂に十九世紀中葉に至つて、大政奉還をなすと共に歐洲近世の普遍化の波に乘り出したのである。

これに稍遲れてドイツは、英佛の近世歐洲の主體確立のもたらした世界的大圓環の中心に迫らんとして、二月革命に於てメッテルニッヒの失脚するや、聯邦會議並にプロイセンツーム覇權を通して、近世的國家統一を圖る。此のビスマーク政策の遂行は普墺戰爭、普佛戰爭を必然化し、皇帝ウヰルヘルム一世の新獨逸國家の出現となり、歐洲諸國の相互鬪爭の諸矛盾を激化せしむる。かくて、イタリアも亦ドイツにおけるが如く、ナポレオン戰爭を媒介として、即ちナポレオンのローマ諸王國の統一を契機として、カヴール、ガリバルディの國民的英雄の活躍となり、エマヌエル二世のイタリア近世國家を出現する。

かかる十九世紀後半における日獨伊の國家的擡頭は、歐洲にあつては、西ヨーロッパの近世的主體をめぐる諸國家の抗爭を深化し、歐洲世界大戰への末期的矛盾を增大せしむると同時に、東洋にあつては日本の西歐進擊に對する逆襲的勢力の擡頭・蓄積を通して、近世末期の危機振動を急速化せしむるのである。

4　現代の日・獨・伊

斯の如き歐洲近世末期の表現こそ世界大戰であつた。かくて、あらゆる戰爭が新なる形態を生產する客觀的役割は、ソヴィエト・ロシアの近世歐洲批判者としての媒介的國家形態を新生せしめ、從つてヨーロッパの普遍化たる近世世界史の否定者として、東西兩洋にその思想的陣營を擴大するに至つた。この歐洲否定の陣營は、大戰後その疲弊の極地に追ひつめられたドイツとイタリアに浸潤する。これに抗して一九一九年ミラノに結黨せるファシストはムソリーニの指導の下に、一九二二年イタリア政權を獲得するや、國家統制の獨裁政治强力化をもつて、ソヴィエトに對立する歐洲擁護の役割を擔はんとするのである。

この歐洲擁護線上に、極度の困亂と革命を經たるドイツも亦、ヒンデンブルク大統領の暫定的安定期における一九二九年のアメリカ恐慌を契機として、ヒトラー「愛國綱領」の下に、第三帝國を登場

せしむる。

併し、この時既に日本は帝政ロシアの極東侵略を撃退し、次いで歐洲大戰を通して世界の政治・經濟の中樞に侵入しつつ、マルキシズムの近世史批判と日本主義の西洋批判とを媒介として、自己の諸民族統一の古典的理念を新に磨き上げ、以つて歐洲に代るべき新なる世界主體の初期擡頭期を形成したのである。此の世界變革の日本エネルギイは西歐近世の母體たる東洋の新編成によつて、近世主體の崩壞を導く。かくて、イギリス植民地帝國の動搖はファシズム・イタリアとナチス・ドイツに歐洲再編成の可能性を與へ、英國は此の伊獨に對してあらゆる妥協を提出しつつ、自己の世界維持に狂奔し始めるのである。

このことこそ、イタリア並にドイツの、ソヴィエトとイギリスとによる挾殺を意味し、此處に伊獨の反ソヴィエト陣營は急速に相提携して反英陣營へ轉化せねばならなかつたのである。併し、此の必然性は新なる世界變革の世界史的必然性と離れては存在し得ず、今や伊・獨は日本のアジア的主體による世界革命の一要素として、解消し行く運命の下に横はつてゐるのである。

此の世界革命に參加すべき光榮ある運命は、日獨伊防共協定の名に於て象徵され、歐洲崩壞促進の役割を遂行し行くのである。かくて、獨伊の歐洲擁護は、歐洲瓦解へ變轉し、新世界建設への媒介的

榮譽を克ち得んとする。正しくムッソリーニの標榜せる大ローマ帝國復興の洪業は、ローマのもつた運命の如く、東西交流による新世界文化の傳道者たる世界史的使命の遂行と共に、燦然たるローマの死を憧憬するであらう。而して、正しくヒトラーの念願せるゲルマン的歐洲統一の聖業は、神聖ローマ帝國の運命の如く、新なる歐洲の諸民族國家形成を媒介しつつ、歐洲の苦惱を背負ふゲルマンの悲劇的光榮を追想するであらう。

このイタリアに向つて、今こそ日本は徹底的に東洋文化賦與のあらゆる援助を成すべきであり、このドイツに向つては惜しみなく、歐洲危機激化による新歐洲建設の媒介的任務を後援すべきである。この二つは日獨伊の反英共同戰線上における日本の重要な役割でなければならぬ。此處に、諸民族にその處を得せしむべき日本の古典的性格の宿命的躍動が存し得るのである。この實行の具體的體系を樹立せずして、徒に世界的日本といふ如き言葉を語ることを止めよ。

五　ヨーロッパ・アフリカ・アジア

1　ヨーロッパ人道主義

世界の大陸、アフリカで、一億七千萬のネグロが一片の果物、一個の芋をも自由に食ふことが出來ないといふ事實を、誰も訝らうと欲しない。不思議を抱くことは知識の初めであると語つた古人は、何故知識は悲しみの初めであると附け加へなかつたのであらうか。

「金の國」日本をたづねて、西ヨーロッパが船出をして以後、第一次アフリカ大陸分割に至る慘澹

たるネグロの數世紀に亘る抗爭は、今や既に「奴隷の追想」となつた。今日では西ヨーロッパ諸國の會社・銀行があの豐かな大陸自然のみならず、ネグロを所有してゐるのである。從つて、ネグロは腹が空いた時自由に採つて食つてゐた一個のバナナや、オレンヂを、それを所有する植民地會社を通じて、市場で、夫々の植民地政府の貨幣をもつて買ひ求めねばならぬ。かくて、貨幣はアフリカに於ても「自然の鐵鎖」と化したのである。

西ヨーロッパの植民地政府の報告文書によると、ネグロの勞賃は、英・佛・葡・西を通じて略邦貨一日八十錢であるが、複雜な中間搾取によつて現實的には十錢が一般の狀態である。併し、この驚くべき賃銀に代ふる肉體は、更に人頭稅なるものを支拂ふ重要な器具なのである。男一人宛一年に二十四圓、女は二十圓、子供は八圓を强制徵收する慘虐さは誠に秩序ある近世文明の知性の賜物に外ならぬ。而もこの子供の人頭稅を逃れんとする產兒制限は、敎化の美名の下に嚴禁され、その法令を冒したために、强制勞働に從事せしめられるネグロは年々數へることの出來ない夥しい數に上つてゐる。その勞働力によつて、道路は建設され、農場は賓り、病院は造られる。アフリカ文明はかくて形成され、西ヨーロッパの文化主義はかくて稱揚せられる。

ネグロを文明開化するといふ宣言に從つて、ネグロは太陽の直下で衣服を着用せねばならない。こ

の教化運動策源の中心地は、云ふまでもなく、マンチェスターであり、リヨンであつた。かくて、ネグロは大なる文明人、即ちイギリス並にフランスの紡績會社の利潤を生む機關となつたのである。もし衣服を着用せざれば、罰金もしくは强制勞働に服從せしめられるのである。首や手足を鐵鎖に縛られて勞働に服する、此の無數の黑人は、誠にイギリス、フランスのプロレタリアートの勞賃を生產するのである。

十錢の勞賃で、人頭稅を拂ひ、着物を買はねばならぬネグロは、從つて强制勞働に服役するか、然らずんば逃亡するかの二途しか殘されてゐない。そこで、西ヨーロッパが思索したことは集團住宅であつた。即ち、土小屋を農場、工場、市場或は港灣、運搬會社等の近くに建造して、勞働力の集結を行ふのである。是等ネグロを逃亡せざるやう、圍ひつきトラックに乘せて、夫々の勞働場所に運輸する。逃亡者は勿論强制勞働に服せられるのであるが、この逃亡防止の爲に、各集團地區毎に兵營と區役所を設け、ネグロ移動に對しては嚴重な通過證を發行してゐる。ネグロは一の集團地區より一定の集團地區への移動しか出來ないのである。

斯の如き集團住宅區はイギリスの創見にかかるものであつて、フランスとベルギイは其の例に倣はざることをもつて恥辱となしてゐる。日本よりコンゴーへのトタン輸出はこの爲に使用されてゐるの

である。今やベルギイはマラリヤ蚊退治と農場經營を兼ねて、此の集團住宅と兵營の建設の爲に、大コンゴー河流域の森林を燒き拂ふ。その炎々と燃え盛る大なる森林と盆地。その壯大なる悲哀こそヨーロッパ人道主義を培ふべき豐饒なる肥灰なのである。

かくて、ネグロ大陸は廣汎な市場として存在するのみならず、西ヨーロッパに對して勞賃なき勞働奴隷を提供する大陸となつたのである。併し、このことは豈ネグロ大陸に限らず、アジア大陸に寧ろ一層進歩せる殘虐さをもつて實行されてゐることを想起すべきである。

東印度會社よりムガール帝國壞滅、イギリス印度帝國の成立に於て、またイギリス輕工業の競爭者であつた印度紡績職工の手を切斷し、以つて自己の輕工業市場を獲得せる歴史に於て、マンチェスターの齒車の廻轉數と同じだけの屍が印度に曝されたことを、忘れたであらうか。阿片戰爭によるイギリスの支那虐殺を忘却せる者は、獨りヨーロッパ人道主義の知性旗をふりつつ打ち興ずる日本の支配的知識階級に過ぎぬ。

2　アフリカの反英陣營

上述せる如きアフリカ大陸は、單にネグロの生活問題から窺はれたにすぎず、今日頻に行はれてゐる强制勞働による集團住宅、兵營、道路、鐵道の建設とアフリカ航空路開拓は、この數年來の第二次ヨーロッパ大戰、特にイギリス・イタリア抗爭の戰線から觀察されねばならない。

アフリカにおける經濟・政治・軍事・文化の動脈は南阿と北阿である。即ちネグロ人の大陸にあらずして、南阿の印度人及びボア人と北阿の回教徒である。前世紀末より今世紀初頭にかけてのボア戰爭即ち英國の南阿侵略戰爭の時、ドイツのカイザーは自己の南進政策上全力をあげて、ダッチ・ボア人の反英勢力の代辯者クリューゲルに莫大な武器と軍事資金を提供したのであつた。その結果、たとへ南阿が英國の所有に歸したとはいへ、二つの重要な反英線の歴史的地盤が培はれた。

一はタンガニカと西南アフリカ及びカメルーンによる南阿並に英領に對する獨逸勢力。是等は歐洲

大戰後、英・佛の委任統治地になつてゐるとはいへ、今日の歐洲國際危機は再び歐洲大戰直前の姿勢のままに、直に南阿に反映されるに至つた。

他はボア戰爭によつて、ボア人が南阿金鑛地より追はれ北部の農業地區に定着すると共に、印度における英國の壓迫より逃れ來る印度人と密接な關係の下に立つた。この線がやがて一九二六年春のガンジー指導下の南阿ゼネ・ストの地盤として發展して行つたのである。同年初夏の北米における白人勞働者並に黒人勞働者の合同大ストライキ、更に同年夏におけるハンブルク黒人全大會がドイツ共産黨指導下に開催されたのも、その延長であつた。併し、此の黒人共産主義運動はアフリカ自體にあつては現實的には勢力を培ひ得ず、今日民族運動となつて、北阿におけるファシズム指導下の回教徒並にセミチック・ネグロ、ハミチック・ネグロの活潑な運動の線に糾合されるに至つた。

南アフリカにおける、日毎のストライキと反英運動のアジ演説を、騎馬巡査が追ひ拂ふ狀勢の背後に、ナチスの舊ドイツ領手入れによる對南阿包圍とファシズム回教徒南下との二大勢力が脈搏つてゐるのである。ナチス・ドイツは、一九三六年末迄は、一方ではソ・佛協定による對ドイツ包圍陣を打開せん爲に、他方では舊ドイツ領奪回の戰術として、イギリス牽制と同時に親英政策をとつてゐた。或時には親英政策を表面とりつつも、ナチス植民地委員會の組織網は、實に體系的に全アフリカに張

られて行つた。ところが、バルツゥ暗殺事件後の佛・伊關係の惡化、エチオピア、スペイン問題、アラビア人問題等を通じて、ムソリーニの大ローマ帝國主義の下に、反英地中海線並にファシズム南進の政策が廣汎な陣營を强化した一九三七年春より、獨・伊接近の反英新歐洲陣營の成立をみるに至つた。かくて、既に度々述べた如く、ヒトラーは親英政策の假面をぬぎ、反英陣の一翼を明瞭に形成すると共に、對ソヴィエト北進政策の陣容整備にとりかかつた。この爲にムソリーニはナチスの中歐、バルカン進出による佛・ソの包圍陣破壞を承認すると同時に、ナチスのアフリカにおける諸勢力を自己の反英戰線上に統一したのである。

今や南阿は歐洲危機と共に、ボア人、印度人、及び反英・佛のネグロのファッショ統一戰線によつて包圍されんとする形勢下にある。そして東阿においてはタンガニカのザンジバル島を中心としてゐた回敎徒線が伊領リビア並にエチオピア、ソマリーランドを貫くファシズム陣營に連結せしめられ、西阿にあつてはギネア灣の根元に横はるスペイン領フェルナンド・ポー島におけるフランコ勢力と、元獨領カメルーンを中心とするナチス勢力とが英領ナイゼリアの三大回敎徒王國即ちハウサ、ヨルバ、ベニンのファシズム勢力と合體しつつある。

西阿の委任統治地領カメルーンや英領ナイゼリアに於ては、スペイン問題勃發後、葡領アンゴラと

西領フェルナンド・ポー島よりフランコ軍に馳せ投ぜんとするスペイン人を滿載したチャーター船が英佛領の寄港不許可の爲、停船の止むなきに至つてゐる。この爲に英・佛・白領の港灣從業ネグロ勞働者のストライキは例年に比して飛躍的な數を示した。これらの指導者は概ね曾長經營のネグロ新聞社と辯護士クラブに屬してゐる。ところが新聞經營者並に辯護士は、今日では殆どファシズム回教徒商人の資金によつて動いてゐるのである。ここにこそ、スペイン問題後のストライキ頻發の理由があるのである。

このムソリーニの大なる陣容に對して、逸早くイギリスはネグロ糾合としての集團住宅、兵營、軍事道路、鐵道の建設にとりかかると共に、フランス、ベルギー、オランダ、ポルトガルの共同資金によるアフリカ統一戰線の準備をなしたのである。併し、既にポルトガルはサラザールのファシズム綱領によつて移行しつつあり、スペイン問題は對佛・ソのみならず、北阿の佛領アルゼリア・モロッコ問題並に南米のスペイン・ラテン問題につらなり、エチオピア問題は單にエジプト・スーダン牽制のみならず、アフリカにおけるリビア、ソマリーランド、ケニア、タンガニカの統一ファシズム線擴大となつた。そして、エジプト、アラビア、パレスチナ、トルコ及びイラン、印度に跨がるファシズム回教徒陣營を強化するものであつた。

今日コンゴー盆地を中點として、南は南阿聯邦、東は英領タンガニカ並に葡領モザンビック、西は英領ナイゼリア、佛領赤道アフリカ、葡領アンゴラを連結する英・佛・白・葡・和共同出資の鐵道敷設問題の進展とアフリカ縦横空路開設とは、ネグロ集結設備の急進展と相俟つて、完全にアフリカに於ける歐洲第二次大戰の姿勢をとつた。

兵營は勿論、交通路に關するネグロ强制勞働は從つて、驚くべき嚴重な監視下におかれた。併し、北阿においては事情は甚しく異つてゐる。エチオピアに於て、イギリスはその封建領主を通して反ファシズム運動を起さしめ、英・伊鬪爭がしばし行はれてゐたが、一九三七年リビア・ファシズム陣營の組織的な擴大をみるに及んで既にイギリスは如何ともなし得なくなつた。また同年のパレスチナにおけるアラビア人問題、即ちリビア道路建設の際統一化し得たファシズム回教徒の發展として、パレスチナにおけるアラビア人の手によるイラン・アングロ石油會社の石油鐵管破壞事件、日伊防共協定、フランコ政權の確立、佛領アルゼリア、モロッコにおけるムソリーニ線樹立を通して、北阿におけるイギリスの徹底的後退が始まつた。

他方、ナチスのホテル・新聞・商店及びキネマ・ラディオ・カメラ陣營の買收はすさまじい勢ひで進捗されたのであつた。それがイタリア領を中心とするファシズム回教徒線を通して遂行されてゐた

のである。ナチス買收の商店並にホテル、新聞社はナチスの人名簿作製を通して、伯林の植民地委員會とドイツ技藝院並に文藝院とに密接な關係を保ちつつ、北阿回教徒インテリゲンチヤを完全に獲得した。

然るに、ムソリーニはファッショ各組合をリビア、エチオピア、ソマリーランドに、派遣すると共に北阿回教徒勞働者の組織化に成功したのであつた。而して今や、この兩者がムソリーニ治下に統率されつつ、中部ネグロ大陸及び南阿における反伊・イギリス勢力の統一戰線に比して、北阿は既にイタリア大勢決定せりの感を抱かざるを得ないのである。

一九三八年の英伊協定におけるエチオピア、スペインのファシズム權承認は勿論のこと、宗教自由權の問題や紅海並にアラビア諸王國の問題など、すべて斯の如き大ローマ帝國主義下の回教徒陣營確立によるムソリーニの勝利を物語るものである。今やアフリカは、單にネグロ大陸に關するのみならず、西は南米、東は印度に及ぶ反英大ムソリーニの世界史的動脈たらんとしてゐる。

これに對する日本のアフリカに於ける消極的態度を、全アフリカの新聞社、カメラ・クラブ、辯護士クラブ、印度人及び回教徒商店は悉く次のやうに批評してゐるのである。

「日本は何故粗惡なる商品のみを送つて、その商店をおかず、絕大なるエナージイに拘らず何故吾

々に言葉をかけないのか」。

3　回教徒圏と日本太平洋圏

アフリカはかくして、ナチス並にファシズムを媒介として、アジアに連結されんとしてゐるのである。而も幾重にも疊まれた世界史の通路を通つて、今やアフリカは日本太平洋圏の中に立ち上つたのである。一方に於てはファシズム回教徒を通して印度、支那回教圏に入りつつ、他方に於ては印度、南阿、アメリカに脈搏つ印度獨立とそれに並行せる有色人種解放運動を通して、日本、アジア、アフリカに新な動脈が流れ始めたのである。

嘗ての回教圏は西にあつてはアフリカ、ヨーロッパに、東にあつてはスマトラ、印度、支那にアジア的中世の代辯者として大なる世界史を構成したのであつたが、一度ヨーロッパ近世を媒介するや、その繼承・發展せる南方世界史通路は逆にヨーロッパの東方進撃の路と化すると共に、東洋と西洋と

は劃然とした二大世界階級となつて、東洋は西洋の被支配階級の役割を果すに至つた。併し、此の西洋と東洋との媒介者たるオリエント回教圏は、そのアフリカ、アジア二大陸を繋ぐ廣大な血管をもつて、再び東西兩洋のコペルニクス的轉回をなすべき、新なる鼓動を開始したのである。既に死火山と見えた此の長蛇の如き山脈は、死せる土塊ではなかつた。嘗ての回教陣營スマトラを媒介として太平洋、印度洋、地中海の交流における日本は、今再び噴火せる此の回教圏に東西媒介の歷史的使命を擔はさればならぬ。

新なるヨーロッパをファシズムが架橋する如く、新なるアフリカとオリエントを回教徒が仲介せんとしてゐる。此の架橋・仲介の西端を、南米ファシズムと北米ネグロ民族運動に握らしめ、その東端を日本エネルギイに支へしめねばならぬ。此處にアフリカ、アジアに延びる回教圏は日本を中點として、アメリカ大陸に結ばれ、日本太平洋圈の統一ある圓周が形成されるのである。

かくて、印度とオセアニアは、此の太平洋圏の中庭として、アジア大陸の兩翼たるアフリカとアメリカに呼びかけあふ陣營となるのである。併し、このことは未だ歷史の一の抽象化に過ぎず、何人もイギリス植民地帝國の、眞の地盤たる印度とカナダに對する日本エネルギイの浸潤なくして、斯の如き太平洋圈の統一的再建を思考し得ぬであらう。

蓋し、回教圏は今辛うじて、西はファシズムによつて、東は日本エネルギイによつて結合されつつイギリス世界史の一龜裂を生み始めたばかりである。南米ファシズムと南阿民族運動と印度獨立運動とを結び付けるべき日本の理念體系がないなら、此の回教圏の發展は世界變革の方向から脱落せざるを得ない。此の回教圏と太平洋圏との反英統一運動の生長によつて甫めて、カナダ問題は世界史轉換の最後の決定點となつて現れるのである。あらゆる萠芽を夫々の位置において生長せしめずして、畑の實りを待つ貪婪なる無知は、日本の今日の特色ある様相を彩つてゐる。アジア再建の聖戰の聲のみ高くして、その具體的世界政策の低きは、何に據つてであらうか。

近世史的世界と國防概念との結束によつて、自己を世界に與へ普遍化することから、自己を守護し特殊化する方向を辿り、以つて新なる世界關係の樹立を放棄せるが爲である。國防にあらずして、國生みの日本理念は、今や數世紀に及ばんとする此の世界史的變革の眞中にあつて、あらゆる諸關係を統一するに足る具體的體系をもつて、被支配階級としての諸民族の呼ぶ聲を聞かねばならぬ。アジア再建をして、眞に諸大陸の範型として戰ひ貫かしめねばならぬ。

六　世界における日本エネルギイ

1　日本支配階級の植民地性

ヨーロッパからアフリカ、近東、印度を經て、日本に着く人は、恐らくこれは何處の植民地であらうかと、頭をかしげさせられるであらう。

官廳、銀行、會社、學校、病院のみが大きく聳え立つ日本。その下を風評と給料を計算しながら蠢めく知識者達、糞詰りの青瓢簞共が西歐まがひの單語を懷に入れて、日本は困つたものだなど大きな

顏をしたがる。感心なことに、イギリスやフランスが他民族犧牲の下に築き上げた資本主義帝國の中に腐爛する人間とか知性といつた近世的單語をも數個もち合せることを忘れない。更に殊勝にも、フランスは文化を守り、ドイツは否定する國、イギリスの植民地並に半植民地を他の國家が侵した場合には帝國主義的侵略であつて、イギリスが永久に侵略し、搾取してゐる場合には世界平和であるとかイタリアは乞食の國であり、ソヴィエトは理想の國だとか云つた、ジュネーヴ產國際知識をも立派に暗誦してゐるのである。

支配的地位にある人々は、是等の知的乞食に守られて、自己を生長せしめた近世的世界を維持し、合理化し、その蒼ざめた心臟をもつて、猶よくその貪欲なる胃袋を養ふ。日本の歷史と國民を忘れた彼等は、ひたすら日本エネルギイの擴大を恐れる。蓋し、日本歷史の發展は、近世的世界を否定するからである。

ハイネは何事かに就いて思ひめぐらす知的乞食を嫌つたが、大なる直觀と眞實なる愛情は何事かを乘り超えることを要する。誠實なる魂は思ひめぐらすことを止めて、生長を夢みる。義を爲す者尠き現代にあつて、彼はよく義憤することを忘れず、萎縮せる知識を去つて、彼はよく大なる愛情に死する。彼は紳士の國なる近世都會に立つて、官廳や銀行、會社や大學と何んの緣りもない茅屋から飛び

出す太陽の子達が、意氣揚々と歌つてゐるのをみる。一個の國際的な單語も知識も持たないで、身輕さうに大陸を呑み世界を創建せんとする、日本國民の有する勢力の極大を凝視する。それに反して日本紳士の意識の極少を憎惡する。この國民の歷史的勢力の極大と、近世的紳士の意識の極小は何處から來たのであらうか。

アフリカや近東、印度やマレー半島で一貫した特質は、官廳、銀行、會社、學校、病院の巨大、そして學校を卒業して、人頭税徵發や勞働監督の地位に上つた支配的知識者のもつ國際的單語と彼等の意識の極小である。日本を表面的に觀察すると、其處に何かかうした植民地的共通點を見出すことが出來る。

これら植民地知識者は、各國の植民地の平均をとると、その人口の百分の四を占めてゐる。この數字は植民地就學兒童率であるから、實際の知識者として一定の社會的地位に上る者はその半分にも滿たぬ。西歐諸國はその距離と風土の點から、そして植民地民族の習俗と道德の點から、その植民地の會長或は封建領主並にその一統に屬する子弟を、最もその本國に都合よく敎育して、彼等智識者に、勞役監督や税徵收や强制勞働指導などを委託する。彼等のロンドンやジュネーヴで製作した單語や國定敎科書を守る忠勤ぶり洵に神の如くであつて、彼等知識者と一般植民地民族との軋轢絕ゆることな

く、その民族は常に自己内闘爭によつて消耗し、決してその本國西歐に向つて戰ひ得ない仕組になつてゐるのである。それにも拘らず、今や一般植民地並に半植民地民族の民族的自負と、その意識の强大は、次第に知識者の地位を危からしめんとしてゐる。

此の危殆に瀕しつつある植民地支配的知識者のうちから、自己の陣營を再構成せんとする者が現はれ初めた。それは歐洲大戰にかり出された兵士の結社と、マルキシズムの陣營と印度獨立運動とを契機として、擡頭し來つた。併し、重要なことは、それらの諸運動が英・佛領に對する獨・伊の攻勢によつて全く異つた段階に入つたといふことである。此處に、民族運動と結びついて反英運動に轉化しつつある現代の植民地問題が橫はつてゐるのである。

此の植民地問題は、歐洲大戰後しばし、イギリスの自己强化と安泰を齎したかとみる間に、極東の西歐に對する反擊の烽火がアジア大陸に上つてより、ナチス・ドイツの勃興に伴つて愈擴大されんとしてゐる。ナチス大藏省は植民地委員會を作つて、宣傳省のプログラム遂行の組織網を全英佛白和植民地に張り始めた。此の植民地委員會のナチス黨員による舊獨逸領再組織は、先づ上述した植民地民族の內部抗爭からはみ出した植民地知識者に、働きかけたのである。

彼等知識者のうちに、ネグロ・アフリカだけの例で云へば三つの系統がある。純ネグロ・アフリカ

に於ては、大酋長はその民族の一領地を統治し、中酋長といふのはその領地の一部落を治め、小酋長はその部落の一家族を主宰してゐるのであるが、ナチスの手入れの線は、概ねこの中酋長の系統である。彼等のうちには、オックスフォードやパリやベルリーンの大學を卒業してゐる者多く、ナチスは先づ商店やホテルの買收を行ふと同時に、植民地委員會作製の名簿に從つて、彼等民族の內部分裂を如何ともすべからざる中酋長系に屬する知識者をして、新聞經營並に辯護士クラブを組織せしめる。既にこれらの系統にドイツ歡迎の聲は滿ちた。これにひきかへ、大酋長系は稅務監督局長官と云つた椅子に腰かけ、これはパリでラヴァールに招かれた時の記念撮影だとか、あれはロンドンでイーデンの宴會席上で撮つたのだとか云つて、さも誇らしげに壁に懸けた寫眞を眺める。そして小酋長系の多くは自動車の運轉士や、植民地會社員や稅關吏になつて、せめて日本製ゴム靴なりと穿いて、椰子樹の影さす綠滴らんばかりの廣大無邊な白人ゴルフ・リンクを眺めつつ、轉た人生の悲哀を感ずる。彼等には何んの闘爭の意欲なく、唯月給を計算しながら、ゴム靴を穿かんことを欲する。

ところで、印度獨立運動は他面、ボア戰爭後におけるイギリスの自己壞滅の種子を如何に生育したであらうか。ボア人が貿易地區から、更には鑛山地帶から追はれて、南阿北部と葡領東南アフリカの農業地に定着するに至つた。併し、彼等は全く農業生產に無經驗であつた爲に、當時印度におけるイ

ギリスの徹底的迫害より、アフリカ東海岸に逃れ來る印度人を迎へ入れ、此處に印度貿易並に印度人による農業生産がボア人と合同の下に發展して行つた。このことは、印度人のアフリカに於ける土地所有となり、南阿の資本主義發展による、ネグロ並に印度人の奴隸的プロレタリアートと密接な民族的・政治的關聯を有つに至つた。地主印度人並に商店經營印度人はガンジー運動の政治結社の陣營となつて、南阿印度人奴隷の解放運動を成熟せしめた。當時、南阿ではイギリス系とダッチ系の對立最も激烈な時代であつて、遂に一九二六年春のガンジー指導下の南阿ゼネラル・ストライキとなつたことは既に第五章に於て述べたところである。

その後、此の系統はナチス擡頭による舊獨逸領地盤に於て成長しつつある。ナチス植民地委員會は共産主義運動と印度獨立運動との二陣營を再編成する事に成功した。嘗て、ソヴィエト政策は、ハンブルク・ネグロ大會や佛・ソ協定を通して、アフリカ植民地にまで擴げられたのであつたが、その事は却つて北阿に於けるファシズム回教徒線並に中部に於けるナチス植民地委員會線と南部の印度人結社との糾合統一の戰線を强化せしめた。

かくてアフリカでは、今日の歐洲危機は、歐洲大戰直前よりも遙に直接に廣汎に反映されるに至つた。併し、ネグロ知識者の大半を占める小會長系インテリゲンチャは、ジュネーヴ並にロンドン製植

民地教科書によつて、唯平和を希願し、自己の關稅吏としての、或は人頭稅徵發員としての忠誠を懇に誓ふ。彼等が、ネグロ諸民族の奴隸的搾取の永續を喜ぶ有樣は、恰も日本知識者が自己民族のエネルギイ防遏における、西歐植民地政策を批判することを欲せず、唯自己內分裂鬪爭を歡迎しつつ、平和即ち人類の八割を占むる植民地並に半植民地的民族の現狀永續、即ちロンドン、パリ、アムステルダムへの奉仕を喜ぶ心境と酷似してゐる。

かつて明治時代に、蘭領印度やマレー植民地の狹軌鐵道を日本に入れ、支配的知識者をして我國文運の發達を狂喜せしめた。此の日本の輸送力と速力との限定は、決して日本財源の貧困の爲ではなく西歐植民地政策の一貫した組織からなのであつた。また、その反對の例をもつてすれば、官廳や銀行會社や大學を壯大にすることは、一方に於ては日本經濟力を消失せしめ、他方に於ては日本國內に階級的對立を感覺的に激化せしめんとする、西歐の植民地化的知性の然らしむる處であつた。今日、支那にイデオロギイ再建に先んじて單に經濟的諸機關のみを創設せしむる所以も亦、西歐の近世的知性を踏襲し、自己消耗を敢て喜ぶ類に外ならぬ。教育における專門的狹隘化も亦然りである。この狹隘化こそ、世界史に對する日本的批判を不可能ならしめ、他方に於ては不生產的知性の過剩生產を導き得るがためである。日本知識者の無自覺的迎合性も此處に生育したのであつた。かくて、ソヴィエト

の植民地政策の手延ばさるるや、知識者擧つてそのプロパガンダに奉仕する。ファシズムやナチスが日本の對ソ・英のエネルギイを媒介として歐洲世界政治の危機線を構成するや、逆に日本知識者達はその危機威力の前に茫然とする。彼等を驅使することを知らず、唯その歐洲危機に戰き、不安と焦躁にやつれる日本小會長知識者。高級を食む大會長の無力と西歐崇拜の因襲。

斯の如き日本の支配的並に小市民的知識者が、專ら西歐崇拜に努力してゐる間に、アフリカの南端に於ては、ファシズム並にナチス勢力に對して、イギリスは、それまで對立關係にあつたダッチとイギリスとを統一して聯立内閣を組織し、印度人の土地所有禁止令の發布と共に、勞働力集結としての集團住宅の建設、强制勞働による軍事道路と鐵道延長に專念した。此の聯立内閣は、丁度日濠會商の當時であつて、羊毛の新顧客としての日本に對して「日本人は有色人種にあらず」の法令を可決した功績をなし遂げた。笑ふ勿れ、これは南阿羊毛組合の運動によるものであつて、そのお蔭を以つて、爾後日本人はホテル宿泊が可能になつたのである。最近羊毛の買方が減少したから再び「日本人は有色人種とす」といふ法律案が可決されても、何等驚くに値しない。

2　日本とイギリス

イギリス植民地政策の發達は、十九世紀中葉の自由貿易論の全盛期に決定的となつた。航海條例の撤廢後、小中アジアへの地盤をクリミア戰爭を通して確立し、東インド會社よりヴィクトリア女王・印度帝國への强奪的發展に呼應せしめた。此の印度帝國はスエズ運河並にエジプト獲得と金鑛トランスヴァール略奪とを必然化し、前世紀後半におけるイギリスの世界主義を現實化したのである。此處に、ヴィクトリア朝文學の燦然たる世界風靡と並んでグラッドストン政策は、世界政治文化の最高の範例となつて、日本の近世的帝國の指標をおいた。

併し、此の植民地帝國がその面積・人口共に地球の四分の一を超ゆる植民地を所有し、正に「世界の工場」として、自己の市場を全世界に普及せる我が明治時代には、イギリスは既に「世界の敵」として、現れ來つた。世紀末の勞働運動はニュー・ユニオニズムを展開し、炭坑夫ハーディの指導下に

「獨立勞働黨」を組織せしめてより、社會主義團體「フェビアン協會」と「勞働黨」の創設を經て、資本主義の相互競爭とその内的矛盾の深刻化に並行して、愈イギリスを「ストライキの國」と化したのである。機械工並に鑛山の大ストライキ以後、我が大正時代の初期にはロンドン交通勞働者ゼネ・スト、炭坑夫ゼネ・ストの全盛期を形成して行つた。此の明治末期より大正初期における日本の支配的知識者は、イギリスは勞働問題によつて亡國するであらうといふ西歐製言葉を鸚鵡返ししてゐたのである。豈計らんや、此の言葉こそ、既に擡頭しつつあつたアイルランド、南阿、印度、エジプトにおける民族運動に對する熾烈なる彈壓を糊塗し、西歐資本主義の地盤たる植民地問題より世界の關心を除去せんとするものであつた。

他方に於ては、西歐資本主義の相互競爭は遂に歐洲大戰への道を辿る。イギリスは日本の參戰を慫慂し、以つて日本勃興に伴ふ植民地並に市場喪失を避け、大戰後における自己の帝國主義的・金融資本主義的再構成を强力に實行することが出來た。然るに、このことは日本の「我が大英帝國論者」をして狂喜せしめるに餘りあつた。彼等は近世的世界の全般的恐慌の危機を切り抜けた沈着にして中庸なるイギリスをみて、もはや失心するばかりに絶讃する謙譲なる美德を失はなかつた。

みよ、イギリスの政治的・市場的衰亡は、日を逐うて甚しく、國内にあつては、その勞働條件の惡

化、物價の騰貴、階級對立の激化、未曾有の大ストライキ頻發に加へ、アイルランド獨立運動、エジプト並に印度國民運動、南阿における反英鬪爭を始めとする被壓迫民族の反英抗爭を通して、恰もローマ帝國末期にみた如き内憂外患の中にもがく。嘗て近世的世界を内外に構築して行つた發展期のイギリスにみる如き激越なる海賊的エネルギイは、此のイギリス帝國末期に於ては洵に妥協的にして中庸なる末世的政策をとらざるを得ない悲運に陷つたのである。

しかも、ヨーロッパに於ては歐洲第二次大戰の危機線が加速度的に構成され、アフリカ並に小アジアにおけるイギリスの國際的陣營を變形せんとする。カナダ、オーストラリア、南阿聯邦の獨立後におけるイギリスの眞の貯水池、アジアは既に近世的世界の政治的・文化的・經濟的價値轉換を遂行せんとしてゐる。今やアフリカにあつては、北部アフリカにおけるファシズム線と中部アフリカにおけるナチス線とは統一的に、アフリカ三大寶庫エジプト・スーダン、ナイゼリア、南阿のイギリス血管にむかつて、大なるメスを振り上げた。既に、獨墺合併による佛・ソ統一線は破れ、チエッコ・スロヴアキヤは逆にドイツに依つて包圍され、ポーランド驅使による黑海並にバルチック問題は實質的に解決された今日、ヒトラーはアフリカの問題をムソリーニに委せ、バルチックと印度洋にナチス遊擊隊を繰り出し、ソヴィエト、イギリスに對する攻擊陣を作る。中央アジア、印度に對する獨逸商品の

進出と遊擊隊の商店、ホテル、新聞社の買收並に辯護士クラブ、カメラ・クラブの設立、さては文化史研究者派遣の激增をみて周章せるイギリスは、ヨーロッパ危機を懸命に防止しつつ、自己の大動脈たる支那・印度線の切斷に對して、日本エネルギイの消失を企圖し、以つてよく日本親英陣營をして近世史形態を維持せしめんとする。

かくて、イギリスは日・ソ戰爭の危機をアジアに醸成し、ヨーロッパ危機を切り拔けんとする。このことはスターリンをして、ロシア・ヨーロッパ主義者たる人民戰線を否定せしめ、ソヴィエト・アジア確立の爲の、アジア主義を强化せしめるのである。以つてスターリンはアジア危機に對處して、日本に對するソヴィエト的民族主義のアジア地盤を掩護することに狂奔する。恰も、ツァー末期ロシアにおける日露戰爭直前に對するイギリスの極東政策を想起せしむるものがある。

今や、日本エネルギイは、上述せるヒトラーの反英東漸とムソリーニの小亞、中亞、印度への回教徒ファシズム線の延長やスペイン・南米線の擴張、アフリカ席捲などにおける反英南進とを、如何に編輯するかによつて、日本世界史の方向を左右せんとしてゐる。既にネグロ民族も、反英エネルギイとして、統一的に世界史の戰線上に澎湃として新に浮び上つてきた。なんの文化理念もなくして、世界史を一時壟斷した、慘虐無比なる老英國は、莫大な軍備擴張と同時に、フランスを誘つてアフリカ

並にアジアに對して體系的な攻勢をとり始めた。英佛蘭の二大陸植民地民族は、併しながら彼等の彈丸と苦役と鐵鎖を通して、肉體を以つて、イギリスの暴逆を知悉し、既に本能的に世界史の價値轉換を意欲してゐるのである。併し、植民地知識階級は相も變らず、日本に對する侮蔑を續けると共に、日本戰爭の前に怖れ戰いてゐる。彼等知識者の習つた教科書をみると次の如く書いてあるのである。

「日本人は勤勉で戰爭に強くして、侵略的模範である」。植民地知識階級の記憶力の優秀なること、我が日本知識者と好一對であつて、一度イギリス人から教はつた單語は金科玉條の如く覺えてゐる。ロンドン・タイムスは論說を掲げて次の如く警告を發した。——現代の日本人は、四十五歲以上をもつて親英陣營を構成し、それ以下をもつて反英戰線を擴大しつつある。併し、日本が自己の近世的形態を完成する途上に於て、如何にイギリスに負うたかを知れる日本成人は、此のアジア危機に際しても亦、決して過ちなからざるべし。——町人インテリゲンチャを作り上げ、日本の支配的知識者を見事に生産したイギリスは、流石に目が肥えてゐた。お客さん相手に慣らされた日本町人文化は白人を扱ふことといとも慇懃。これ日本謙讓の美德にして、強ち捨て難しといへども、毅然として世界を建設するにふさはしい道德とその體系的知識の訓練をもつべき時は既に成熟したのである。

眞に進歩を愛するなら、此の地球をささへる被搾取民族、あのアトラスの曲つた腰を眞直ぐ伸ばし

てやる位の愛情がなければならぬ。それが人類の發展を強ふる重力であり、それのみが進歩の推進力である。此の日本エネルギイを媒介として立ち上つたファシズムやナチスを、更に媒介として新世界創造をなさんとする日本は、その建設體系を要求すること洵に深いものがある。それを與ふることのみが知識に價するのであつて、知識者は常にそのエネルギイを編輯し、方向づけるものでなければならぬ。その哲學的實踐のみ、後代の傳說として、國民のうちに生くる程の歷史的體系となるのである。

このことは、嘗てイギリスやフランスが自己の近世世界史を理念づけ、建設するに當つて、常に爲し來つた處である。彼等によつて否定せられたる植民地並に半植民地諸民族に、新なる歷史を賦與すべき東洋ルネッサンスをして、眞に世界の再建を可能ならしむる哲學體系が生れ來らねばならぬ。近世的泥沼の中に、西歐知性を守護しつつ溺死しゆく日本の植民地的な支配的知識階級に、名譽ある碑文を捧げ、日本世界史への門を開かんとする者、如何に大なる夢を描くとも、決して大きすぎることはない。

第三部　日本の世界史的把握

一　日本世界戰爭

1　歷史・地理・哲學

人類の解放と建設のために、今その主體性の體系がうち樹てられねばならぬ。世界史における最も歷史的なエポックが强明な一線をもつて描かれんとしてゐる。萎縮せる近世的人間を呑溺せしむるに足る躍動的な世界關係の根柢が、まさに新なる表現を意慾し始めた。人類の言葉を、全く異つた歷史創造のうちに集注せしめよ。

イギリスに、エッチ・ヂ・ウェルスありて、東洋の生命を豫言しつつ地球文化の暦を作る。ドイツに、シュペングラー出でて西洋の沒落の運命を語りつつ死の床に就けり。フランスに、ソヴィエトを打ち仰ぎ、或は東洋の王道の歴史を遍歴するものあり。老いたるジイドの如き、また、若きマルロウの如し。マルロウはジイドの如き人間探求の老衰せる最後の叫びを聞き棄てて、新に歴史の事物を追求する。かくて、あらゆる死の堆積を通して、歴史の新生を希ふ。ナチス追放の詩人に、歐洲近世史の鬪爭を畫くものあり、ハインリヒ・マンの如き。或は人類の世界放浪の宿命を語るものあり、トーマス・マンの如き。ソヴィエトに、ショロホーフ現れて、ヴォルガの流れに戰ひつつ現代に桿ささんとする。併し、すべてウクライナの野を思ひ、ノルマンディの海を眺むるに過ぎず。すべて、チュートンの魂を勞はり、或はエルサレムの夢を趁ふを出でず。

嘗て、クシストロスの船、よくカルディアの野にウルの大宮殿とバベルの塔を築きしといへども、神々を恐れず。ニヌスとセミラミス、よくアッシリアにニヴェとバビロンを築きしといへども、ただ暴王の歴史に過ぎず。嘗て、ノアの方舟はイスラエルの子達に、約束の地を索めて世界を遍歴せしめ、エジプト三十一王朝も徒にその墳墓のみ高く、宏壯な眠りを續けしのみ。彼等の神々、いづこにありや。そはエチオピアに、アッシリアに、ペルシアに、ギリシアに、ローマに支配され、アラビア

とトルコの防砦となり、遂に近世に至つてはイギリス進軍の兵糧と化せり。

フランスにシャンポリヨンありてロゼッタ碑文を解讀し、イギリスにローリンソンありてカルディアの文字を讀めり。またリイス・デヴィドの佛典の英譯成り、ア・シュレーゲルの獨譯なりてヨーロッパ文化史に一時期を劃せり。併し、エジプト、オリエント、印度の民いづこにありや。

バールとイシュタールに日と夜を、太陽と月を象徴せしめしフェネキアの大なる世界統治も、ソロモンの榮華より儚し。西にギリシアを、東にペルシアをして後繼せしめたる、其の偉大なる民は蹂躙せられたり。或はオルマズドの勝利を信ぜしペルシア人は唯アヴェスタ聖典を殘して、ロンドンに、パリに、ベルリーンに數名の註釋家の生計を保證する。ギリシアの美は飾られ、その民は殺さる。洵に然り。すべて過ぎしものは誤れり。パンテオンの上を踏みて、アフリカ、アジアへの搾取の馬蹄を聞きし歷史の耳は、またアフリカに、アメリカに、アジアに、幾億の奴隷の叫喚を聞けり。コンゴーに、アマゾンに、インダスに、揚子江に數へ得ざる夥しい溺死體流るといへども、未だ歷史の鼓動、眞に歡びをもつて脈搏つべき主體的心臟なし。

揚子江に魯迅現れて左し右せしかと思へば、矛盾起ちて「子夜」を畫く。されど支那に、アトラスの腰を直立せしむべき世界政策の首途の日待つべく甚しく難し。蓋し、支那自らその半植民地的運命

より解放さるるエネルギイとイデーなくして、何をか成し得んや。

ファシズムにゼンチーレの旗掲げられしも、嘗アリオストを憶ひ、ヴィコを訪ね、ヘーゲルに教はりて國民運動の提燈かすかに搖めき、ローマ帝國復活の洪業を夢想するのみ。ドイツにベルトラム、傳説を唱ふもニイチェに斷片を加ふるのみにして、新世界地理建設の體系的意圖に至つては洵に憐むべし。ナチス神話を創れるローゼンベルクもラングスドルフもヨーロッパの相互闘爭の裡に、ゲルマン的歐洲文化再建を念ず。されど、彼等は歐洲文化の凋落的悲劇を知らざる痴れものに他ならぬ。

いづこをみるも寥々として荒野の如し。ただ左右兩翼の徒食者その數多くして面接に遑なく、數へ上ぐるもあはれなり。嘗てロマンチケルは歷史を物語る幸福を感ぜり。併し、彼等は歷史を創る幸福を放棄して、バルザックをして次の如く語らしめた。「歷史は在りしがままであり、また然かあらねばならぬ。然るに、マダム・ネッケルなる前世紀の最も卓越したる一才質の言葉を藉れば、小説はよりよき世界であることを要す。とはいへ、若しその莊嚴なる虛僞の中に細部が眞實でなかつたなら、小說もその價を失ふならん」。

大なる夢想家達よ。細部が虛僞であつても、莊嚴なる眞實を描け。今や人類の眞實なる歷史と地理を形成すべき建設的體系への幸福なる闘爭の步武が踏み出された。その意圖する處、一國ファシズム

にあらず、一國革命にあらず。

思へば、滿洲に、エチオピアに、メキシコにスペインに、或は支那に墺國に小アジアに、世界戰爭の烽火上れり。世界を壟斷せるイギリスはスターリンをして、スキタイの高野に、トルキスタンの荒に、ゴビの沙漠に、シベリアのツンドラに、ウクライナの沃野に百萬の大軍を動かしむ。新世界建設を企圖する諸エネルギイの相互鬪爭による消耗を來さしめんが爲なり。

イギリス近世世界の作れる諸民族虐殺の歷史に對して、毅然として立つもの、松花江より黃河に、天山南北路よりアラビアに、印度よりオセアニアに、聖戰の劍を右にひつさげ、人類新生の文化體系を左にもちて戰ふもの、今聲を凝らして大なる筆をとれ。

戰爭は舊文化の否定であり、新文化建設でなければならぬ。古代、中世、近世、これらにとつて代はらるべき全く新なる世界變革が、二十世紀中葉に大分水嶺を築かんとしてゐる。近世の寄生虫よ。アジアの一半島ヨーロッパに揑造されたる人類搾取の狡猾なる人間と共の人道の概念を誇らしげに反芻せる貪婪の胃袋をこそ啄め!! かつてヨーロッパ中世の僧侶的農奴制の母胎の崩壞に對する批判、新社會形態の要求より戰ひとられた近世人間概念をして、猶も今日、近世批判を通して全く新な世界史を創めねばならぬ此の時代に、更に喜劇を演ぜしむる勿れ。

變革期の如何なる時代にあつても、批判と建設の使命を帶びた哲學は、その現代の現象的な概念を打ち倒せしに非ずや。來るべき世界創造も亦、今日の現代を超越せる理念とその體系をもつて始められねばならぬ。

十九世紀前半をもつて、哲學の現實的な歷史體系はその最後の息を呼吸した。此の死せるヨーロッパ近世文明の獅子に對する埋葬の儀式が、マルキシズムに依つて執行され始めて以降、哲學はその行列の中に沒落的な運命の悲歌を唱へながら參列するか、然らずんば日常的な狹隘な個人の歎きをかこち、或は辛うじて人間再生活の準備にいそしむ。世紀末に至つて、ニイチェが此の陰慘にして矮小なる哲學に向つて、狂熱的な批判を下せしのみ。それからのヨーロッパの野に曝された夥しい死骸を越えて、新世界創造の歷史・地理を建設せんとする哲學的意圖絶えてなし。

そもそも哲學に於ける最も基本的な範疇、時間と空間は今日、その現實的體系をもつことなく、徒に學校的範疇解釋の裡に窒息せり。偶々この普佛戰爭より一世紀間、ヨーロッパ資本の世界地理掠奪戰爭の最後の火花のうちに、人類强奪の世界地圖が塗り潰され、哲學は御用學的諸專門科學に時間と空間を放任して怪しまず。時折、歷史觀の諸問題をひつさげて登場せし者ありと雖も、近世產業革命後ヨーロッパ資本主義諸國家の尨大なる世界市場獲得の競爭裡に、近世初期の半封建的世界觀を打破

り新興市民社會の諸機能に應ぜんとするか、或はその後の暴戻なる發展に對する解釋學的批判に止る。世界の歴史・地理創造を夢みる者は迫害され啄まれ、再びかぼそりたる近世人間の諸概念を弄ぶ。蒼白の哲學、今こそ自己の生ける血を欲せざるか。

2 近世の東洋と西洋

飜るに、アラビアとトルコが地中海貿易の發展を招致し、クリスト教諸國の逆襲をうけてより近世史の誕生をみる。即ち十字軍による近世都市の繁榮。それに續く近世國家への展開の黎明と共に昇り始めた近世的ルネッサンスの太陽が、ヨーロッパの山々を輝かせし十五世紀末、オリエントと北方アフリカに築かれし、强靱なる古代的長城の瓦解の響音いたまし。かくて、コロンブスのアメリカ大陸發見、ポルトガルのジョン二世時代、バルトロメオ・ディアズのアフリカ南端發見、カブラルのブラジル發見、ヴァスコ・ダ・ガマのインド新通路開拓など、近世的ヨーロッパは自己の新地圖を世界の

到る處に色彩づける。

十七世紀初頭イスパニア人トレスによるオーストラリア發見、オランダ、フランス、イギリスの印度並に東洋進擊。商業資本がポルトガル、スペインよりオランダ、フランス、イギリスへ移行しつつ十七世紀中葉におけるオランダ東印度會社によるケープ・タウン占領を通して、ヨーロッパ極東間の中間根據地の確保に至る。その後、ポルトガル東方貿易の獨占的位置にとつて代つたオランダより、世界强奪の潮はイギリス海峽にどよめき合流す。

此の如き二世紀間を經て、十字軍の戰利品、オリエントの自然科學の堆積・發展は、生產機關の發明・改革の時代を導き、十八世紀世界貿易並に植民地政策に對應せる諸文化地理歷史科學の强盜的堆積と並んで、遂に近世初期社會のイデオロギイに對して、新產業資本主義社會の形態構成への市民的歷史觀の擡頭を誘發せり。

此の頃、ドイツはオランダ、フランス、イギリスについで、此の新段階追迫の拍車をかけ始める。此の頂點を、フランス革命とナポレオン戰爭にみると共に、又それに刺戟せられたるプロシア主義とイタリア國民運動に見る。ドイツ古典主義運動にあつてはヘルデルが、浪漫主義運動にあつてはフリードリッヒ・シュレーゲルが、かくて十九世紀中葉、主權なきイタリアの諸都市をマッチニ、ガリバ

ルディの英雄的精神が歩む。

是等に先んじて先進資本主義國家イギリスは、アダム・スミス、ヒュームによつて、既に新世界觀を中樞としてモーラル體系を構成し、フランスはヴォルテール、モンテスキューに依つて革命への豫備段階を表徴する。ヨーロッパ近世史が最大の前進を遂げんとする直前に現はれた是等の歴史觀は、今日の如き解釋と理解の爲にあらず、寧ろ正に現實的な歴史體系構築の推進力であつた。此のエナージイこそ、アメリカ、アフリカ、太洋洲、そしてオリエント、東洋に對する掠奪的地理觀を離れて存立せしものにあらず。イギリス、オーストリア、プロシア、ロシアの四國同盟の干渉の鉾、エジプトに向けられつつある頃、ゲーテはスエズ運河開鑿の風聲を耳にして、老いの眼に、文化發展を夢みて隨喜の涙を流せり。焉ぞ知らん、數十年を出でずして、英佛の經濟的搾取の貯水池と化したるにあらずや。

ロシアは、十六世紀におけるイギリス政策がポルトガル、スペインに抗して躍進しつつあつた時、極東政策の第一歩を踏み出した。十六世紀末のクヅネックへの進出、十七世紀のバイカルへの前進がネルチンスク條約に依つて外興安嶺以北の地に及べば、西方にイギリスはポルトガル、スペイン、そして獨立後のオランダの海外政策の線を巨速をもつて乘り越える。アメリカにおけるニュー・イング

・ランド聯合植民地同盟をも顧みず、イギリス本國の重壓的攻進。ポルトガル、フランス兩國に對する激爭を經て、イギリス東印度會社設立、延いて支那、舟山列島、ヴォルネオ、スマトラへの植民地獲得への發展。リヴァプール、マンチェスターの齒車の激轉はパリの耳を擘けり。十八世紀、インドにイギリス、フランスの砲聲殷殷として止まず、ドイツの進軍ラッパ漸く響き渡る十九世紀、近世ヨーロッパの世界搾取の急ピッチが激烈な沫きを飛ばし始める。其の直前、十八世紀におけるロシアの極東政策が停頓し、バルカン並に近東に其の進出の中心を移動せしめられたる、洵にヨーロッパ諸資本主義國家の斯の如き東洋略奪戰線の尖鋭化を物語るに他ならず。

ロシアは北方より極東進出を計ると同時に、ピーター大帝の頃よりコーカサス侵入を敢行し、十八世紀末ペルシア軍を擊破、次いでトルコ勢力を驅逐し、イギリス、フランスのインド、極東への戰線に對抗す。ドイツまた南進政策を樹立し、玆にヨーロッパ世界史はバルカン及び近東に、その制覇の鉤を祕めたり。

オリエント!!

かつて、メソポタミアとエジプトに兩脚を据ゑて、世界文化の峰高く聳えしオリエントは、自己の繼承者をカルディアの野に、ナイルの河に、多島海に索めつつ閱歷すること數十世紀。ラテン・ゲル

マン的中世に抗しては、サラセン、蒙古、トルコをしてオリエントの古代的世界文化をよく擔はしめしこと數世紀。遂に十五世紀中葉、コンスタンチノープルを占領して、東ローマ帝國を完全に滅亡へ導いて以後、地中海を中心とするバルカン、シリア、エジプト、ペルシアに跨がる一大帝國を建設、ヨーロッパ近世的諸國の南進並に東漸をはばみしオスマン・トルコは、十六世紀後半にレパントの戰に敗れ、古代的オリエントはヨーロッパ諸國の盛衰と共に動搖するの止むなきに至れり。

かくて、十八世紀に至つて、トルコ領土はヨーロッパ列强の爭奪の的と化し、ギリシア獨立、エジプトの反抗、クリミア戰爭、露土戰爭を通じて、範圖喪失に次ぐに國内はサルタンの威令行はれず、續いて第一、第二バルカン戰爭へ衰運を辿る。この時より、此の近東の城塞はヨーロッパ資本主義諸國の極東並にアフリカ進擊の重要な城壁と逆轉する。

古代にあつては世界を所有し、中世にあつては東方諸民族の西方進擊の强大を誇りし、アジアの動脈、近東の古代的範圖と文化は、近世に至つては全くその逆流の抗し難き洪水と共に、西方半島の所有と歸せり。

此の最中に、アレキサンダー・フンボルトは世界の島々を巡りて、古代的民族をも新大陸をもヨーロッパの近世的地圖のうちに塗り直せば、イギリスにバイロン出で、ギリシア文化奪取を希ひてメン

ロンジォンの土となる。此等ヨーロッパの魂は、總て、ギリシアにありてはチュルトイスの如く、ローマにありてはヴィルギリウスの如くいとも逞し。彼等詩人の後を追うて、ヨーロッパ實證科學は自己の植民地として、また市場として、アフリカ並に東洋諸國の歷史的地理的エンサイクロペディア作成に着手せり。

併し、此處に歷史觀並に地理觀を新に提出せんとするは、以上の如き過去二世紀間におけるヨーロッパ本島の史觀並に地觀を繰り返し、或は發展せしめんが爲にあらず、却つて現代の地球的人類史の方向と理念を、十億のアジアの民に聞き糾さんが爲なり。東洋と西洋とのコペルニクス的回轉の世界地理辯證法の體系的政策のうちに、二億の半島的白人種鏖殺さるとも歎くべからず。

ヨーロッパ近世市民階級が、自己の社會形態を建設せんとするに當り、彼等は中世封建制に對して如何なるイデオロギイ戰陣を張りしや。恰も、ヨーロッパ封建社會が、東方諸民族の統一宗教として古代ローマ帝國に對抗して立ち上れる原始クリスト教を、自己の陣營下に屬せしむることに依つて、ギリシア並に東方の古代イデオロギイを後退せしめし如く、近世市民社會は中世社會の統一的イデオロギイとして改變せしめられたる中世クリスト教に對して、古代ギリシア並に東方の統一形體たるアラビアの發展者、サラセン文化を武器とすることに依つて、自己の體系的指針を獲得せり。文藝復興

宗教改革、啓蒙の三世紀間に渡るヨーロッパ戰爭を省みよ。

其處に二重の武器あり。一は神の獨占に對する人間概念、他は神學に對する自然科學にして、此のヨーロッパ近世史における最重大の自然科學こそ、サラセン文化の生命にあらざりしや。變革期にあつては、常に斯の如く壞滅すべき文化に反對物であるイデオロギイを獲へ來るといふこと、このことを現實の世界史の過程は物語つてゐるのである。

近世が中世に於て異端視されたるサラセン文化を取り來れる如く、現代の課題は近世に於て虐殺せしめられたる東洋文化に新光を投げ與へ、それを新な武器に磨き上げ、かくて近世ヨーロッパ批判を企つるのみならず、その東洋の世界史獲得の武器こそ、また實に西洋の諸科學文化を全く異つた歷史的目的の下に變容せしめねばならぬ。

蓋し、近世ヨーロッパにおける歷史地理の諸概念は、オリエントを越えて東洋の搾取虐殺の上に成立せる社會機構の發展より醸成されたのである。ヨーロッパ中世に對立せる東洋の砦、近東は、近世クリスト教國の市民社會の勃興と共に凋落の運命を辿らしめられ、かくてサラセン文化は新興ヨーロッパ形態の中に攝取さる。しかるに今、歷史は諸民族搾取以外に何物をも寄與せざるヨーロッパ人間を撲滅せしむることに依つて、その文化を高度の地球的統一國家の中に生かし直さんことを欲す。ア

ジア西方半島に猶も歐洲近世文化復興のカナの奇蹟を信ぜんとするヴァレリイよ。世界人類の聲を聞かずして、奇蹟を祈願するを止め!!

3　日本の課題

オリエント並に東洋の文化は、今日科學的研究の名の下に陳列され、現實的にはヨーロッパの貪慾なる侵略勢力を誇らかに物語るに過ぎず。その根柢より掠奪せられたるアジア諸民族の統一とその偉大なる文化再建を通して、新世界文化を創造せんとする者、それら文化諸形態を體系的に構成し、歴史と地理の統一的主體を組織せざるべからず。

西洋史、近東史、東洋史、日本史といふが如き分散的な陳列的歴史學を去つて、史觀と地觀の統一を世界史的實踐のうちに具現すべき世界戰爭は既に始つた。偏狹なる日本主義をかなぐり棄て、世界の諸文化形態を克服するに足る日本世界主義を樹立し、眞に地球的人類の方向を指示せねばならぬ。

既に近世的世界市場を通じて諸文化交流期を經、而もその近世の沒落的末期に立つて、今や東洋と西洋とを併有せる日本は、それらを現實的に統一せる新世界體系を意慾し始めたのである。

いま、アジア的アレキサンダーの大軍、黃河を渡り揚子江を遡り、正に印度に至らんとする。玆に近世史の最後の震撼、世界にどよめきて至る處にヨーロッパ植民地民族の獨立戰爭の聖圖をみん。シリア沙漠の地下、アングロ・イラン石油鐵管破壞されて億噸の油地中海に浮び、諸民族の聖軍、アフリカよりアマゾンに到るべし。歐洲の「金道」宙に舞ひて東洋資本主義形態また瓦解せん。擧りて、支那より印度に、オリエントよりアフリカに入りて、被搾取民族に明日の太陽を仰がしめよ。此の神聖世界戰爭を逃避して明日の黎明を思念する勿れ。

戰爭はすべての父なりとヘラクライトスは叫んだ。今や大なる變革が世界史の全面を搖り動かし、嘗ての西歐近世的世界は極東のアジア的世界復興によつて正當なる位置付けを受けんとしてゐる。蓋し、歐洲大戰によつて歐洲の相互矛盾はその頂點に達せりとはいへ、猶新なる世界史建設の方向を堅持して登場せる國家はなかつた。辛うじて世紀末歐洲の一批判者たるマルキシズムの實現者として、ソヴィエト・ロシアの出現をみたれども、併し其の思想戰の體系の基礎たるや、近世ヨーロッパの經濟的批判より生れたる一原理に過ぎず、全體世界の民族構造とその文化建設に對しては盲目であつた。

此の世界の大半を占め、眞に世界の地盤であり、世界文化の擔手たる東洋は、西歐にとつてと同樣ソヴィエト・ロシアにとつても亦暗黑であるのみならず、實は暗黑であるかに永久に蔽ひ隱されんことこそ望ましいのである。しかも日本の儼然たる存在がなかりせば、東洋は近世に於ては全く西歐植民地であり、二十世紀に於てはソヴィエトの奴隷となり、西歐とソヴィエトとの東洋爭奪戰によつて荒廢の運命につき落されしならん。

日本が滿洲事變以降、東洋史並にその文化の擁護者より建設者への世界史的步武を踏み出せしは、正に斯の如き東洋の運命に關せしが爲である。此の日本アジア・エネルギイに據つて生ぜる西歐近世世界關係の龜裂に乘じて、ファシズムとナチスとはイギリス並にソ聯に對して、ヨーロッパ再建の代辯者たる役割を急速に演じ始めた。併し、我が國の西歐植民地政策に馴致されたる知識者は、自己の光輝ある世界史的使命を自覺し得ず、徒に右顧左眄するのみであつた。この故に、日本は自己の文化的位置と世界史的使命とに對する自覺の蓄積過程を經るの餘儀なきに至つたが、今や漸く支那事變によつて東洋の眞の敵が何處にあり、世界の眞の建設者が何處にあるやを知悉せり。

今やイギリス的近世に對する日本世界建設の必然性のうちにあつて、イタリアがイギリスを敵にもつことによつて、自己のファシズム建設を强化せる以上に、日本は自己の新世界史創造の體系的陣營

を全面的に樹立せねばならぬ。

顧みるに、近世はイギリスをして諸民族の文化理念の否定と生命の搾取を遂行せしめ、以つてイギリスの普遍化を實現せしめた。その重壓を荷負うたアトラスとして、東洋民族は正に腰を曲げつつ、その直立を要求すると雖も、世界史的變革の方向と勢力とをもたずして、如何なることをか成し得んや。日本は、東洋のみならず全世界の文化繼承・發展者として、東洋民族の苦惱の聲に耳を藉しつつ眞の世界建設の方向を明握し、今日迄の誤れる世界史に對して、諸被壓迫民族を生かすべき世界正史を斷じて爾後の地球に賦與し、固成せんとする聖戰の矛をとる。

この戰爭こそ、かつての歴史に於ける戰爭概念を一變せしめた。被壓迫民族の解放と再建としての新文化創造戰爭は、今や八紘一宇の高邁なる理念と世界文化の蓄積を以つて、沒落の西洋と苦惱の東洋とを救出せんとす。この日本世界文化の普遍化こそ新世界戰爭であり、新世界創造である。此の日本世界建設の體系樹立を、日本アカデミアの確立をもつて遂行せしめよ。

今や、日本文化の世界統一的力は世界史を動かし、方向づけ體系づける唯一の光に他ならぬ。この故にこそ、西歐とソヴィエトは日本文化を逸早く否定し破壞するを以つて唯一の政策とし、多年我が國の支配的知識者並に制度・文物を西歐的に養成せんことに力を傾到した。日本のアジア文化復興を

可能ならしむる日本エネルギイに對して、如何に迫害と去勢の政策がとられ來りしかは、既に一語の說明だに要せざるところ。此の日本世界戰爭の最中にあつてすら、猶もイギリスは日本の經濟的消耗を通して、日本聖使の印度に至らざらんことを希願しつつ、皇軍のソヴィエト進入への道を用意しつつあり。日本の世界史的使命の危機、此の秋より大なるはなし。

アジアにおける眞の敵と自己の世界史的使命とを自覺せしめねばならぬ此の大變換期に於て、聖戰の眞の文化陣營を敷くことこそ日本戰爭の根本である。敵をして味方と化し、戰はずして勝つ我が兵法は、皇軍の兩翼として世界を飛翔せねばならぬ。我が國の文武統一の傳統は、今やその世界史的實踐の步を踏み出すべきである。然るにその方向と組織に至つては危惧せざるを得ず。

支那に於ても、印度、オリエントに於ても、アフリカに於ても、すべてアトラス的民族はイギリスの近世的壟斷に對する世界戰爭の主體を要求せしこと、誠に久し。今や日本の課題は、イギリス近世史に對する日本新世界史建設の體系樹立のみ。

西洋と東洋との辯證法的把握。かくて、アトラスを直立せしむべき世界戰爭を通じて、將來を戰ひとり、地球的人類の歡びある交響樂をして天を蔽はしめよ。

二　日本世界學

1　趣味哲學時代

二十世紀哲學は、一九一九年、ヴェルサイユ條約を轉機として二個の流行型に分れた。ヨーロッパが自己の近世的形態の普遍化を正に完成せる二十世紀こそ、十九世紀の自己合理化の任務遂行を畢へて、哲學は徒に何事をも語らざるに等しい「基礎附け」の言葉を羅列する。

かくて、十九世紀における近世ヨーロッパの世界所有形態の自己合理化は、其處に專門的文化形態

として産み落された諸領域を基礎附けんとする、自己合理化の哲學的遊戯を產む。恰も仕事を終へて疲れた頭が安眠を求めながら寢言をいふやうに、「晝間の歷史」のなかに作り出された近世人間の心理や觀念、道德や法律、藝術や社會に關して、何か決定的な價値があるかにつぶやく。それは洵に「夜の辯解」であつた。

イギリス人はアダム・スミスやベンサム、ミルの後を承け、スペンサーが一と度ダーヰニズムによる諸科學統一の體系を「綜合哲學」のうちに收めてより、最早や爲すべきこともなく、グリーンやブラッドレイは共處から「觀念」や「倫理」を我が家へ連れかへり、ヘーゲル亞流を繰り返す。何人の妨害になるわけではない。上品な趣味である。

フランス人は大革命の躍進的困亂を通して、一方ではその發展的方向を合理化せんとするサン・シモンやコント、レイノオやテーヌやルナンの、ブルジョア自由主義の兩翼たる實證主義と自然主義の體系的企圖、他方ではメーン・ド・ビランやマリイ・ド・メーストルの反革命的な心理的形而上學とカトリィク哲學を華々しく展開する。併しその後、ルヌヴィエがカントとコントとの統一を企ててより、リボーやブートルウは、何か解釋せんものかなと、病理心理を內觀したり、遇然を思索したりする。

イギリス人やフランス人が、植民地から運ばれた豐かな食卓を圍んでゐるのを垣間見ながら、近世ヨーロッパの戰場と化した北歐の荒蕪の地をみつめてゐたドイツは、やつと近世的國家統一の段階に至らんとするや、その忍從的空腹は全世界を貪り始めた。此のフィヒテ、シェリング、シュライエルマッヘル、ヘーゲルのドイツ觀念論大綜合より、漸く一方に於てはショーペンハウエル、ニイチェを、他方に於てはフォイエルバッハ、マルクスを經て、その大綜合の中に夫々の領域を生長せしめた諸文化形態の價値理想化の哲學が現れる。

かくて、二十世紀ドイツ人は斯の如き新カント派の理想主義的價値哲學と共に、嘗てのゲーテ、シュライエルマッヘルより生長せる精神科學を基礎付けんとする「生の哲學」によつて、自己の個人的教養にいそしむ。このことは言ふまでもなく、歷史的には近世ドイツの作り上げた文化體系の自己合理化を、その基礎としての普遍的價値或は類型の定立によつて、試みんとしたものである。併し、この努力は嘗てのドイツを方向づけんが爲めの合理化體系たるドイツ觀念論より轉じて、其處に作られたる諸文化形態に對する論理的愛翫となり、いとも嚴肅な顏を粧うた哲學的遊戲の各種目を作製する功績に與つたのである。

イタリア人もオーストリア人も、斯の如き英佛獨の影響の下に、各々自己の趣味に應じて、誠に自

由に哲學的遊戲の如何なる種目をも選擇することが出來た。アルディゴやカッタネオやフェラリ等は新カント派から、自己の遊戲の道具——論理——を選び出し、ボルツァーノやブレンターノやマイノンクは、その遊戲の慣習的單純化を避ける爲に「對象論」を提起した。

併し、日本に於ては、西歐の流行が常に數ケ年遲れて輸入されるので、かかる哲學流行型も亦その例外ではなかつた。ヨーロッパ諸資本主義國家が、その世界所有の主體性爭奪戰のうちに、正に瓦壞に瀕せんとした大正の御世、ヨーロッパ二十世紀哲學は、恰もマーク、フラン、リラ、パウンドの安値に應じて、自己の廉賣市場を日本に求めたのであつた。

日本教養人の感激、これに過ぐるものはなかつた。ヨーロッパ瓦解による日本の偶然的好景氣は學校を濫造せしめ、昨日まで肥桶を擔いだり、算盤をいぢくつてゐた人間が急激に教養的遊戲場に出て來て、何かモダーンに成つた歡びを感ずる。ドイツ語やフランス語の書物を觸つて、學者風な緊張の稽古に餘念がない。このことは排斥すべきことではなかつた。一には日本人の「弱きに加擔する」歴史的本能が、沒落しゆくヨーロッパ二十世紀哲學を愛惜するといふ意味に於て、二には日本人の「世界文化の遺產を嗜む」歴史的儀禮に於て、正しくさへあつた。

また、日本人の猫も杓子も、それが肉體的モダーン・スポーツであらうが精神的モダーン・スポー

ツであらうが、その善惡を問はず身心敎養の具となす「進取の氣象」も面白いではないか。人々は西ヨーロッパから受けとつた人間自由の名の下に、如何なるスポーツをも選んだ。彼はそれで自己の生活を營むことも社會的名譽を得ることも出來たのである。

2 欺瞞哲學時代

斯の如き恩惠に滿ちた豐富な日本も、併し軈て資本主義世界のパニックに亞ぐパニックに周章しながら、何處からかよき牡丹餠もがなと、自己の方向を近世植民地聯合國家アメリカに、或は過渡的共產主義社會聯合ロシアに、或は復興西ヨーロッパ近世國家に眺めんとする。

併し、ヨーロッパはヴェルサイユ條約を通して、イギリス植民地帝國の世界所有維持に對する資本主義形態を再構成し、その强化陣營網を世界の至る處に張りめぐらさんとするのである。かくて、趣味哲學時代は去つて、一方では社會政治並に世界政治の新理論構成が要求され、グリーンやブラッド

レイに對してバートランド・ラッセルの新現實主義は數學的論理をもつて新世界觀をうち樹てんとする。此處にホワイトヘッド、アレキサンダー、エディントン等の一群は現代物理學との密切な關係の下に、新科學的世界觀を用意する。これらはイギリス世界主義に新なる方向をもたしめんとするものである。

併し、他方では自己の資本主義的世界主義の孕む諸矛盾は、社會主義の激化と共に自己の傳統的社會經濟思想の分化を收拾し得ざる錯亂のうちに、如上の新科學的理論構成はイギリス帝國をして無政府主義社會への沒落的方向を歩ましむべき自己矛盾に陷つた。かくて、イギリス國民主義强化の現段階に入る。

フランスは國際聯盟によるヨーロッパ政治・思想の中核として、近世史再構成と維持に一縷の光明に照されんとした。恰もベルグソン哲學に象徴されてゐるかの如く、大戰によつて正に死滅せんとした自己の築き上げた近世的人間の諸文化が、再び生き延びつつ、永遠に自己を創造し持續するものの如く、愁眉を開いたのであつた。此處に、他方ではフランスの國寶、文明史家セニョーボは「ヨーロッパ史」と「純正フランス史」を以つて、近世フランス文化の世界文化主義を方向づけんとする。

併し、此のひと時返り咲かんとした近世フランス精神は、自己を超出し若しくは否定せんとする世界史的必然性に對して、「人間思惟の責任と限界」を決定すべき自己擁護のブロンデル哲學へ移行する。或はアベル・レイは遙か「ギリシア以前の東方科學」に科學文化の淵源を尋ね、西洋と東洋との文化統一への暗示を與へつつ、東洋勃興に對する妥協の手をさし伸べる。彼は曾てのヨーロッパ獨善主義者ロバンの「ギリシア思想」に對して、「ギリシア科學の少壯期」を以つて、恰もニイチェが世紀末ヨーロッパ文明に對して戰つた如き批判的精神に生きんとする。

併し、アベル・レイの批判的精神は、實はニイチェとは全く異り、公正なる科學主義の表現であつて近世ヨーロッパ思想の公明なる科學性を實證せんとするものである。それは最も賢明なる「東洋文化への妥協」であり、最も用心深き「自己擁護」である。彼と共に、ブランシュヴィックやドゥラクロア等ヨーロッパ知性主義の哲學は、佛蘇協定線上に躍る人民戰線哲學の代辯者たるワロン心理學と並んで、正にイギリスの經濟的世界獨裁に代ふるに、フランスの文化的世界獨裁を完成せんことを欲する。

ところが、此の昭和の時代に、嘗て明治時代における普佛戰爭以降、ドイツの隆々たる資本主義的國家勃興に眩惑された日本インテリゲンチャ習性は、斯の如きフランスの多角的な自己文化の擁護陣營に眼をくれず、一途に窒息狀態に陷りつつあつたドイツ哲學と唯物論的解釋學を喜び迎へてゐたの

である。

ドイツでは趣味哲學の整理的體系化がフッサール現象學によつて企てられてから、困憊と混沌の中に、不安と死の哲學を求める。此の死滅しゆく近世人間のせめてもの自己慰安は、人間と知識との根本的規定を解釋することによつて、或は「文化の極限狀態」における止むなき斷念と放棄を解釋することによつて、自己粉飾を試みるの外道はなかつたのである。

かくて、シェーラーの「哲學的人間學」はかかる人間狀況のカトリィク的統一を希求するものであつたし、ハルトマンは認識形而上學に逃れんとする。ヤスパースやハイデッガーは此の不安と限界、死と無のなかに、なにか基本的な存在とその知性を求めるかに粧ひつつ、權力の前に戰慄し慴伏すべき欺瞞の哲學的技術を練磨する。

この「不安の哲學」に對して、嘗てデンマークの悲運に際して執つた悲壯なるキェルケゴールの「護るか放棄するか」の哲學は、辯證法神學の中に再生し、バルトやツールナイゼンの超人間的主張となる。これらはドイツを放棄して、新なる世界創造の「天光」を祈り、シュペングラーは「西ヨーロッパの沒落」を畫くのであつた。

イタリアは疲弊のどん底に喘ぎながら、ラブリオーラを代辯者とするマルキシズムと、ボナギーノ

のトーマス主義との闘爭の中にあつて、ムッソリーニの「暴力の神聖」をして、新ヘーゲル派クローチェ並にゼンチーレの愛國主義とダヌンチオのラテン主義とを、統一せしめる。かくて、ヨーロッパ主義よりローマ帝國主義へ移行し、世界史的變革の段階に對應すべきファシズム哲學體系を用意すべくイタリア百科全書學派を構成する。

このことはナチス・ドイツに新光を投げ與へ、ゲルマン的神聖ローマ帝國主義によるヨーロッパ主義の再構成を企てしめ、此處に不安の哲學的人間學は建設の哲學的歴史學へ急轉し、ヒトラーの「我が闘爭」を經て、二十世紀を後繼するヨーロッパの傳説となるべきローゼンベルク「二十世紀神話」の合理化運動に入る。

此の伊獨のヨーロッパ再構成への哲學は、近世ヨーロッパのオーソドックスたるフランス哲學をして、その自己維持の傾向を一層强化せしめ、人民戰線哲學を近世ヨーロッパ主義の陣營内に吸引せしめた。嘗てヨーロッパ近世に對する否定的役割を果すべく、世界史の上に立ち上つたソヴィエト・ロシアをして、一方では此の伊獨の再建を、他方では東洋の勃興を牽制せしめつつ、フランスとイギリスは自己のヨーロッパ主義的近世世界の壟斷を維持すべき協同戰線を固める。かくて、英佛は自己の哲學の任務をして、自己の近世人間の知性の普遍性を合理化せしむべき段階に入つたのである。

此の英佛近世の合理化哲學は、昭和日本に向つて、自己の番犬たる日本ヨーロッパ主義者を媒介として、一方ではファシズム並にナチス發展を制壓せしむべく、他方では日本世界主義の不合理性を論證せしむべく、甚しい勢ひをもつて押し寄せた。此の潮流は反ファシズムの自由主義者、反ナチスの「哲學的人間學」並に「不安の哲學」者流、唯物論者を合流し、此處に西ヨーロッパの此の瞞著哲學は、昭和日本知識階級並に支配階級の聖典と化さんとする。洵に、女の流行はパリより、男の流行はロンドンより來る樣に、文化流行はフランスより來り、男性のスポーツたる政治の流行はイギリスより來る。此の冒すべからざる近世教養を受けしめられたる日本知識者は、流行病患者の習性を獲得し自己の知性と關心を常に西ヨーロッパよりの輸入流行型に對して敏捷に活動せしむべき慣習的訓練を怠ることがない。此處に昭和の欺瞞哲學時代はいともたやすく生み落されたのである。

3　日本哲學時代

ベートーフェンは「人間よりも一本の樹木を愛する」と云つた。十九世紀初頭、既に人間に對する侮蔑の聲はヨーロッパの中から聞えてきた。自然と世界との人類的統一を願ふ幾つかの魂は、狂氣しながら土となつた。そは洵に、人類文化の古典、東洋への追慕であつた。

すべてを奪ひ來らんとした人間は、その自己の作つた諸關係のなかで縛り上げられ、死滅し、最も醜惡なる一片の物質と化した。恰も蜘蛛が嵐に吹き捲くられた自己の巢網に纒はれて悶死するやうに人間は自己の近世的諸關係のなかで悶絶してしまつた。資本主義國家に於ては、商品的物質が、植民地に於ては奴隷的肉體が、人間のやうな顔をして歩いてゐるのである。この慘めなる人間亡靈はその蒼白なる口から、人間を分析したり解釋したりする慣習的な言葉を單に吐き出す。

二十世紀はかかる亡靈の陳列會場となつた。其處には最早や、人間を侮蔑する精氣もなく、まして新なる歷史創造に參與すべき生命もない。亡靈が亡靈を慰める。――近世は人間を自由にしようとしたのです。近世の知性は進歩の味方だつたのです。日本人だつて此の近世知性によつて甫めて人間らしくなりさうになつたのです。――

眼を此の會場の右の方へ移すと、日本の着物をつけた亡靈が洋服姿の死靈と話してゐる。すべての存在は普遍性と個別性との具體的統一としての特殊であり、從つて日本の思想も文化も他の國或は民

族に於けると同様、特殊なものであると。そして更に續けるのである。——日本の此の特殊性を日本と世界との關係のなかで磨き上げてゆかねばならない。世界と交渉し協調しながら、自己の築き上げてきた此の特殊性を更に發展せしめなければなりません。つまり正直に云つて了ふと、日本はもつと世界の中に入り込まなくてはいけないし、日本人は更に世界的になる必要があります。だから、日本は現存の普遍的な世界關係と衝突するやうな、謂はば國家的利己主義を捨てて、その世界關係のなかに入つて圓滿に自己の特殊性を發展させなくてはいけません。——

諸君。哲學は斯の如く、此の矛盾と死靈の外何ものもなき近世世界を維持し、合理化せんが爲のものであらうか。近世的世界を普遍化した西ヨーロッパ的主體が、自己の普遍性を永遠に確保し行かんが爲に、此の慘澹たる人間、社會、國家、民族の中に死臭を吐き出せる諸矛盾を隱閉すべく、狂奔せる欺瞞哲學に手頼つて、今日猶も、その痴性とその世界に哲學は奉仕すべきなのか。

近世が中世を打ち破らんとした時、その近世を方向づけた哲學は、洵に中世にとつては不合理なものであつた。ギリシア都市文化を構築し、その普遍化を企圖せる哲學は、古代東方民族文化に對して鬪爭を開始せねばならなかつた。釋迦族の印度南進による自己普遍化の哲學は、印度中國を占據してゐたヴェーダ並にウバニシァード文化にとつては敵であつた。日本が諸民族の統一國家を創り上げた

其の神動は、その前段階における古代諸民族文化にとつては不合理であつた。

これらすべての新興哲學は常に不合理であり、個性的であつたのである。其の不合理性が合理的と成り、その個性が普遍的と成る、其の歴史形成を方向づけ體系づけることこそ、哲學の本來の任務であつた。このことは强ち日本や支那、印度やオリエント、ギリシアやローマ、蒙古やアラビアの如き偉大な世界史的役割を果せる世界文化の高峯に於てのみ語られることではなく、近世ヨーロッパを世界普遍的となしたイギリスの海賊哲學に於ても亦さうであつた。

今日の近世的普遍性に戰ひを挑み、其處に曝露された世界の苦惱を背負つて、新なる將來史を建設せんとするエネルギイに、其の理念と方向を與ふべき哲學の時代。それが此の今日なのである。

今や、西洋の近世世界史獲得の主體は三重の矛盾の坩堝の中に陷つた。もと、ヨーロッパ資本主義社會は近世國家を形成する途上に於て、アフリカ、アジア、アメリカ、オーストラリアの全地球の大陸諸民族に對する經濟的、政治的、軍事的、思想的鏖殺を敢行しつつ、富並に文化の掠奪的蓄積をなし得たのである。此の民族搾取の完成は一方に於ては、其の資本主義國家自體における社會的階級の對立を激化し、漸くプロレタリアートは生產せずして富と文化を享受しうる「人間機械」――生產の人間機械に對して、消費の人間機械とならんことを欲する。他方に於ては、被搾取民族が既に西ヨー

ロッパの獨占となり、それに對する「持たざる國家」の生存競爭的襲擊を激化する。

此のヨーロッパ自體における二重の矛盾は、其の資本主義的國家形態を完成せしめたる被搾取民族の獨立的反擊による世界史的矛盾と共に、今や世界變革の哲學を要求するに至つた。併し、西ヨーロッパは此處に至つて、持たざる國とプロレタリアートと植民地並に半植民地民族の三者に對する綜合的彈壓の思想陣營をもつて、自己の世界普遍性を强化せんとする。斯の如き自己維持哲學はその深刻にして多角的な自己矛盾を克服し得ざるのみか、克服することを欲せず、徒に自己隱蔽の醜惡を繰り返すのみである。

かくて、近世主體たる西ヨーロッパの悲劇は、階級革命と第二次歐洲大戰への道を用意しつつ、他方では民族解放の世界戰爭への必然性を生長せしむる。此のヨーロッパに、誰か眞に世界戰爭を導き將來世界史を方向づけうる哲學の出現を期待しうるであらうか。

さよう。もし期待しうるならば、それは正しく「これかあれか」のキェルケゴール的放棄によるヨーロッパの悲痛なる聲であり、「西洋か東洋か」、「死か生か」の最後の叫びであらう。然らずんば「此の人をみよ」と狂喚しつつ、ヒンヅークシの高峯より降り來るニイチェ的憤懣を出でないであらう。

今や西洋の沒落と東洋のルネッサンスを通して、新世界を建設すべき蓄積的エネルギイ、日本に自己の世界哲學をもたしめよ。その個性が世界普遍性を獲得しゆかなければならぬのであつて、斷じて此の日本哲學は近世の世界普遍性と自己との妥協たる特殊性であつてはならない。

4　世界哲學時代

哲學は最も實踐的なものでなければならぬ。實踐は最も哲學的なものでなければならぬ。唯この場合、哲學は世界が正しく解釋せられるが如くに、エネルギイをして實踐的に解決せしむるものであり實踐は正しく自己が方向づけられるが如くに、哲學をして理論的に體系づけしめるのである。

世界變革におけるる日本エネルギイは、從つて必然的に、自己を方向づける理論體系として、日本哲學を樹立せねばならぬ。此處に哲學は本來の歷史構成としての實踐的役割を果す。併しながら、哲學體系をして、現實的に展開せしめうるエネルギイがないなら、如何なる哲學も唯文獻的役割を爲すに

過ぎぬ。また方向なきエネルギイは現實的に存在し得ず、もし哲學的理念なき歴史構成力が存在し得たとすれば、それはたかだか世界史の變革の谷間に屢々現れてゐるが如き暴力に過ぎぬ。

既に、近世史の主體となりて世界を支配したる西ヨーロッパ國家は、自己自身の作れる世界史的矛盾のなかに壞滅せんとする。ノアの洪水が今や來らんとする。近世史を苦悶の中に支へ來つた諸民族、「黄金の道」を通して掠奪されたる東洋の諸民族をして、ノアの方舟を造りて、新なる世界正史建設に協力せしむるものは誰か。

東洋諸民族の協和國家として、統一國家の世界史的古典を發展しつつ、二千六百年間、自己に最もふさはしき世界史的役割を果さんが爲に、諸民族文化とエネルギイの蓄積を成し來つた日本のみ、諸民族の解放と再建の使命を擔つてゐるのである。此の解放と再建の鬪爭を通して、世界建設の輝しき時代が續く。併し、このことは必然的に、近世主體たる西ヨーロッパへの反撃であり、從つて西洋と東洋との世界戰爭に外ならぬ。

今や既にイギリスは英佛軍事協定を結び、蔣政權並にソヴィエト・ロシアをして、斯の如き日本エネルギイの消耗を導かしめつつ、他方では日本の資本主義的支配階級並に知識階級をして、自己の欺瞞哲學を信奉せしめ、以つて日本エネルギイの方向轉換を劃策せしめんとする。併し、日本の歴史創

造力は肇國の古へより其の方向を誤たず、自己の日本哲學をして再び敢然と立たしめねばならぬ。

東洋諸民族の悲慘を背負うて、それらの歷史を修理固成せんとせる、中外に施して悖らざる日本哲學は、その廣大なる宇宙論とその歡喜に滿てる國土建設とその協和の精神との統一體系である。それは洵に、日本の神話であつたばかりでなく、東洋再建の神話となり、軈ては新なる世界創造の神話とならねばならぬ。

神話は、あらゆる民族に於てさうであつたやうに、歷史構成の方向であり、その體系に外ならぬ。それは歷史を方向づけつつ、後代を生くる傳說として、民族の普遍的精神となる(註)。また逆に、歷史は神話を普遍化するのであつて、然らざる歷史は自己の歷史を閉ぢ、新なる歷史が再び自己の神話を求める。

(註) 拙著改造社版「世界創造の哲學的序曲」を參照されたし。

斯の如く、神話は歷史を方向づけると共にその歷史によつて現實的に解釋される。東洋再建の神話も亦、その歷史建設によつて、自己の現實的な解釋を受けるのである。然るに、東洋再建は近世史の否定であり、新なる世界史の誕生に他ならぬ。この世界史の建設こそ、自己の神話を解釋し、その神話を自己の世界の普遍的精神と化す。

日本哲學をして世界哲學たらしむる此の大なる世界建設の時代は、既に横へられた。此の壯なる世界戰爭をして、輝ける世界の傳說たらしめよ。

三　日本建設論

1　世界學派

近世の歴史は既に滅亡せんとしてゐる。併し、何人もそのことを單に混沌なる危機としてのみ把へ將來の歴史を建設すべき輝しい方向に於て把握しようとしない。古代に於ても中世に於ても、自己の世界體系が崩壞してゆく時には、常にさうであつた、唯、最も鋭敏にして高邁なる魂のみが、ノアの方舟を作ることを知つてゐた。

搾取され否定されたる諸の民族と階級は、その舟に乘りて變革の荒海を渡らんことを欲してゐる。世界史の革新を導くものは、その舟と舵を最も强靱に作り上げねばならぬ。日本エネルギイはこのことの爲に、洵に永い間蓄積の過程を辿つてきた。今日迄の日本史は、實に此の民族解放の世界戰爭を遂行せんが爲の訓練の鬪爭史であつた。

併し、未だ日本はその舵を握らず、その櫓をもたず、概ね近世史の藻草として漂泊する人々を、徒に眺めてゐる。峻嶺に立ちて、此の渦巻く大海を俯瞰し、世界史を審判すべき哲學的精神は、今やその方舟を作りて、日本エネルギイをして自己の舵と櫓を固く執らしめよ。

新なる世界を赤心もつて意慾する者のみ、眞の世界史創建の現實的な體系樹立に參與すべきである。嘗て、ギリシア都市國家がペルシア帝國を否定して、自己の新なる地中海史を世界史となさんとする意慾は、自己のアカデミアを樹立した。プラトーンやアリストテレースの哲學は、その後に續くマケドニアやローマの世界史獲得を導いたのであつた。それは、恰も原始儒敎が戰國時代の否定を通して、新なる漢民族の統一文化圈を形成・發展せしめ、或は原始佛敎が自己の實踐的エネルギイをマウリヤ王朝の印度統一力に求めて行つた如きものである。

このことは、詔勅に象徵化されてゐる如く、諸民族の統一を通して新なる日本建設を修理せる肇國

の理念が、その後の歴史的發展を方向づけた共のことのうちに、最も典型的に表現されてゐる。サラセンや唐の擡頭によつて、世界史が新なる擴大と聯關の中に呼吸し始めた西暦七世紀よりの一世紀間こそ、日本は十世紀間に餘る諸民族統一史を閉ぢて、自己の統一的形態を中外に宣揚すべき時代であつた。

大化改新を導き、共の後の歴史形成の理念體系を構成せる肇國の理想は、玆に書かれたることばとなつた。和銅五年――西暦七一二年――古事記は、新なる世界展開に應ぜるアジア太平洋圏の國生みを顯彰し、日本國家の據つて立つ處を永遠化する。それは實に世界史の新なる段階に立つて、宇宙と世界史とを日本史として統握したものであつた。これと共に、西暦七二〇年、日本書紀は斯の如きアジア圏の世界史的躍動の中に自己を明澄化した日本史を、世界史の統一形態として大陸に宣揚したのである。此處に、天照大神の詔勅は世界史の日本的把握と共に、日本の世界史的把握の方向を導きつつ後代を生きる傳説となり、日本は人類史の主體として、自己の統一形態を諸民族に賦與すべきエネルギイの蓄積過程を辿るのであつた。

かくて、他の民族に於ては學派として或は教團として、後代を指導せるイデオロギイは、日本にあつては人類宗教としての神話形態をとつて、國家そのものが大なる世界の學派を形成するに至つたの

である。斯の如き神話形態を意圖せるものは、偉大な古代的民族のうちに見出し得るのであるが、概ね學派或は教團のうちに解消し、その世界創造の象徴體系を民族の神話として、現實的に生くるものは、奮舊約的民族と日本民族とのみである。併し、ユダヤは國家として成立し得ず、獨り日本民族のみ「世界學派」として、最も淨化統制化されたる形態に於て、世界創造の現實的地盤を發展し來つたのである。

此の世界史的變革の洪水の眞中に、此の日本世界學派は自己の實踐的體系の諸陣營を布陣すべく、方舟を漕ぎ出でんとする。

2　日本イデオロギイの二面性

斯の如き世界學派としての日本神道は、もとペルシア帝國の崩壞後、既に第一部第二章に於て觸れた如く、古代的民族移動の南北世界史通路の激動に應ぜる原始佛敎、原始儒敎と並んで、最も優れて

諸民族宗教の統一形態として成立したものであつた。それは南北通路の融合歸一として、佛教的天地開闢説と易經にみられる如き天地創造神話、或は道教や舊約にみられる如き宇宙論を、最も綜合的にして、最も現實的に構成したものである。天皇哲學は此處に世界學派として生誕したのであつた。

併し、その後十世紀を經て、アジア太平洋圏が三大民族文化形態――サラセンと唐と日本を確然と分立せしめた世界史的變革期に、世界學派たる日本神話は再び自己を明確に體系化した。此の大化改新即ち記紀時代は、ローマ帝國の分裂・崩壞に從つて共の世界史通路たる「絹の道」を繼承して行つたサラセンと唐に對抗して、遣唐使を迭りつつ、アジア國際關係において、自己を主張せねばならなかつた。かくて唐文化と日本文化との燦然たる交流史が展開されたのであつたが、その後二世紀を出でずして宋の勃興に伴ふ宗教ルネッサンスの潮流の中に立たねばならなかつた。此の淨土教の擡頭期こそ、正に平安後期であり、嘗て聖德太子によつて統制化された奈良・平安佛教の形骸化に對して、「源氏物語」や「榮華物語」の如きものに表徴された日本文化ルネッサンスが興らんとする。

既に律令制は崩壞し、日本史は貴族的僧侶的文化より國民的文化へ擴大され、展開されんとしたのであつた。併し、莊園武家の生長によつて、中世的封建制が構成されんとするや、世界學派としての日本イデオロギイは最も矛盾と苦惱に滿ちた形相をとり始めた。西暦十三世紀初期、承久亂を導くべ

き必然性のうちに、比叡山座主、慈圓は一方に於ては皇室・公卿・武家の三位一體論を構成しつつも、他方に於ては斯の如き武家的中世封建制に對して、古典的日本世界學派としての國民文化の側に立つて、平安末期の日本ルネッサンスを發展せんとする。彼は佛教的道理によつて日本史の變革的段階を肯定しつつ、武家的中世を理論化し、他方では和歌に象徴されたる日本古典の國民的發展としてのルネッサンスを强調するのであつた。

「愚管抄」こそは、洵に此の矛盾の苦惱であり、記紀並に聖徳太子的統一理念における如き高邁な世界主體としての自覺が、國民的ルネッサンスを展開せんとした時代の社會的・政治的矛盾の表現であつた。そして同時に、アジア圏における宋の擡頭に對して、自己凝結的形態をとるか、自己擴大的形態をとるかの實朝的苦悶を代辯するものであつた。此の慈圓における、日本イデオロギイの二面性は、恰も神聖ローマ帝國におけるアルベルッス・マグヌスの法王的僧侶的中世と國王的騎士的中世との對立を綜合しつつ、實は十三世紀のヨーロッパに對するルネッサンス的先驅をなせる二面性に類推さるべきものである。

併し、此處で特筆すべきことは、正にアルベルッス體系が一面に於てトーマス・アキナスの中世イデオロギイ體系を完成せしむると共に、他面では十四世紀より三世紀間に渡る近世ルネッサンス的動

亂を媒介せる哲學的役割を果した如く、慈圓は鎌倉幕府の中世イデオロギイを構成すると同時に、他方では親鸞、日蓮などの宗教ルネッサンスへの道を用意したのであつた。彼は此の變革期に立つて、イデオロギイとしての日本史を統一し、幕府の成立と共に現はれた「吾妻鏡」の如き記錄史に對立して、「歴史建設としての歴史學」を樹立したのである。

斯の如き日本ルネッサンスを導かんとする哲學的努力は、元寇に至るまで武士的中世の自己凝結によつて開華し得なかつたのであるが、蒙古の北方世界史通路の再建を通して、日本アジア圏の再建の必然性のうちに、甫めて華々しい實りをもち始めんとするのであつた。十四世紀前半、元朝末期における日本の宗教ルネッサンスは、日本の世界史的再建と國民的文化復興への自覺を齎しつつ、「神皇正統記」への地盤を培つたのである。

然るに、沒落しゆく元の尨大な世界圏と提携しつつ、自己凝結期を維持せんとする幕府は、北朝を戴いて自己繼續を企圖する。他方では、平安末期より欝勃として興り來つた日本世界主義の國民文化の底流は、日本ルネッサンスを押し流しつつ、北畠親房をして遂に日本世界圏の再建イデオロギイを構成せしめるのであつた。かくて、建武中興は瓦解しゆく元朝末期を越えて、從つて其の共同圏内を猶も彷徨せんとする日本中世封建制を否定して、再び神皇の古典的世界學派を翳して新なる國民的エ

ネルギイを方向づけんことを望む。

此の維持形態と革新力とは、半世紀に餘る南北朝對立を經るに至り、遂に足利の貴族的・武家的封建制へ逆轉したとはいへ、神皇正統記によつて理念づけられた新國民エネルギイは、日本內外に重要な二大表現をとるに至つた。即ち、足利封建制の矛盾は國民的地盤の高揚を制禦し得ず、國內にあつては守護の擡頭を來し、大名的封建制への移行を必然化し、國外にあつては和寇となつて、日本世界主義を果敢に實行するのであつた。

このことは、室町時代における日本イデオロギイの二大陣營を構築せしめた。その一は、德川中期の國學への門をうち開いた室町和學であり、其處に儒佛の統一者たる日本哲學を生んだのである。その二は、豐受大神の外宮的イデオロギイであり、其處に神皇正統記と並んで伊勢神道の發展が始まる。かくて、日本書紀の神代之卷は易經と道敎を神道化すると共に、密敎の神道的闡明を企て、支那並に印度の世界史的統一に對する日本哲學を構成したのである。今や天竺と震旦は扶桑——日本を主體として、アジア世界圈の統一形態の中に入らんとする。

成吉思汗戰爭によつて打ち開かれたウラル・アルタイ通路は、ヨーロッパを經めぐつて印度ムガール帝國に歸り來り、漢民族の最後の息吹ともいふべき明朝は、日本世界主義の勃興によつて挾殺され

んとする。この勢ひは、室町末期における中世的家族制度を崩壞せしめ、貴族的武家の沒落を導きつつ、應仁の亂を經て、斯の如き日本の旺溢せる國民的エネルギイを代辯する如き織田・豐臣的形態を要求し、此處に日本國家の世界史的發展を方向づけるのである。かくて、伊勢神道は吉田神道へ展開し、和學と並んで、十五世紀後半における大なる變革的大海を渡る。

神聖ローマ帝國の瓦解に次ぐ東ローマ帝國の崩壞、漢民族の衰頽と共に、ヨーロッパ近世ルネッサンス、トルコ勃興、日本の統一的宣揚が開始され、此處にヨーロッパ世界主義と日本世界主義との對立は、今や世界史的怒濤となつて激突せんとするのであつた。

吉田兼倶は唯一神道をもつて、此の日本エネルギイを理念化しつつ、秀吉戰爭をして滿洲民族を統一せしめ、北方世界史通路の日本的再建を企てしめ、他方ではサラセンと協力してその殷盛を齎した南方世界史通路の日本的復興を企圖せしめる。即ち秀吉の「印度副王宛書狀案」にみる如き、唯一神道の力强い表現が世界史を濶步せんとするのである。かくして、北京を中心としてマレー半島、スマトラより黑龍江に及ぶアジア太平洋圈の統一形態建設の、秀吉戰爭による日本建設が始まり、神功皇后戰爭への復古運動の發展をみる。このことは、世界の決定的な東西戰爭を激發するに至らなかつたとはいへ、一方に於ては明朝の瓦解、滿洲族清朝の發芽を可能ならしめ、他方に於ては豪壯なる日本

近世ルネッサンスを發展せしめたのである。それと共に最も重要なことは、南北世界史通路の統一的把握による日本世界建設への理念とその實現者としての日本戰爭の概念とを、日本世界學派の指導原理をもつて後代に明示したといふことである。

日本戰爭は世界統一形態の神話的構成であつて、「世界ルネッサンス」を顯彰すべきものでなければならぬ。このことの爲に、日本史は幾度か自己凝結期を繰り返しつつ、從つて凝結と擴大との二面性の苦惱を日本哲學に負はしめつつ、近世的世界の段階に入つたのである。

3　世界ルネッサンス

吉田神道は斯の如き大なる革新的發展を導かんとしたのであつたが、その日本近世ルネッサンスは十七世紀の自己凝結によつて中斷され、近世の世界史的潮流の中に圍まれながら、ヨーロッパの植民地化勢力を喰ひ止めるべき悲痛な自己矛盾の中に陷つたのである。此の日本の內的矛盾は、日本世界

學派としての神道を隱蔽しつつ、從つてアジア的宇宙論を後退せしめつつ、朱子學派の人倫的側面に賴つて自己を收拾せんとする。かくて、林道春は「本朝通鑑」をもつて、大名的封建制の構成を理念化し、德川の覇道的統一を完成せしめるのであつた。此處に日本近世の「人間學的倫理」の基礎は置かれ、日本古典としての「世界學的倫理」は湮滅されんとしたのである。

併しながら、此の覇道的統制としての人間學は、吉田神道並に和學によつて培はれた廣大な世界學を克服し得ず、その豐饒な國土のうちに再び水戶學派と國學の擡頭をみるや、形式的學校哲學へ凋落してゆくのであつた。これに反して、荷田春滿は和學を繼承發展せしむれば、他方では德川封建制そのものの中から水戶學派は展開され、日本史はヨーロッパ的近世世界に對する自己確立を遂げんとする。

此處に「大日本史」は神皇正統記を繼承して、十七世紀中葉より二世紀半に亘る大業の緒に就く。併し、それは恰も朱子學的實證學派を構成したる新井白石の矛盾と苦惱に滿ちた運命の如く、尊王と幕府との統一を意圖せざるを得なかつたのである。此の德川の內的矛盾の象徵ともいふべき「讀史餘論」は朱子學に方向づけられた幕府イデオロギイを代辯するものであり、「大日本史」は神皇正統記に理念づけられた幕府世界學に外ならぬ。それは儒教的皇學であつた。斯の如き理論構成は、正しく

近世の資本主義的支配形態と日本古典とを統一せんとする現代の日本ファシズムと相通ずるものである。それはヨーロッパ的皇學である。

然るに、此の德川期におけるヨーロッパ近世の世界史的潮流が既に日本エネルギイを大洋におびき寄せんとするや、日本史の自己凝結の內的矛盾は喚聲をあげて爆發せんとする。其處に、日本世界學は朱子學派の世界學的側面と結び付きつつ、日本史の方向を指示すべき哲學的精神を搖り動す。先きに山鹿素行、幕末に賴山陽は、斯の如き日本エネルギイの理念的體系化を企てたものである。洵に素行は日本學建設としての「戰爭哲學」を構築せるものであり、山陽は國體の世界史的闡明を通して日本の新なる方向を明示せんとする「歷史藝術學」を完成せるものである。

此の明治維新への過渡期に於て、幕府は鎌倉の「吾妻鑑」や、室町の「後鑑」を追うて、自己の記錄史を「德川實記」に編纂し、史觀喪失による「末期的歷史學」を製作する。このことは、明治維新後の史料編纂所における「大日本史料」に相通ずるものである。正に史料編纂所の役割こそ、謂はば「ヨーロッパ的日本鑑」として、憐むべき末期的歷史學の標本を、博物館に陳列する光榮に浴するであらう。

然るに、今や儒教的水戶學派と神道的國學と西洋思想との三位一體としての明治維新イデオロギイ

は、再び古典的日本世界學の世界史的把握の必然性に迫られ、近世世界學の崩壞の中に、高き精神をもつて將來史を明示するに足る哲學體系にとつて代はられんとする。單なる史料編纂の歷史學或は一學派に關する趣味哲學或は一戰爭の專門的戰爭學の時代は去つて、統一的世界學を提示すべき世界史的變革期に入つたのである。

明治維新は、此の世界史的變革を用意すべく、日本エネルギイの近世的統一を敢行せるものであつて、中外に施して悖らざる國家形態を再確立したものであつた。今日旣に、ヨーロッパの世界的植民地帝國の瓦解と共に、其處に否定されたるアジア諸民族の解放が始まらんとせる時、その近世世界史の崩壞を通して將來世界正史を展開すべき日本エネルギイに對して、世界民族の方舟を建設せねばならぬ。このことの爲に、明治維新による日本再確立が存したのである。

然るに猶も、此の方舟を建設すべき日本イデオロギイは、嘗て屢繰り返へされた二面性のうちに呻吟する。沒落しゆく世界近世史と共に步める日本近世的主體は、新なる日本の世界史的躍動を喰ひ止め、恰も德川期における如き萎微せる學校哲學的イデオロギイと結托して、日本世界學派を後退せしめつつ、自己維持的合理化を圖らんとする。それは、此の大なる世界建設に對して、德川末期における心學的人間學、考證學的歷史學、朱子學的學校哲學に類推さるべき哲學的人間學、實證主義歷史學、

西洋近世的哲學の末期的諸學派を掩護し、日本矮小化を意圖する。此處にリベラリズム、文化主義、マルキシズム、世界的日本主義の諸陣營は統一され、近世世界に對する日本の協調的自己凝結が劃策されたのである。

併しながら、斯の如き日本イデオロギイの萎縮面は、一方ではサラザールやフランコ、ヒトラーやムソリーニのヨーロッパ變革の媒介的役割を通して、他方ではマルキシズム並に日本ファシズムのアジア變革の過渡的機能を經て、日本世界主義の擴大面の中に消滅すべき苦悶の宿命を負うてゐる。蓋し、世界史はアジア諸民族のルネッサンスを通して、新なる段階に入るべき必然性をもつて、日本エネルギイをして其の必然的實行を既に敢行せしめつつある。このことが眞に世界ルネッサンスを建設すべき日本イデオロギイの確立を要求してゐるのであつて、此處に世界史の日本的把握と共に日本の世界史的闡明を必須とするのである。

今や、天岩戸をうち開かしむる程の大なる笑ひが起らねばならぬ。かくて、日本史は世界史として書かれ、煌々として新なる世界の諸關係が打ち建てられる。このことこそ、日本エネルギイの歴史的實踐に外ならぬ。世界史をして此のことを證明せしむべき歴史的實踐を、日本哲學に意欲せしめよ。

億兆安撫國威宣布の宸翰

朕幼弱を以て猝に大統を紹ぎ爾來何を以て萬國に對立し
列祖ニ事へ奉らんやと朝夕恐懼に堪ざる也竊に考るに中葉　朝政衰てより武家權を專にし表ハ
朝廷を推尊して實ハ敬して是を遠け億兆の父母として絕て赤子の情を知ること能ざるやふ計りな
し遂に億兆の君たるも唯名のミに成り果其が爲に今日　朝廷の尊重は古へに倍せしが如くにて
朝威は倍衰へ上下相離るゝこと霄壤の如しかゝる形勢にて何を以て天下に君臨せんや今般
朝政一新の時ニ膺り天下億兆一人も其處を得ざる時は皆　朕が罪なれバ今日の事
朕自ら身骨を勞し心志を苦め艱難の先に立古
列祖の盡させ給ひし蹤を履ミ治蹟を勤めてこそ始て　天職を奉じて億兆の君たる所ニ背かざるべ
し往昔
列祖萬機を親らし不臣のものあれば自ら將としてこれを征し玉ひ　朝廷の政總て簡易にして如此
尊重ならざるゆへ君臣相親しミて上下相愛し德澤天下に洽く國威海外に輝きしなり然るに近來宇

內大ニ開け各國四方に相雄飛するの時に當り獨我國のミ世界の形勢にうとく舊習を固守し一新の
效をはからず　朕徒らに九重中に安居し一日の安きを偸ミ百年の憂を忘るゝときハ遂に各國の凌
侮を受け上ハ
列聖を辱しめ奉り下ハ億兆を苦しめん事を恐る故に　朕こゝに百官諸侯と廣く相誓ひ
列祖の御偉業を繼述し一身の艱難辛苦を問ず親ら四方を經營し汝億兆を安撫し遂にハ萬里の波濤
を拓開し國威を四方に宣布し天下を富岳の安きに置んことを欲す汝億兆舊來の陋習に慣れ尊重の
ミを　朝廷の事となし
神州の危急をしらず　朕一たび足を擧れば非常に驚き種々の疑惑を生じ萬口紛紜として　朕が志
をなさゞらしむる時ハ是
朕をして君たる道を失はしむのミならず從て
列祖の天下を失はしむる也汝億兆能々
朕が志を體認し相率て私見を去り公義を採り
朕が業を助て　神州を保全し
列聖の神靈を慰し奉らしめば生前の幸甚ならん

哲學的世界建設

昭和十三年十月十日印刷
昭和十三年十月二十日發行

定價壹圓八拾錢

著者　小島威彦

東京市麴町區有樂町壹丁目四番地
日本問題研究所
發行人　波多尙

東京市麴町區有樂町壹丁目十四番地
印刷人　中村伯三

東京市麴町區有樂町壹丁目十四番地
印刷所　株式會社大参社

東京市京橋區銀座西五丁目五番地
菊地ビル内
發賣所　世界創造社
電話銀座(57)三五四六番
振替東京一一六一四二番

仲小路彰著　日本問題研究所發行

世界戰爭論

菊判三二八頁
定價二圓五十錢
送料十六錢

戰爭は、存在そのものの根源的矛盾による一民族、一國家或は國家群の最大最高の全能力・全生命力を集中・凝結せる人類における活動性の最も強力なる發揮といふべく、まさに社會における各領域の全體的聯關の最深なる自己表現である。それは單に平和に對立するものではなく、却つて世界史の劃期的發展を實現するものである。我々日本人は、今や來るべき世界戰爭の世界史的意義を十全に達成するために、この世界の全面的把捉をなすべき「戰爭學」の建設を必須とする。此處に全日本に對して最も創造的なる戰爭學を贈る。

清水宣雄著　アジア問題研究所發行

アジア宣戰

四六判二五二頁
定價一圓五十錢
送料十二錢

何が故にわれらはヨーロッパ文化を變革し、古き文化の傳統に生きるアジアの文化をもつて、新しき世界文化を創らなければならないか？　何が故にわれらは、政治的にも、經濟的にも、文化的にも、世界のヨーロッパ的現機構を變革して、世界に新しき樣相を持ち來さなければならないか？　この新しき世界史の認識のために、今こそアジアの宣戰はなされなければならない。

世界創造社發賣

13年 12月 9日 164

新井

13.10.13